

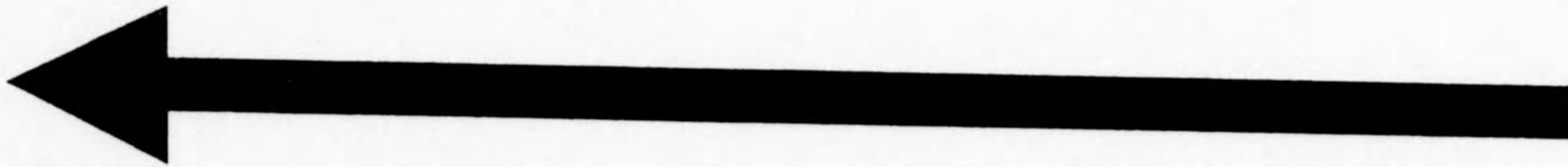
810. 4-Ka48



1200500753202



始



岡

K 10

5



97



810.4

KA 48

文學博士金澤庄三郎著



國語



の研究

東京同文館藏版



朝鮮の言葉は國語と同じ系統の、しかもずつと古調を帯びたものである。その音韻その語格いづれも古事記萬葉の時代を超えて、もつと古に溯つてゐる。つまり今日の朝鮮人は稗田阿禮よりも古い言葉を使つてゐる譯であるから、國語の研究者にとつてこんな結構な材料はない。このことに就いては、及ばずながら今日まで色々談して見たが、どれだけ世間に認められてゐることであるか。こゝに集めた論文の多くは、既に過去に於て發表したものであるが、今改めて一卷の書として公にする意は、更に世人に向つてこの學術的富源の開發を促さんがた



めで、自分としてはこれからの仕事の序文の積である。

明治四十三年十二月朝鮮見學の途に就かんとする前數日

東京本郷駒込の寓居にて

金澤庄三郎

目次

假字の起原	一
諺文の起原	九
五十音圖に就いて	三
日韓音韻比較研究の一節	五
延言考	六
形容詞考	八
活用に關する私見の一節	七
名詞の性に就いて	六
所相に就いて	五

一種の敬相に就いて……………七
 指定の助動詞に就いて……………五
 國語變遷上の二勢力……………八
 外來語に就いて……………六
 郡村の語原に就いて……………九
 寧樂考……………一〇
 日韓の古地名に就いて……………一〇
 敷島考……………一四
 神奈備考……………一七
 家族の稱呼に關する二三の考……………二三

耳目鼻口……………二六
 東西南北……………三三
 古事記の一節に關する私疑……………三六
 韓國に於ける言語上の遊戯……………四四
 國語學に對する予の希望……………五一
 日韓滿蒙語の研究に就いて……………五七
 韓語研究の急務……………五九
 沖繩方言研究の必要……………七
 アイヌ語研究の必要……………一三
 漢字を整理する必要……………一九

目次

朝鮮の漢語に就いて……………一〇七

朝鮮に於ける國語問題……………三三

探湯考……………二七

形容詞考補遺……………三三

東洋語比較研究資料……………三六

國語の研究



假字の起原

文學博士 金澤庄三郎著

我が國上古
文字なし
神代文字

日文と諺文

假字の起原

篤胤等一派の神道家は、所謂神代文字といふ我が國固有の文字があつたといふてゐるけれども、その多くは高等なる寫音的の文字であつて、文字の歴史上から見れば、かゝる古代に、何等の文字も参考せずして、此の如き高等なる文字を創作したといふことは極めて疑はしく、又便利な音標文字が滅亡して、不便利な漢字がこれに代はるといふことも信じられない、殊にその中の日文といふものは、相違なく韓國の諺文を輸入したものである。されば

漢字利用の初期

我が國人は漢字の輸入せられるまで、文字を知らなかつたのである。我が日本人が漢字を學び、その效用を知つて、始めてこれを國語の上にご利用したのは、固有名詞であつたらう。我が國の古地名を寫してある漢字は、多く古い字音を傳へて居つて、これを韓國の字音と比較すると、一致するところが多いのである。

地名	韓音
望多	マグタ……………mang-ta
甘樂	カムラク……………kam-rak
伊香	イカゴ……………i-hyang
相樂	サガラ……………syang-rak
當麻	タギマ……………tang-ma
美囊	ミナギ……………mi-naug

漢字音の應用

かくて始めは、専ら漢字の音のみを假りて用ひて居つたが、後次第にその使

字訓の混用

義訓・戲書借字

用に熟練するに従つて、訓をも混用することゝなつたのであらう。故に『古事記』『日本書紀』の歌や割註などの如きは、皆字音のみで書かれてゐるが、『萬葉集』では訓の外、義訓・戲書借字などを用ふるまでに進歩してゐる。

冬風……………アラシ(嵐)	戀水……………ナミダ(涙)
重石……………イカリ(碇)	西渡……………カタブク(傾)
馬聲……………イ	蜂音……………ブ
牛鳴……………ム	喚鷄……………ツツ
慍……………イカリ(碇)	小竹櫃……………シヌビツ(忍)

假字の起原

また地名には、

直入 ナホリ……………ナホイリ

鹿蒜 カヘル……………カヒル

名張 ナバリ……………ナハリ

而して右の如く、字音なると訓なるとにかゝはらず、漢字を以つて國語をあらはすに、『古事記』や『書紀』の歌の如く、一字で一綴音をあらはすものもあれば、望多甘樂などの如く、一字で二綴音をあらはすものもあり、又馬聲蜂音の如く二字で一綴音をあらはすものもある。これ等が國語の性質によつて、使用の間に次第に淘汰せられて、遂に一字が一綴音をあらはすことゝなり、又常に用ひらるゝ文字の範圍も、大いに制限せられることゝなつた。

されど畫の繁雜な漢字を以つて、多綴語なる我が國語を寫すといふことは、極めて不便多い事であるから、遂にその略體即ち片假字が發明せられたのである。普通にはその發明者を吉備眞備であるとしてゐる。假字の事

字數と綴數

一字一音綴

片假字

吉備眞備

假字本末

に就いて考證該博で最も參考すべきものは、伴信友の『假字本末』である。その一節に

今按るに、吉備眞備公はきこゆる多才の儒者にて、中略そのかみ唐國に天竺より傳はりたりつる、悉曇の法を受習ひ來て、それに倣ひて、皇國の正しき音聲に轉し、音位を換へて、新に五十音圖を作り、さて對譯に用ふべき漢字音の區々にして同じからざるが故に、更に當時皇國通用の字音また訓をも借りて、姑く對譯のために四十五字を定め、其字の偏旁點劃を省きなどして、簡約なる一體の字を製り給へるが、いはゆる片假字にて、かく設置て、學生に便よく音韻反切を習はしめ、又漢籍の訓ざまどもをかつくゝ字旁に注し置などもして、教へ給へるものにぞあるべき。けれども漢字の畫を省略するといふことは、必ずしも眞備の創意になつたものではないので、已に支那にてもその畫を省いたものがあり、又韓國にもある。

略體は眞備の創意にあらず

衆……………众 從……………从
 暮……………合 嚴……………𠂔

勿論、支那で字畫を略するといふことは信友も述べて居るので、同じ書の中に

さて眞備公の片假字製られたるは、唐國の例に倣ひ給へるならむか。其は漢籍字林廣記などに見えたる、撫琴手法の譜の字の畫を省きて作る種々の中に、泛をノ、消をム、綽をト、急をク、吟をテ、掃をヨ、散をヰ、按をウなど作り、かゝる書ざまかの國の古き例なるべし。片假字のいとよく似たるをおもふべし。又此方にて、片假字出來たる後のものにはあるべけれど、古き書どもの中に、其書の趣によりて、摩魔などを尸、歴曆雁などを尸、密をウ、私をム、義を又、音を上、訓を凡、反をへ、また又、行從をイ、位をイ、權を才、歳を戈など作る類いと多く、又佛書に菩薩をササ、緣覺をヨヨ、琉璃をモモ、莊嚴をサム、聲聞をメメと作る類の書體もまた多かり。これらもお

萬葉集中の漢字の略體

のづから片假字製れる意に相似たる、はたおもふべし。しかし、我が國に於て漢字の畫を略したことは、すでに『萬葉集』の中にも見えてゐるのである。

村……………寸 趾……………止
 盛……………成 弦……………玄
 波……………皮 信……………言
 伎……………支 枳……………只

また眞備が片假字の形を定めたものとすれば、既にその時から、字形が一定してゐなければならぬのであるが、實際上、古代に於ては假字の字形は決して定つてゐない、種々様々であつて、略今日の様になつたのは、徳川時代の初世である。

かくの如く、複雑したる字體を省略して、簡單ならしめるのは、自然の傾であつて、文字史上より見れば、更に何等の價値もない現象である。たゞ我等

が我が國の假字文字を漢字に比して、一段の進歩と認めるのは、其の字體の簡單なのではなくして、よく一字一語を表はせる漢字から、一轉して一字一綴の假字を作り出したことにある。けれども又一考すれば、支那語は單綴語であるから、これを表はしてゐる文字を假りて、多綴語を寫さんとせば、勢一字を以て其の一綴を表はさなければならぬので、これも必然の結果である。

こゝに我が國の假字と比較して考ふべきものに、韓國の吏道がある。吏道に就いては、獨り信友ばかりでなく、その他の學者も概ねこれを諺文と混同して居た。『假字本末』に

朝鮮國に諺文といふ國音の字ありて、いさゝか片假字に似たる趣あり。其諺文をもて、漢文の書に其國言の訓を註し、又漢字を交へてよろづの事を註せるなど、片假字の用さまによく似たり。さて其諺文は、彼國にはやくより吏道とてありける字の、漸に差錯たりけるを、世宗と呼ぶ王が

吏道

吏道と諺文との混同

時、皇朝の應永の末の頃に當りて、正して改作れるものなり。

又

吏道といふは、朝鮮國にてはやく製りたる國字をいふ名なり。其は朝鮮にてもろこしの明律を印板にしたる本の跋に、中略此大明律書科條輕重各有攸當、誠執法者之準繩、聖上思欲頒布中外、使仕進輩傳誦習、皆得以取法、然其使字不常、人々未易曉、況我本朝三韓時、薛聰所製方言文字、謂之吏道、土俗生知習熟、未能遽革焉、得家到戶諭、每人而教之、哉、宜將是書讀之以吏道導之。中略とするせる吏道これなり。云々さて其律に吏道を書る處みえず。本書の律文の中間に衍字と見えて、文義を隔たる字の一ツ二ツ、あるひは三ツ四ツ綴りたるが數處あるは、洪武の原本の吏道を、更に漢字音を假借て書改て、別に刻りたるかたの本なるべきこと、跋文に考合せて明なりといへり。なほ按ふに、中略世宗が世におよびて、吏道の轉訛を再修し、改て諺文に製り行ひて、吏道は用ひざる世となりぬるに

假字の起原

わはせて、舊本の吏道にてはなかなかには紛はしければ、さらに刻板を造り、もとの吏道を諺文に改め、また其を漢字音を假借て、然は書なせるものなるを、跋文はなほ舊本のまゝにて、別に言をば附へざりつるものなるべし。

されどこれは翁の曲解で、かく漢字の音を假りて韓語を寫したものが、即ち吏道でもとより吏道といへる特種の文字があるのではない。されば吏道と諺文との間には、何等の關係もなく、全く分離したる二種の文字である。

吏道は我が國の萬葉假字と同じく、漢字の音或は訓を利用して、韓語を寫したもので、吏道といふのは後世の稱呼らしく、古くはその名を聞かないのである。普通には新羅の人薛聰の作つたものとしてゐるけれども、古文獻に徴すべき證據はなく、たゞ『三國史記』に聰性明銳、生知道以方言讀九經、義訓道後世、至今學者宗之、とあるばかりで、恐らくは一人の手になつたものではあるまい。

吏道と萬葉假字
吏道の名稱

吏道通用の範圍

吏道の用例

察するに吏道の通用の範圍は、甚だ廣くなくして止んだものであらう。たゞ韓國の史籍は多く湮滅して、今より詳かに考證する事の出來ないのは、學問の爲に深く惜むべきことである。而して今に残つてゐる吏道の用例は、『三國遺事』の中に載せてある數首の古歌と、『三國史記』『高麗史』などに見えてゐる古地名、その他漢文の拾假字などである。

『三國遺事』に

月明師兜戀歌

景德王十九年庚子四月朔、二日並現、挾旬不滅、日官奏、請緣僧作散花功德、則可禳、於是潔壇於朝元殿、駕幸青陽樓望緣僧、時有月明師行于阡陌時之南路、王使召之、命開壇作啓、明奏云、臣僧但屬於國仙之徒、只解鄉歌、不閑聲梵、王曰、既卜緣僧、雖用鄉歌可也、明乃作兜率歌賦之、其詞曰、今日此矣、散花唱、良巴寶、白乎隱、花良汝隱、直等隱、心音矣、命叱使、以惡只、彌勒座、主陪立、羅良、解曰、龍樓此日散花歌、桃送青雲一片花、般重直心之所使、遠

假字の起原

邀兜變大遷家。今俗謂此爲散花歌誤矣。宜云兜變歌。別有散花歌。文多不載。

吏道の研究は今日に至るまで全く着手せられず、又韓人といへども、家柄の外は知る道がないから、此等の歌も更に將來の研究を積まなければ、盡くその意義を解する事は出来なう。

地名に用ひたるものには

- 富林縣……伐音村
- 己汝縣……今勿
- 解禮縣……皆利伊
- 古四州……古沙夫里
- 帶山縣……大尸山

漢文の捨假字に用ひたるものには、『童蒙先習』に

天地之間、萬物之衆、唯人伊最貴爲尼。所貴乎人者、隱以其有五倫也。羅是故、奴孟子伊曰、父子有親爲餘、君臣有義爲餘、夫婦有別爲餘、長幼有序爲餘、朋友有信是羅爲時尼。人而不知有五常、則其違禽獸伊不遠矣。里羅然則、父

慈子孝爲餘、君義臣忠爲餘、夫和婦順爲餘、兄友弟恭爲餘、朋友伊輔仁、然後匡沙、方可謂之人矣。里羅。

然るに李朝の第四世、世宗の時に至つて、諺文が制定せられ立派な國字が出来てから、吏道は忽ちこれに壓倒せられて、その運用の途を失ひ、以後はたゞ胥吏の奏文、官衙の文書など、儀式的のものに用ひらるゝ外は、殆ど世人から忘れられることゝなつた。これがため吏道といふ名も起つたので、道といふのはまた吐とも書き、語尾或は豆爾乎波の義で吏道とは即ち官吏の用ふる豆爾乎波といふことである。かくて今日では『吏文輯覽』『儒胥必知』など二三の書を除く外は、その家柄により口傳で子孫に語り傳へるのみである。今吏道の二三種を挙げれば

- 隱 (ハ)……………cun 字の音
- 伊 (ガ)……………一 字の音
- 刀 (モ)……………さ 字の音

假字の起原

現今の吏道の意義

萬	(バカリ).....man	字の音
也	(コソ).....ya	字の音
乙奴	(カラ).....eu-ro	字の音
爲羅	(セヨ).....hi-ra	爲は訓、羅は音
爲巨飛	(シタヲ).....hi-kō-nai	爲飛は訓、巨は音
伊於乙	(スルヲ).....i-o-neur	字の音
爲加尼	(シタニ).....hi-tō-ni	爲加は訓、尼は音

然るに吏道にも亦その略體があつて、専ら佛書漢籍の訓讀の捨假字に用ひられてゐる。その一例を挙げれば

伊 (i).....イ
 乎 (ho).....乎
 於 (o).....令
 也 (ya).....一

吏道の略體

照見千手護持從是已往所是世間經書悉
 能受持一切外道法術圍陀典籍亦能通達
 誦持此神呪者世間八萬四千種鬼病悉皆
 治之無不差者亦能使令一切鬼神降諸天
 魔及諸外道若在山野誦經坐禪有諸山精
 雜魑魍魎鬼神橫來惱亂心不安定者誦此
 呪一遍乃至七遍是諸鬼神皆悉被縛也若
 能如法誦持於諸衆生起慈悲心者我時當
 勅一切善神龍王金剛密跡常隨擁護不離
 其側如護眼睛如護已命即說勅曰

大正心苑羅已經

十一

三

字畫省略の
手段

奴 (no) ヌ
多 (ta) タ
爲 (hi) ノ

今これを我が國の片假字と比較して見れば、たゞに外形が一致してゐるのみならず、その省略の手段も、全く同一である。例へば

(一) 字音によるもの

(甲) 漢字の一部

	片假字	東道
ロ	(呂の上半)	ア (面の上半 myōn)
ホ	(保の下半)	口 (古の下半 ko)
ヌ	(奴の傍)	弋 (代の傍 ai)

(乙) 漢字の全部

ハ (八の全部) 五 (五の全部)

假字の起原

(二) 字訓によるもの

(甲) 漢字の一部

ト (止の上半) 飛 (飛の上半 *hir*)

エ (江の傍) ノ (爲の上半 *ni*)

(乙) 漢字の全部

チ (千の全部) 加 (加の全部 *ka*)

吏道と萬葉假字と、その略體と片假字との類似は上述の通であるが、この兩文字は別々に發達したものであるか、或はその間に何等の關係があるかといふ問題に就いては、未だ明瞭な解答を與へることは出來ないのである。今試みに年代の上より考へて見れば、吏道の發明を新羅の神文王の時として、大約西曆六百八十六年の頃で、『古事記』の出來たのは、西曆七百十二年である。而してその當時の日韓兩國の交通の狀態を考へて見れば、『古事記』中の歌又は固有名詞を寫す方法が、新羅の吏道を傳へたものであらうとい

吏道と萬葉假字との關係

吏道の略體と片假字との關係

諺文の傳はらざりし理由

ふことは、全く否定することも出來ないであらう。吏道の略體の起原由來などに就いては、毫も徵すべき文獻がないが、我が片假字を作る手段と、全く一致してゐるから、これも何等かの關係があるのではあるまいか。上世我が國の文物は多く韓國より傳來し、殊に文字は悉く彼より教へられたものであるから、吏道も必ず我が國に傳つたであらうと思はれる。諺文の傳らなかつたのは、その發明の當時彼我の國狀も異り、又我が國では既に假字が普及してゐたから、最早其の侵入を許さなかつたので、遂に好事家の手に歸して、神代文字と稱せられることゝなつたのであらう。

これを要するに、漢字が日本及び韓國の國語を寫す際に於てシラビツク體の文字となるべきは、國語の性質上自づから然らしむるところであるから、漢字が先づ傳つた韓國に於て、假字體の文字の苞芽を發したものと見る方寧ろ穩當で、且つ字畫を省略することも、敢て彼より傳つたといふのではないが、其の字體及び手段の同じであるところから思へば、これも亦彼に倣

つたと見る方が、可くはあるまいか。これらは急に定めることは困難であるけれども、暫く私見を記して置く。

諺文の起原

韓國は我が國と同じく、上古には文字がなかつたのである。一度吏道を發明したが、廣く行はるゝことなくして、遂に失敗に歸し、李氏の世に至つて、始めて諺文が公にせられた。諺文は構造に於て最も科學的であつて、亦世界に於て最も新しい文字の一である。

諺文の發布せられたのは李朝第四世世宗の朝であるが、これよりさき太宗の三年(西曆千四百〇三年)に、鑄字所を置いて、金屬製の活字十萬個を鑄た。これが實に諺文制定の遠因をなしたものである。蓋しこの活字は世界に於ける金屬活字の最も古いもので、印刷界の大革命であつた、爲に朝鮮半島に於ける文字の思想に影響を及ぼしたことは、決して少くなかつた。『東國文獻備考』によれば、世宗は、各國みなその國固有の文字があつて、自國の語を記してゐるのに、韓國にのみ獨りこれがないのは、國辱であるといふ意見か

活字鑄造

諺文制定の
遠因

訓民正音

ら、遂に自ら諺文を制定し、局を開き、鄭麟趾、申叔舟、成三問、崔恆に命じてこれを調査せしめ、同王の二十八年に始めて訓民正音と名づけて発表したのである。その御製訓民正音を見るに次の如きものである。

- ㄱ 牙音、如君字初發聲、并書、如蚪字初發聲
- ㅋ 牙音、如快字初發聲
- ㆁ 牙音、如業字初發聲
- ㄷ 舌音、如斗字初發聲、并書、如覃字初發聲
- ㄸ 舌音、如吞字初發聲
- ㄴ 舌音、如那字初發聲
- ㄹ 唇音、如警字初發聲、并書、如步字初發聲
- ㄺ 唇音、如漂字初發聲
- ㄻ 唇音、如彌字初發聲
- ㄼ 齒音、如卽字初發聲、并書、如慈字初發聲

- ㅍ 齒音、如侵字初發聲
- ㅑ 齒音、如戊字初發聲、并書、如邪字初發聲
- ㅓ 喉音、如挹字初發聲
- ㅕ 喉音、如虛字初發聲、并書、如洪字初發聲
- ㅇ 喉音、如欲字初發聲
- ㅈ 半舌音、如閏字初發聲
- ㅊ 半齒音、如穰字初發聲
- ㅌ 如吞字中聲
- ㄷ 如卽字中聲
- ㄱ 如侵字中聲
- ㄴ 如洪字中聲
- ㄷ 如潭字中聲
- ㄹ 如君字中聲

諺文の起原

- 十 如業字中聲
- 止 如欲字中聲
- 卩 如穰字中聲
- 卍 如戊字中聲
- ㄣ 如警字中聲

訓民正音の序

訓民正音には鄭麟趾の序文がある。

有天地自然之聲。則必有天地自然之文。所以古人因聲製字。以通萬物之情。以載三才之道。而後世不能易也。然四方風土區別。聲氣亦隨而異焉。蓋外國之語。有其聲而無其字。假中國之字以通其用。是猶柄鑿之鉏鋸也。豈能達而無礙乎。要皆各隨所處而安。不可強之使同也。吾東方禮樂文物。倖擬中夏。但方言俚語。不與之同。學書者患其旨趣之難曉。治獄者病其曲折之難通。昔新羅薛聰始作吏讀。官府民間至今行之。然皆假字而用。或澁或窒。非但鄙陋無稽而已。至於言語之間。則不能達其萬一焉。癸亥冬。我 殿下創制正音二十

八字。略揭例義以示之。名之曰訓民正音。象形而字。倣古篆。因聲而音。協七調。三極之義。二氣之妙。莫不該括。以二十八字而轉換無窮。簡而要。精而通。故智者不崇朝而通。愚者可浹旬而學。以是解書可以知其義。以是聽訟可以得其情。字韻則清濁之能辨。樂歌則律呂之克諧。無所用而不備。無所往而不達。雖風聲鶴唳。鷄鳴狗吠。皆可得而書矣。遂命臣等。詳加解釋。以喻諸人。庶使觀者不師而自悟。若其淵源精義之妙。則非臣等之所能發揮也。恭惟我 殿下天縱之聖。制度施為。超越百王。正音之作。無所祖述。而成於自然。豈以其至理之無所不在。而非人為之私也。夫東方有國。不為不久。而開物成務之大智。蓋有待於今日也歟。

右の序文に「其淵源精義之妙。則非臣等之所能發揮」といひ又「正音之作無所祖述。而成於自然」とあるのは、文字を神聖にせんが爲、裏面の祕密を蔽はんとしたのであるが、一方に於て、形象而字倣古篆といふに至つて、遂に馬脚を露してゐる。而して諺文が形象の文字でなく、又古篆に類してゐないことは、明

白な事實である。

諺文の起原に就いて、一派の國學者は、これを我が神代文字の彼の國に傳つたものであるといつてゐるが、その説の不當であることは、今更論ずるに及ばぬことである。クラプロート(Klaproth)は、我が國の假字と同じく、漢字より轉訛したものであらうといつてゐるが、これも亦採るに足らぬ。エドキンス(Edkins)はシリア文字より出たものであるといつたが、これは諺文の左傍に、四聲を示す點があるのを、誤解して起つた説である。韓僧龍巖はその著『眞言集』に於て、諺文の起原を梵字なりと論じ、スコット(J. Scott)もこれを基礎として梵字説を稱へ、パーカー(Parker)及びジャイルス(H. A. Giles)も亦梵字説に傾いてゐる。その他レミューザ(Abel Remusat)及びドローニー(Leon de Rosny)は西藏文字説を稱へ、我が白鳥博士は蒙古の八思巴文字説を稱道せられてゐるが、要するに大體梵字の系統に屬するといふことに於ては、相一致してゐる。

諺文の起原に關する諸説

梵字系に屬す

三十六字母

訓民正音と三十六字母

始め佛僧が印度から出て支那に布教した結果梵語が傳來し、その影響によつて遂に、三十六字母が発見せられた。佛教が轉じて韓國に入り、梵語及び梵字の傳へられるに及んで再びこゝに諺文の基を造つたのである。而して諺文が創作せらるゝ際に其の参考として與つて力あつたのは、又この韻鏡三十六字母である。これは訓民正音の表と、三十六字母とを對照すれば、極めて明瞭に了解せらるゝ事である。

濁	次清	清	
群 ㄱ (g)	溪 ㅋ (kh)	見 ㆁ (k)	音 牙
定 ㄷ (d)	透 ㅌ (th)	端 ㅌ (t)	重音舌
澄 ㄸ (d)	徹 ㅍ (th)	知 ㅊ (t)	輕音舌
并 ㅃ (b)	滂 ㅍ (ph)	幫 ㅍ (p)	重音唇
奉 ㅍ (v)	敷 ㅍ (f)	非 ㅍ (f)	輕音唇
從 ㄷㅌ (dj)	清大 ㅌ (ch)	精 ㅌ (c)	重音齒
牀 ㄷ (d)	穿 ㅌ (th)	照 ㅌ (t)	輕音齒
匣 ㅎ (hh)		影 ㅇ (y)	音 喉
			音 舌半
			音 齒半

諺文の起原

○と^oと^oとの關係

右の表中の喩母に該當する○は即ち spiritus lenis を表はすもので、獨立母音を示すには、必らずこの符號を前に加へるのである。今これに一を加へれば^o(y)となり、ⁱを加へれば^o(ng)となり、一とⁱを加へれば^o(h)を作ることが出来る。即ち一は強音を表はし、ⁱは激音を表し、^hは強激音を示すのである。以上の構造は他の文字の上にも等しく存するものであつて、例へば

○……………^o ^o ^o
^o……………^o ^o ^o

	濁	清	清濁
			疑 ^o (ng)
			泥 ^レ (n)
			孃 ^o (n)
			明 ^o (m)
			微 ^o (m)
	邪 [^] (z)	心 [^] (s)	
	禪 ^h (zh)	審 ^h (sh)	
		曉 ^o (h)	喩 ^o (v)
			來 ^o (r)
			日 [△] (ñ)

○^oレ^o入口の起原

母音の基礎

右の如く、諺文は音の類似したるものを一團とし、而してその音の性質を考査して、字形を定めたものであるから、餘程科學的といはねばならぬ。

かく諺文は○^oレ^o入口の五文字を基礎とし、それに點畫を加へて、他の文字を作つたのであるが、その○^oレ^o入口の五文字は如何にして出来たであらうか。これは諸先輩の説の如く梵字より借用したものである。

○(v)は梵字^{va}の○を假りたものである。西藏文字の^{va}もまたこの^{va}から出たもので母音の基礎となり、その上下に符號を加へて^a又はⁱなどを表はすこと、全く諺文の○と同じ趣意である。その他の四文字も、また梵字から出たもので、これを對照すれば左の通りである。

レ……………^o ^o ^o
ハ……………^o ^o ^o ^o
口……………^o ^o ^o ^o ^o

ㄱ……………ㄴ
 ㄷ……………ㄹ
 ㅁ……………ㅂ
 ㅅ……………ㅆ
 ㅇ……………ㅈ

かくの如く諺文はその基礎となる文字を梵字に採り、それ以上は一定の法則を設けて作つたものであるから、その作者は音韻に關する明瞭なる知識を持つて居つたものであらうと思はれる。されば諺文は形象文字より發達したものでないことが明であるのみならず、世界中の文字の間に於て特種の一階級を作つてゐるもので、科學上甚だ進歩したものといふことが出来る。

けれどもまた一方綴字の上より見れば、見逃すことの出来ない闕點がある。それは即ち縦書と横書とを混用し、且つ文字を一綴音毎に集めて、恰も一文字の如く固着せしめたことである。例へば

ㄱ (ㄱㅏ)……………横書
 ㅁ (ㅁㅏ)……………縦書
 ㅅ (ㅅㅏ)……………縦横混用

始め諺文は二十八字あつたが、今日では○と△との三字が消滅して、二十五字である。されどその活字を鑄るには、これがため千三百餘種の字母を作らなければならぬ。これをアルファベットの二十六字母を鑄造すればすむのに比べて、實に甚しい不便といはねばならぬ。これらの弊害の一半は實に梵字より得、他半は漢字の影響を受けたものである。

諺文が發布せられる前年に出來た『龍飛御天歌』は、諺文で記してあるが、其綴字法は現在とは稍趣を異にしてゐて、例へば *시미기몬무른* (*sai-mi Ki-phœun*) の如く *시*(源) *召*(遠) *시*(水) といふ語を綴り分けて發音に近く記してあるが、現今ではなるべく一語を一團とする傾向がある。これは全く漢字の影響であらう。

綴字上の缺點

諺文活字の數

龍飛御天歌の綴字法

漢字の影響

これを要するに、諺文は世宗の二十八年に發表せられたものであるが、實際は同王の時より以前、既にその苞芽を萌したもので、その製作の裏面には、支那の三十六字母が存在し、主要なる五箇の文字は、梵字を變形し、他は音韻の性質によりこれに點畫を加へて造つたものであつて、世界文字史上、聲音學的構造を有する特種の文字である。

青丘先生

하늘이일워시니.赤脚仙人아닌들.天下蒼生은니

조시리잇가.蒼生謂生民也

하늘이큰히이시니.누비중아닌들.海東黎民은니

조시리잇가.黎黑也.民看皆黑.故曰黎民

天既成之.匪赤脚仙.天下蒼生.其肯忘焉

天方擇矣.匪白衲師.海東黎民.其肯忘斯.已辭

宋仁宗始生晝夜啼不止.宋太祖.姓趙氏.名匡胤.其先涿郡人.受周禪.即

皇帝位.都汴.因所領節度州名.定有天下.有道人

言能止兒啼.道士也.召入則曰.莫叫莫叫.何似當

文字の二源
流
聖字

極東の文字

漢字

假字の系統

配列法の基礎

五十音圖の
由來説
吉備眞備

五十音圖に就いて

凡そ世界の文字は、その起原に溯れば、二三種に分つことが出来る。その主要なるものは西の方埃及の聖字 (hieroglyph) と東の方支那の漢字とである。聖字は歐羅巴に傳つて希臘文字・羅馬文字となり、亞細亞に傳つて亞刺比亞文字・シリア文字・梵字等となつた。而して西藏文字・蒙古文字・滿洲文字などの東洋文字も亦多くこの梵字から出てゐる。漢字はこれ等の文字と系統を異にし、その用ひられてゐる範圍も、支那を始め韓國・日本と可也廣い。我が國の假字は漢字の草體を採り、或はその略體に基いたものであるから、もとより支那文字の系統を脱することは出来ないが、その配列法即ち五十音圖に至つては、全く印度式である。

五十音圖の由來に就いては、普通に吉備眞備の作ともいひ、又眞備が支那の學者王化玄より學んだものともいつてゐる。また賀茂眞淵・橘守部・平田

印度式

篤胤などの如く、これを我が國固有のものとする論ずる學者もある。けれども悉曇學者の多數は既にその印度式であることを認め、新井白石の如きも、その『東音譜』に東方音韻五十母字蓋本于悉曇金剛文殊問といつてゐる。

印度僧の渡來

蓋し印度の僧侶が我が國に渡つて來たのは極めて古く、孝謙天皇の天平勝寶六年(西曆七百五十二年)正月に、唐の鑑真和尚が來朝して奈良に着いた時、既にそれより二十五年も以前に來て居つた菩提僊那(Bodhisena)といふ婆羅門僧正に迎へられたといふことが『過海大師征傳』に見え、『元亨釋書』『本朝高僧傳』にもこの僧正のことが見えてゐる。又『萬葉集』の卷十六に

婆羅門乃作有流小田乎喫烏臉腫而幡幢爾居ハムカラスウツクハレテハタボコニナリ

文字に關する影響

といふ婆羅門を詠んだ歌がある。これ等の印度僧が、宗教以外に、文字に關して頗る幼稚なる當時の社會に多大の感化を與へたことは蔽ふべからざる事實であつて、一度悉曇章(Devanagari)の子音配列圖と、我が五十音圖とを比較したならば兩者の關係は忽ち了解せられるであらう。悉曇章の子音配

悉曇章との比較

列圖は

		無 聲 音		有 聲 音		鼻音
		摩擦	破 裂	破 裂		
喉 類 斷 齒 唇	音	—	k <small>(カ)</small> kh	g gh		ṅ
	音	s'	c ch	j jh		ñ
	音	sh	t th	ḍ ḍh		ṇ
	音	s <small>(サ)</small>	t <small>(タ)</small> th	d dh		n <small>(ナ)</small>
	唇音	—	p <small>(ハ)</small> ph	b bh		m <small>(マ)</small>
半母音			y <small>(ヤ)</small> r <small>(ラ)</small>	l v <small>(ワ)</small>		

右の圖を左方より右方に數へて、當時我が國語に存在せし限りの音を抜き出せば、k(カ) s(サ) t(タ) n(ナ) p(ハ) m(マ) y(ヤ) r(ラ) v(ワ)の順序となり、全く我が五十音圖と符合してゐるのである。西藏文字の音圖も、亦悉曇から

西藏文字

五十音圖に就いて

出たもので左の通りである。

1.	k*	kh	g	n
2.	c	ch	j	ny
3.	t*	th	d	n*
4.	p*	ph	b	m*
5.	ts	tsh	ds	w*
6.	zh	z	h	y*
7.	r*	l	sh	s*
8.	h'	á		

右の音圖を又左方より右方に數へて五十音中の音に相當するものを拾へば、k(カ)t(タ)n(ナ)p(ハ)m(マ)w(ワ)y(ヤ)r(ラ)(サ)となる。一寸五十音圖の順序と違ふ處もあるが、これはsが摩擦音で他の音と性質を異にしてゐるから、これを最後に置いたのと、半母音wyr三音の位置が違つてゐるだけで、大體に於ける配列の順序には相違はないのである。

かくの如く五十音圖は印度の悉曇章によつたもので、その音の配列順が

五十音圖の
價值

その應用上
の注意

極めて學術的である。故に國語の解釋上、又は教授上これを應用して幾多の便利を得べきことはいふまでもないのであるが、餘りに深くこれに拘泥しては却つて種々の弊害を生じる。それ故吾人は過去に於て五十音圖が我國語學に致したる功績を十分に認めると同時に將來は先づこの音圖より脱出せねば到底真正の研究を見ることは出來ないと信ずるのである。



の更に變じたものが *toin-siot* で、いはゞ語頭の促音ともいふべきものである。故に *n* 即ち *s* を用ひてはゐるが、その示すものは必ず *s* とは限らず、*Pair* の *p*, *Edier* の *m*、その他各子音何れも同一の場合があり得る譯で、『龍飛御天歌』中には *paik* (paik) などの例もある。これももとは三綴音であつて、その母音が消滅したのであらう。

以上の意見に基いて日韓語を比較すれば更に興味がある。韓語 *stok* (餅) は國語のシトキ(黍餅)と同系の語で、韓語の *stok* (蜜) は『説文』に「密甘飴也」とあるやうに國語のマガリ(饌飴)と同語で、これが *nikur* となつたのであらう。其他韓語の *stok* (地) と國語のツチ(土)、韓語の *stok* (又) と國語のマタ(又)、韓語の *stem* (茎) と國語の *stomi* (菰) と比較することが出来るであらうと思ふ。

延言考

イフ(言)をイハク、キク(聞)をキカクといひ、又トル(取)をトラフ、スム(住)をスマフといふ類は從來これを延言といつて、『詞の通路』などではたゞ音の延びたものと考へ、『山口栞』『玉緒繰分』には、この中の語尾のクを音の延びたものとも、添つたものとも疑ひ、『舒言三轉例』には波行の方を「緩めたる舒言、加行の方を「用を「帶せたる舒言」といつてゐる。先年岡倉由三郎氏が言語學雜誌に、『語尾のくに就きて』と題して論ぜられたのは、頗る新説であるが、なほこのクを「事」の義として、結極外部より添つたものであるとの意見で、このクを活用と見たのは、たゞ「あゆひ抄』『山口栞』『玉緒繰分』などの中に、それかと思はれる節があるばかりである。要するに予の見るところでは、この問題は諸家の説が區々として、いまだ一定してゐない様であるから。いま日韓兩國語の比較上より、新に解釋を試みようと思ふ。

韓語と我が國語との似てゐるのは決して外形ばかりでなく、動詞形容詞の活用に於ても、彼我兩國語を對照して見れば、誠に符合するところが多いのである。今同語系に屬して居ると思はれる國語の動詞ノル(宜)と韓語の動詞^{hōr}(謂)國語の形容詞マネシ(普)と韓語の形容詞^{han}(多)とを比較して見るに、

國語		韓語	
語根	hōr	hir	
副詞法	ノラク	hirā-kōi	
名詞法	ノラフ	hirā-ki	
語根	mane	man	
副詞法	マネク	man-kōi	
名詞法	マネキ	man-ki	

名詞法 マネミ

man-ŭm

日韓兩國語の形容詞の類似
副詞法のキ
名詞法のミ
及び

動詞はしばらく措いて形容詞は右のやうに日韓兩國語極めてよく一致してゐる。而して韓語の方では動詞形容詞いづれも同一活用であつて、副詞法は^{hōi}名詞法は^{hōi}といふ形と^{hōi}といふ形と二つある。國語に於ては、たゞ形容詞のみに副詞法のク名詞法のキ、及びミがあつて、動詞には缺けてゐる様であるけれども、我が國語の動詞にも形容詞と同一の活用があつて、所謂加行延言は形容詞のクに對する副詞法、及びキに對する名詞法、波行延言は形容詞のミに對する名詞法の遺つてゐるものであらうと思はれる。即ち形容詞のマネク・マネキなどと活く様に、動詞の延言は音の延びたものでもなく、添つたものでもなく、一種の活用に外ならぬのである。

加行延言を『あゆひ抄』及び岡倉氏の論文などに、事^シの義と解いてある様に、これを名詞法と見るのには先づ異論はあるまいと思ふ。而して『梅の花散らくは何處などの例には、事^シといふ解釋が極めて適當であるけれども、な

加行延言は
名詞法

加行延言は、
又副詞法

形容詞の名
詞法より轉
じたる動詞

動詞より轉
じたるk m
の活用

はこの外に一種の副詞と見るべき場合がある。例へば、朝にけに見まほりするの「見マクを見ムコトヲ」と互爾乎波を添へて解けば何事も無いが、これは寧ろ見タイ様ニ思フなどの様ニと解いて、一種の副詞法と見る方がよくはあるまいか。「止むときもなく戀ふらくもへばなどといふのも、これと同例である。

マネキ・マネミなどk形及びm形の形容詞名詞法より、更に動詞に轉じたと思はれるものがある。例へば

ヒロシ(廣)……………ヒログ(廣)……………ヒロム(廣)

シロシ(白)……………シラグ(白)……………シラム(白)

アサシ(淺)……………アザク(嘲)……………アザム(嘲)

この例は獨り形容詞ばかりでなく、獨立の動詞中にも、上例と同じく、動詞又は形容詞のk m兩名詞法より活用したかと思はれるものが數種ある。例へば

ホグ(壽)……………ホム(譽)

セク(塞)……………セム(迫)

スク(透)……………スム(透)

カラグ(紫)……………カラム(絡)

シヅク(沈)……………シヅム(沈)

ノゾク(覘)……………ノゾム(臨)

ハサグ(挾)……………ハサム(挾)

イソグ(急)……………イサム(勇)

アユグ(歩)……………アユム(歩)

ユルグ(緩)……………ユルム(緩)

ウスラグ(薄)……………ウスラム(薄)

又k m いづれか一方にばかり活いてゐる例もある。例へば

ハゲシ(烈)……………ハゲム(勵)

- カク(垣)……………カコム(圍)
- タル(垂)……………タルム(弛)
- ナフ(萎)……………ナヘグ(蹇)
- セム(攻)……………セメグ(閱)
- ナク(泣)……………ナゲク(歎)

國語の動詞
形容詞は同一活用

これ等の諸例によつて考へるに、國語の動詞・形容詞も本來は同一活用であつて、その副詞法はkといふ形、名詞法にはkとmとの兩形があつたのを、動詞形容詞の活用が分離してからは専ら形容詞のみに存し、動詞には延言中にその跡を遺したものであらう。

而してmとpとの兩音は相通ずるから、上記のm形の活用は時にp(現今のh)形となつて現はれることがある。例へば

- ワロシ(惡)……………
- ワラフ(笑)
- エラグ(嘘樂)

さればかの波行の延言といふものも、畢竟はm形名詞法の變態たるに過ぎないであらう。而して普通波行延言と認めらるゝものゝ外、獨立の動詞中にもこの類に屬すべきものが數多ある。

- ネグ(祈)……………ネガフ(願)
- ムク(向)……………ムカフ(向)
- トル(取)……………トラフ(捕)
- テル(照)……………テラフ(銜)
- ツクル(造)……………ツクロフ(繕)
- ハカル(謀)……………ハカラフ(計)
- イク(生)……………イコフ(息)
- イフ(言)……………イハフ(祝)

波行延言は
m形名詞法の
變態

タツ(立)	タタフ(稱)
ナル(馴)	ナラフ(習)
ツグ(繼)	ツガフ(番)
ウツ(打)	ウタフ(歌)
フル(振)	ハラフ(拂)
クフ(食)	クハフ(加)
オス(壓)	オソフ(襲)
タタク(擲)	タタカフ(戰)
アラス(荒)	アラソフ(争)
シヌ(死)	ウシナフ(失)
オトル(劣)	オトロフ(衰)
ヨシ(善)	ヨソフ(粧)
カヌ(兼)	カナフ(叶)

ツク(付).....ツカフ(仕)
 シル(知).....シラフ(調)

上記の諸例中には、語原を他の方面に求める方がいゝと思はれるものがあるかも知れないが、右はたゞ一例を示しただけで、その適例は、探せばいくらも得られると思ふ。

これを要するに、延言に對する予の見解は、加行延言の古體を「形名詞法副詞法」とし、波行延言を「m形名詞法の轉訛」とするのである。これはもとより一の假定説であつて、その當否は廣く學界の批評を経て後定まるべきものであることは勿論であるけれども、若し予の説に執るところがあれば、これは唯延言の論ばかりでなく、動詞の活用の事より、ひいては國語の語原論に影響するところは決して尠くあるまいと思ふ。

形容詞考

我が國語の形容詞はその性質が殆ど動詞と同じであるに關らず、研究の獨り彼に比して遜色あるのは、文法學の不備といはねばならぬ。今過去に於ける學說の一般を概観するに、最も早くこれを論じたのは富士谷成章の『あゆひ抄』で、これを在狀・芝狀・鋪狀の三種に分ち、形狀言といふ名稱は始めて鈴木朗の『言語四種論』に見えてゐる。かの本居春庭の『詞八衢』にはシ、キ、ク、シ、シキ、シクの二種に別けて説いてゐるが、餘り精しくない。義門の『山口栞』にはこれを補説して、餘程その面目を改めてゐる。その他黒澤翁滿の『言靈のしるべ』には、三行活ミ、サ、ク、シ、キ、二行活シク、シ、シキの別を立て、物集高世の『辭格考』には、單辭サ、ク、シ、キ、ダ、複辭シサ、シク、シ、シキ、シダの二に別けてゐる。この種類の著述の中で、最も研究の精緻なのは、權田直助の『形狀言八衢』で、その論旨はシク活用といふものはなく、形容詞の活用はすべてク活

用の一種類に限ると主張したものである。その理由とする所は、

- (一) 淺^ダ・淺^サ・淺^ミ・嬉^ダ・嬉^サ・嬉^ミなどの如く、ダ・サ・ミは本言を受くるものであるから、その語根はアサ(淺)・ウレシ(嬉)である事。
- (二) 嬉の終止言は、同音の重なるを忌んで、ウレシとばかりいふけれども、口語でウレシイといふのは、古くウレシシというた證據である事。
- (三) 凡て活用は一綴音であるのを、形容詞だけが二綴音であるべきいはれの無い事。
- (四) 淺瀬^{アサセ}・善事^{ヨトクハシ}・細女^{メシメ}・空烟^{ムナシケリ}などの如く、複合するときには、いづれも本言よりすべき例である事。

その他近年に於ては、『帝國文學』に上田博士の形容詞考、『早稻田文學』に大島正健氏の形容詞に關する論文があつて、何れも有益な文字で、學者必讀の論說である。本考は日韓兩國語の比較上から、この問題を觀察したもので、まだ予の定説とはいへないけれども、試に世間に問うて、是非の批評を得や

うと思ふのである。

今、日韓兩國語の用言を比較して見るに、頗る似てゐるが、たゞ我に於て動詞・形容詞の二種に分れてゐるのを、彼に於ては全く合して一となつてゐるだけが違う。けれども予は我が國語も本來は韓語と同じく、動詞・形容詞の間に、活用上の區別がなかつたものと信じてゐる。『延言考』を参照すべし。かく形容詞動詞の活用は始め一にして、後分れたものであるから、一見兩者の間に連絡ありと思はれる例が尠くない。例へば

動詞

形容詞

- クル(暮)……………クラシ(暗)
- アス(淺)……………アサシ(淺)
- シル(知)……………シルシ(著)
- アク(明)……………アカシ(赤)
- ヌ(不)……………ナシ(無)

動詞・形容詞の一元

二種の形容詞活用の關係

形容詞活用の起原

- ウス(失)……………ウスシ(薄)
- アル(荒)……………アラシ(荒)
- ツク(付)……………チカシ(近)
- ハル(晴)……………ヒロシ(廣)
- ノブ(延)……………ナホシ(直)
- セマル(逼)……………セマシ(狭)

これらの例によつて考へて見れば、動詞形容詞はもと一體であつて、後ち分離したものである事は、殆ど疑ふべき餘地がないと思ふ。これ予が形容詞と動詞との活用の一元論を唱へる理由である。

次に論ずべきは、形容詞の二種の活用、即ちク活用とシク活用との關係であつて、學者によつては或はこれを別種なりとも論じ、或はシク活用のシを語根に數へて、結極同一活用と見做すものもある。予の意見はこの兩説の中、寧ろ前者に近いが、また聊か違つた點もある。形容詞活用中のクとキと

形容詞考

は、延言考に述べた様に、韓語の副詞法 ㄹ 名詞法 ㅁ と同じ性質のものであつて、略ぼその起原も明白であるが、獨りシに至つてはなほ不明である。今、日韓兩國語中、系統の同じであると思はれる形容詞の副詞法を比較して見るに、

國語	韓語
カタク(堅)	kat-koi(堅)
ナホク(直)	nop-koi(高)
フカク(深)	kip-koi(深)
マネク(普)	man-koi(多)
セバク(狭)	chop-koi(狭)
ゴトク(如)	kat-koi(同)
トモシク(乏)	teumur-koi(乏)
クハシク(美)	kop-koi(美)

シク活用の
あらは語根に

スコシク(少)……………ohök-koi(少)
この比較によつて考へて見れば、シク活用のシが語根に屬しないことは明である。なほ國語に於て、同一語根より出た動詞と形容詞とを比較して見れば、この事は一層明瞭である。例へば

動詞	形容詞
コフ(戀)	コヒシ(戀)
ワブ(佗)	ワビシ(佗)
ヤム(病)	ヤマシ(疚)
イソグ(急)	イソガシ(忙)
ネガフ(願)	ネガハシ(願)
サワグ(騒)	サワガシ(騒)
シタフ(慕)	シタハシ(慕)
タノム(頼)	タノモシ(頼)

形容詞考

右の例にはタダス(正)タダシキ(正)の如き二三の例外もあるが、又一方「形状言八衢」に、シク活用の複合名詞をつくるときシを語根とするといふ中にも空手・徒言・惜夜などの如き例外もある。

シは爲なり

然し、シク活用のシが語根でないならば、語尾に属することは勿論であるが、本来からこのシが語尾であつたかといへば、決してさうでない。予は甘ズ安ズ・無ミスなどに於て、ス(爲)が殆ど動詞の語尾のやうになつて居るが如く、このシもス(爲)の變態であらうと考へる。これももとより一の想像説に過ぎないが、以下少しく説明を試みようと思ふ。

ス(爲)は佐行變格活用であるけれども、他の動詞の下に複合したときには、四段活用又は下二段活用となることがある。

- ミス(見爲)……………下二段活用
- キース(着爲)……………下二段活用
- クラス(暗爲)……………四段活用

爲の古活用は四段活用

ツクス(盡爲)……………四段活用

なほ使役又は敬相の助動詞のスはこのス(爲)と同じ語原から出たもので下二段活用に活き、又敬相の助動詞は古くは四段にも活いてゐる。さればス(爲)はもと四段にも活いたものと思はれる。なほいは、シ(爲)・ス(爲)・マジ(見爲)と、打消の助動詞ジ・ズ・マジとを對照して見れば、此等の助動詞の語原が、ス(爲)であることは明である。而してマジはシク活用に活いてゐるから、ス(爲)は古くサ、シ、ス、セ、シク、シキと活いたのではあるまいかと思はれる。其中のシ、シク、シキが専ら形容詞に残り、其他はアリ(有)・ウ(得)などの影響によつて、佐行變格活用となつたものであらう。さて又動詞活用のシ、シク、シキが形容詞活用に移つた順序は、ス(爲)が體言に添うて解す・閱す・敬すなどとなつた様に、形容詞の語根を體言と看做して、これに添ひ、後聲音の變化によつて、今日の姿となつたものであらう。今日でも體言には神々し・物々し・業々し(カウ・モウ・ゲウ)の如く、自由に形容詞活用が添ふのである。

爲の古活用とシク活用の起原
佐行變格活用の起原

以上述べたところで、シク活用の起原は稍々明にし得たかと思ふが、ク活用のシに至つてはまだ明瞭でない。けれども、これもシク活用のシと同じく、ス(爲)から來たものと思はれる。例へばクラス(暮)とクラシ(暗)との如く、語根にス(爲)の添うたものが、一は動詞となり、他の一は形容詞となつて、シク活用に活いたのを、そのシのみが残つて、終止法となつたものであらう。されば遠し^{トホ}近し^{ゾカ}の如き、ク活用も重つて熟語となつた場合には、遠々^{トホ}し近々^{ゾカ}しの如く、シク活用となるのではあるまいか。

本考はなほ頗る不完全であるが、形容詞に關する研究が甚だ尠いから、試みに發表して、學者の一顧を乞うた次第である。(形容詞考補遺を参照すべし)

活用に關する私見の一節

國語の動詞活用に正格變格など諸種ある中で、最も數が多く且つ古からうと思はれる形は四段活用で、これには餘り異論を唱へる人もあるまいと思ふ。この古いと思はれる四段活用を除いた他の活用には、殆どすべてに互つて、四段活用の一格ともいふべき良行變格活用が縦横無盡に活動して居ると思ふ。

自他の上から言へば、良行變格活用のアリ(有)は自動で、これに對する他動は既に先輩も論じてゐる通り、下二段活用のウ(得)であつて、アリは自から存在する義を示し、ウは他より求めて存在せしめる義を表はしてゐる。予はこのウはアリの變形したものであらうと思ふ。是は獨り我が國語のみでなく、韓語にも等しく存する現象で、これを對照すると一層明瞭である。國語のアリに相當する韓語は^고で、この^고は^고とも^고ともなる。而して國語

良行變格活
用の活動得は有の變
形の活動

自他の區別
と母音の變化

のウに對する語は^ヨで、これは自他の區別を母音の變化で示し、^ヨより^ヨを作つたものである。國語のウとアリとは活用も違ひ、形も大分違つてゐる様であるが、よく考へて見るに、韓語の^ゴと^ゴとの様な關係を持つて居るものと思はれる。國語のウは下二段活用で、エ・ウ・ウル・ウレと活くが、受身の助動詞のラルが添へば、エラルとなる。このエラルといふ形を語原の上から見れば、ウにアリ(有)が複合したもので、即ち *ca-aru* である。現今の文法上では受身の助動詞をルラルの二種に區別してゐるが、本來はアリ(有)といふ語から出た一語であつて、ルはアルの^アが動詞の語尾に融合したもので、ラルは動詞の語根の^エ音が反對にアリに融合したものである。それ故國語のウには^ヨといふ古形があつたので、このエルは良行變格活用アリの母音が變化して出來たものである。

得の古形は
エル

助動詞の^ス
は動詞の^ス
より出づ

又ス(爲)といふ語は佐行變格活用であるけれども、佐行變格活用と下二段活用との違ふところは連用形ばかりで、殊に使役相及び敬相の助動詞スは

爲の古活用
は四段活用

この動詞から出たものでありながら活用は全く下二段と同じである。又敬相の助動詞スは古くは四段活用に活いてゐる。其故スはもと四段活用であつて、それに良行變格活用が結び付いたか、或はそれに類推して、後遂に下二段活用になつたものと思はれる。合スと會ス、澄スと住ス、廻スと舞スの如く、使役の意を持つてゐる動詞の中に、四段活用に活くものと下二段活用に活くものと二種類あるのもこれがためである。

動詞の構成
とアリ・ウ・
ス

右の様にウはアリの變態で、スはアリの影響を受けて出來た動詞である。而してこのアリ・ウ・スの三語は、動詞の構成上種々の働をしてゐる。例へば雲クモからクモル(曇)ウツ、畝ウツからウネル(畦)ヤ、宿ヤからヤドル(宿)カゲ、陰カゲからカゲル(陰)メ、目メからミル(見)テ、手テからトル(取)などの様に、名詞を良行四段活用に活かされたのは、良行變格活用アリの結び付いたもので、弱ヨクシからヨワル(弱)ナホ、直ナホシからナホル(直)ツツ、敏ツツシからサトル(悟)などの様に、形容詞の語根から良行四段活用に活くのも、亦このアリが結び付いたのである。その他、懲ルと懲ス、悟ルと諭ス、干ルと乾ス、

借ルと貸ス、似ルと似スなどの様に、アリ・ウス・の三語が結び付いて自他を別けたものも多い。

かういふ風に良行變格活用アリは國語の動詞活用中に様々の活動をして居るが、韓語にも恰度これと同じ事實があるのである。先にいつた通り、アリといふ韓語は^ㅏ又は^ㅓでこの二語の複合したと思はれる動詞が非常に多い。uと^ㅜ語根に對して^ㄴ(泣く) ^웃(笑ふ) ^죽と^ㅊ語根に對して^죽(入る・取る) ^듣(聞く)などがあるのはその一例で、また ^죽(死ぬ)と ^죽(殺す) ^나(出る)と ^나(出す) ^보(見る)と ^보(見す)など自他を區別することもある。それでこの比較研究を十分精しく續けて行つたならば、兩國語間の動詞の關係は勿論のこと、國語單獨の上からいつても、非常に有益な結果を得ることであらうと思ふ。

韓語に於ける例

名詞の性に就いて

我が國語の名詞に於て、男女の性を別つには、大凡左の三種類の方法がある。

第一 ヲ・メを語頭或は語尾に添へること。例へば

男性

ヲ・ノ・コ(男子)

ヲ・ヒ(甥)

ヤ・モ・ヲ(鰥夫)

女性

メ・ノ・コ(女子)

メ・ヒ(姪)

ヤ・モ・メ(寡婦)

この區別は、はじめ人間のみに限り、メヲトといへば夫婦のことであるが、のちには一般の動植物より無生物にまで及ぶ様になつた。例へば

男性

ヲ・イヌ(牡犬)

ヲ・タケ(雄竹)

女性

メ・イヌ(牝犬)

メ・タケ(雌竹)

名詞の性に就いて

ヲ・メ

ヲナミ(男波)
ヲカハラ(丸瓦)

メナミ(女波)
メカハラ(平瓦)

遂に人間には用ひぬ様になり、ヲスメスといへば獸類に限られて居る。

第二 コメを語尾に添へること。例へば

男性

女性

ヒコ(彦)

ヒメ(姫)

ヲトコ(男)

ヲトメ(女)

ムスコ(息子)

ムスメ(息女)

イラツコ(郎子)

イラツメ(郎女)

ムコ(婿)

ムカヒメ(適妻)

この區別は人間のみに限る様である。

第三 セイモを語頭或は語尾に添へること。例へば

男性

女性

セイモ

コメ

セヒト(兄人)

イモヒト(妹)

セコ(夫)

イモコ(妹子)

イロセ(家兄)

イロモ(家妹)

全體イモセといへば、後世夫婦のことゝなつて、イモコは妻、セコは夫のことであるが、もと兄弟姉妹にも、他人にも凡て男女間の區別を表はすに用ひられた語である。後セヒトといへば男兄のこと、イモヒトといへば女弟のことゝなつたが、昔は姉より弟をセと呼び、弟より姉をイモといつたものである。それ故、以上三種の中で、男女を區別する主要なる語はイモとセとである。猶イモとセとは、普通は人類男女間の區別にのみ用ひられる様であるけれども、實はさうばかりとも限らぬ、一般に動物の男女兩性を區別して居る例もある。鹿子をカノコといふ通り鹿の本言はカであつて、シカのシはメカ(牝鹿)のメに對し、そのシはセ即ち男性を表はしたものである。雄鷹をセウといふのは、セオウの略でこれもその一例であらう。

名詞の性に就いて

性を區別する主要なる語

韓語の性の區別

翻つて韓語を見るに、恰度我がイモセに符合する^암(雌) ^수(雄)といふ語がある。例へば

男性

su-tark(雄鶏)

su-so(牡牛)

su-kai(牡犬)

女性

am-tark(雌鶏)

am-so(牝牛)

am-kai(牝犬)

但し、この區別は獸類及び無生物に限る様であるが、もとは人間にも用ひたものと見えて、母を omi といひ、又男子を sa-naheni といふなどの例がある。これを我が國語のイモセが多く人類間の區別に用ひられながら、また獸類にも及ぶ例のあることに較べて見れば、日韓兩國語に於て男女兩性を區別する主なる語の同一であるといふことが分かる。

所相に就いて

所相とは育テラル打タルの様に、他の動作を自己が受けることを表はすものであつて、普通能相を所相に變ずるには、動作の原動者、即ち能相の主格を所相の標準とするのである。

能相

母 子を 育つ。……………子 母に 育てらる。

人 犬を 打つ。……………犬 人に 打たる。

これは普通の所相であつて、又その本體である。然るに次の様な例は姿は同じ所相であるが、稍々趣を異にしてゐる。

能相

母 子を 育つ。……………母 乳母に 子を育てらる。

消防夫 火を 消す。……………消防夫 兵士に 火を消さる。

所相に就いて

所相の本體

準所相

この場合には、他人の動作を自分が受けるのでもなく、又能相の主格が所相の標準ともならない。従來の文法書では、かういふ場合を別たず、或は全く認めなかつたが、これは普通の所相と嚴重に區別する必要がある。故に今便宜上假にこれを準所相と名づけて置く。

自動詞的の
小句

右の育ッ消スは勿論他動詞であるけれども、他動詞の目的は所相のときには主格となるのが通例であるのに、右の場合では、育ッ消スの目的子火は所相のときにも依然としてその目的である。故にこの動詞と動詞の目的との間には、密接な連絡があつて、恰度、名を告るの告ルは他動詞であるが、名告ルと熟語になれば自動詞となる様に、子を育つ、火を消すといふ小句は、意義上一箇の自動詞、又は自動詞的である。

右の「母子を育つ」といふ文章には補足語を要しないから育ッといふ語は所謂無對他動詞である。而して、有對他動詞の能相と所相とを對照すると、次の様である。

能相

所相

人 我に 道を 問ふ。……我 人に 道を 問はる。

有對他動詞
の所相

右の所相を無對他動詞の準所相と比較して見れば、形式は全く同一である。それ故従來この二者は全く混同せられてゐたが、有對他動詞の所相の標準は能相の主格で、又他の動作を直接に受けてゐるのであるから、これは純然たる所相であつて、準所相との間には嚴重な區別を設けねばならぬ。これに對して準所相を作つて見れば、左の通である。

甲 乙に 丙に道を問はる。

かういふ例は實際には餘り用ひられぬが、決して言ひ得られない譯ではなく、又語を省略しては、屢々用ひられる事がある。

我の 問ふべき事を 某に (丙に)問はる。

而してこの場合に「丙に道を問ふ」といふ小句は「子を育つ」の如く又自動詞的である。

所相に就いて

以上は育ツも消スも又問フも皆他動詞であるけれども、自動詞に於ては稍その趣を異にしてゐる。

有對自動詞の能相は、例へば

子 母に 抱付く。

であつて、その所相は

母 子に 抱付かる。

である。然るに、無對自動詞にては、その能相は

母 泣く。

で、これに對する所相はなく、準所相は

母 子に 泣かる。

である。從來この「母子に泣かる」は「子 泣く」に對する所相の如く見做されたけれども、これは大いなる誤であつて、「母泣く」に對する準所相と見なければならぬ。

無對自動詞
には所相なし

これを要するに、他動詞に於ては、所相も準所相も共にあるけれども、自動詞にては、有對自動詞には所相あるも、無對自動詞には決してない。これを表にて示せば、次の通である。

	能相	所相	準所相
無對他動詞	母 子を育つ	子 母に育てらる	母乳母に子を育てらる
有對他動詞	人 我に道を問ふ	我 人に道を問はる	甲乙に我に道を問はる
無對自動詞	母 泣く		母 子に 泣かる
有對自動詞	子 母に抱付く	母 子に抱付かる	

所相に就いて

一種の敬相に就いて

國語動詞の敬相

國語動詞の敬相を表はすには、二種の方法がある。一は勢相より轉じ、他の一は使役相より移つたもので、即ち助動詞のル・ラル或はス・サスを添へて表はすのである。これは自ら爲し能ふ力があり、又、人を使役する身分であることを示す意より出たものであらう。

韓語動詞の敬相

韓語動詞の敬相も、亦、國語と同じく、勢相或は使役相から轉じたものもあるが、その外に猶、語尾の P 形に活用するのが一種ある。

P 形の敬相

pat (受く)..... patch-ap (受けらる)

poi (面會す)..... poi-op (面會せらる)

この P 形の活用は、我國文法の上には一寸見當らないやうであるが、沖繩の方言にはある。

tuyun (取る)..... tuya-bin (取らる)

沖繩方言動詞の敬相

ana-bin (有らる)

沖繩方言の敬相を表はす方法中には、我が國語に存する、勢相及び使役相から轉じたものが全くなく、たゞこの P 形活用の一種類あるばかりである。故に我が國語と同系の韓語、沖繩方言などを對照して考へて見れば、本來は敬相を表はす方法に三種類あつて、韓語にはその總てが傳はり、國語にはその中の二種類、沖繩方言にはたゞ P 形活用の一種類のみが残つたものと思はれる。

國語に於ける P 形敬相

この P 形活用の敬相を、國語の中に求むれば、波行延言中にその痕跡があるまいかと思はれる。波行延言にも種々あつて、必ずしも一定して居らぬ。韓語の P 形活用も、亦單に敬相を表はすのみでなく左の如き例もある。

sul (休む)..... sul-p (易し)

punk (赤し)..... punko-p (耻し)

ops (無し)..... opsen-p (蔑にす)

一種の敬相に就いて

國語の波行延言中にも、亦種々の區別を見出すことが出来る。例へば

三

- ヨブ(呼)……………ヨバフ
- トル(取)……………トラフ
- フム(踏)……………フマフ
- ウク(浮)……………ウカフ
- ヒク(引)……………ヒカフ(控)
- ハカル(計)……………ハカラフ(謀)
- ツクル(造)……………ツクロフ(繕)
- ツグ(繼)……………ツガフ(番)

右は延言と本語との意味の變らぬものである。

右は延言と本語との意味の變はる例である。『延言考』を参照すべし
凡そ言語は引き延せば上品になり、縮むればその反對に下品になるものであつて、これは古語より今日の俗語に至るまで、皆同様である。故に語を

言語の緩急
と敬意
音の附加と
敬意
敬意を含め
る波行延言

引き延すうちには、自ら他を尊敬する意も含むものであらう。勿論P形の活用は、語を引きのばすといふべきものではないが、P形の活用の如く音を附加することも、語を引き延ばすのと同様に、上品或は丁寧の意を伴ふもので、従つて敬相の意をあらはすものであらう。
我が國の古語を見るに、波行延言の中に敬相の意を含んでゐると思はれるものが少くはない。

- イヘノレ(家告)……………イヘノラヘ
- キコシメセ(聞召)……………キコシメサヘ
- イマセ(座)……………イマサヘ
- マウス(申)……………マウサフ
- カクレキル(隠居)……………カクロヘキル
- イヒツギケリ(言繼)……………イヒツガヒケリ
- ツク(付)……………ツカフ(仕)

一種の敬相に就いて

三

沖繩方言及び韓語に存するP形活用の敬相は、我が國語に於て、かゝる語形のうちにその痕跡を認めることは出来ないであらうか。

指定の助動詞に就いて

助動詞ナリ

指定の助動詞ナリは、豆爾袁波のニと動詞のアリ(有)とより出来たもので、その活用も亦アリと同一である。マカスル(任)ナリ・ウレシキ(嬉)ナリ・温厚ナリ・君子ナリ・バカリナリの様、用言は勿論、體言・助辭にも連続するものは、タリとこのナリとのみで、他の助動詞にはない例である。

ナリの語原

ナリの語原はニとアリとの合したものであるから、従來は一般に「武藏ナル隅田川」大隅守ナル人などのナルと混同してゐる。即ち「武藏ナル」大隅守ナルのナルは、ニアル或はニテアルの意であるから論はないが、「顔回ナル者」「明倫館ナル學校」といつては、「顔回ニアル者」「明倫館ニテアル學校」といふことになつて穩當でないとせられてゐるが、「顔回ナル者」「明倫館ナル學校」のナルは、指定の助動詞ナリの連體法で、中古文典に用例がないといふだけで、文法上の誤謬ではない。「顔回ナル者」のナルがニアルの約であるから、穩當

顔回ナルは誤謬にあら

指定の助動詞に就いて

でないといへば、この川は隅田川ナリのナリも、ニアリの約であるから、穩當でないといはなければならぬ。

指定助動詞のナリと武藏ナル隅田川のナルとは、共にニとアリとの複合であるが、武藏ナルのナルは發音上、便宜ニとアとの二音が結び付いたもので、實際上なほ語原が識別せられてゐるが、指定助動詞のナリは、學者間にこそ語原に溯つて、ニとアリとの複合であるといふことが知られてゐるやうけれど、使用上は既に語原滅却し、従つて意氣も變化して居るのである。形容詞にもこれと同じ趣のことがある。清カレ、涼シカレのカレは、形容詞の副詞法のク語尾と動詞アリとの結び付いたものであるけれども、これは發音上の便宜によつたもので、引き離しても用ひることが出来る。しかし已然法のケレは、アリの複合したものに相違なからうけれども、既に一の活用となつて居る以上は語原に溯つて引きはなすことは出来ない。「武藏ナル隅田川」のナルは連體法でその終止法はない。又「靜ナレ明カナレ」の如き命令

ナリとタリ
タリの語原

法も、指定の助動詞ナリにはない。

助動詞のナリを研究するには、タリと對照する必要がある。タリは互爾衰波のトと動詞アリとの複合したもので、親タリ、子タリ、臣タリ、平然タリの如く、單に體言のみに連續するのである。

ナリとタリとは語原の上からいつても、意義の上からいつても、何れも近い關係がある。此二語は互爾衰波のニ又はトが、アリと複合したものであるから、これを研究するには、先づニとトとに就いて觀察しなければならぬ。今ニとトとを比較するに、次の如き對照を見るのである。

親ニなる	親ト思ふ
雪ニなる	雪ト降る
取々ニうはさす	ありくト見ゆ
降りニ降る	ありトある

右の諸例を考へるに、ニは既定又は經過の義があり、トは假定又は現存の

指定の助動詞に就いて

ニは既定
トは現存
ニは既定
トは現存

義があらうと思ふ。「親ニなる」雪ニなるは既定の事實で、親ト思ふ「雪ト降る」は當に假定したことである。「降りニ降る」は既に降りたる上に更に降る意で、ありトあるは、二のアリが共存してゐることを示すのである。助動詞のヌとツとの關係も或はこれと同様に説明することが出來はすまいか。

ニとトとの別が右の通であるから、ナリとタリとの間にも既定と假定、經過と現存との關係を見出すことが出來よう。

君ナラズ 君タラズ
溫厚ナリ 平然タリ

「君ナラズ」は君主ではなくして他の資格者であることをいひ、「君タラズ」は君の位にはあれども、徳望行狀共に君とするに足りないことをいふのである。「溫厚ナリ」とはその人の平素の性質をいひ、「平然タリ」とは一時の外貌を指すのである。

ナリとタリとに對する韓語は *nira* と *tora* とである。勿論その意義は變

ナリとタリ
とに對する
韓語

化して *nira* は過去、*tora* は完了時をあらはす助動詞となつてゐるが、用言、體言の別なく結びつきで、

ka-nira.....行キヌ
ka-tora.....行キツ
tark-i-nira.....鶏ナリ
tark-i-tora.....鶏タリ

の如く、用言には直ちにその語尾に續き、體言にはその中間に「言(有リ)の略體、i」を挿んで接續するのである。國語ではナリもタリも共に體言に續き、殊にタリの如きは用言には續かないのであるが、これは助動詞としては極めて異例であつて、或は韓語の如く體言との間に本來アリといふ語を含ませたものではあるまいかと思はれる。

助動詞と體
言との連續

國語變遷上の二勢力

言語變遷の
二大原因
破壞的と建
設的

言語は時々刻々に遷り變つていつて、暫くも止まぬものである。この變遷を支配するに、二つの勢力があつて、其中の一は破壞的のもの、他の一は建設的のものである。

聲音變化

破壞的の勢力といふのは、所謂聲音の變化で、種々の原因から一語を組織する聲音が、様々に遷り變つて行くことをいふのである。例へば

(一) 類音相率ゐるもの。

- アトヒト(後人)……………オトウト(弟)
- ヤノキ(矢木)……………ヤナギ(柳)
- タワワ(撓)……………トヲヲ(撓)
- ソナナク(慄)……………ヲノノク(慄)

(二) 音の前後相顛倒するもの。

- アラタシ(新)……………アタラシ(新)
- ゼンサイ(前栽)……………センザイ(庭園)
- サンサクワ(山茶花)……………サザンクワ(山茶花)
- アカハダ(赤肌)……………ハダアカ(裸)
- ヨワ(弱)……………ワヤ(手弱女)

(三) 聲音の相互に影響を及ぼすもの。

- ノミト(飲戸)……………ノド(咽喉)
- カニハ(樺)……………カバ(樺)
- ハニシ(櫛)……………ハジ(櫛)
- カヌチ(金打)……………カヂ(鍛冶)

(四) 聲音の脱落するもの。

- ガンイチ(眼一)……………ガンチ(片目)
- オホガ(大鋸)……………オガ(大鋸)

國語變遷上の二勢力

- トリアミ(鳥網)……………トアミ(鳥網)
 - トリヤ(鳥舎)……………トヤ(鳥舎)
 - ツキタテ(衝立)……………ツイタテ(衝立)
 - ツキタチ(月立)……………ツイタチ(朔)
 - クスリダマ(藥玉)……………クスダマ(藥玉)
- (五) 類似の音に變るもの。

- キル(切)……………カル(刈)、コル(樵)
- シ(荒風アラシの類)……………チ(東風コチ・風木チキの類)、テ(疾風ハヤテの類)
- アニ(兄)……………アネ(姉)
- ミ(三)……………ム(六)
- ヨ(四)……………ヤ(八)
- ブヌ(文)……………フミ(文)
- カヌ(簡)……………カミ(紙)

類推作用

要するに聲音の變化は破壊分離の作用である。これに反して建設的の勢力といふのは、所謂類推の作用であつて、意義若しくは聲音の上から、既にこれまで存在してゐる形に引きつけやうとするものである。例へば

(一) 意義上の類推。

- 苔……………コケ(木毛)
- 鱻……………カラスミ(唐墨)
- 木耳……………キクラゲ(木海月)
- 蛤……………ハマグリ(濱栗)
- 漏斗……………ジャウゴ(上戸)

(二) 聲音上の類推。

- ヒダリ(左)……………ミギリ(右)
- カンナ(假名)……………マンナ(眞名)

ヒンガシ(東) …… ミンナミ(南)

カホバセ(顔) …… コシハセ(腰)

かくの如く、類推の作用は既に存在せる語形を以つて新しき意義に應用し、又類似せる意義の語に類似せる形式を加へようとするものである。

用言の活用
と類推作用

この類推の作用は動詞形容詞の活用にも甚だ多い。例へば肩枕綱をカ
タグ・マクラク・ツナグ、頸庵影をクビル・イホル・カゲルなど四段活用とし、黄色
骨勞をキイロシ・コチコチシ・ラウラウシと形容詞にするなどは類推の作用
で、來が加行變格で出來が上二段、居が良行變格で香居が四段、有が良行變格
で御座ルが四段、見ルが上一段で恨ム(心見)が上二段、改ム(新見)眺ム(長見)極ム
(端見)などが下二段、著シがク活用で、著シがシク活用であるなども、亦他に類
推してその活用を改めたものである。

従來の國語の研究では、以上の二勢力中聲音の變化のみを説いて、類推作
用の方は稍度外視せられた傾向がある。勿論國語變遷の原因は類推の作

用のみではないけれども、苟も聲音の變化と相對して、一方の勢力である以
上は、これにも相當の注意を加へなければなるまいと思ふ。

外來語に就いて

外來語の定義

外來語といふ言葉に就いては、未だ一定の定義が與へられて居らぬ。普通我々が外來語といふのは、英語の foreign word 獨逸語の fremdwort 佛蘭西語の mot étranger を指したものであるが、なほその外に獨逸語で lehnwort と云ふのがあつて、fremdwort とこの lehnwort との間に區別を立てる學者もある。即ち前者は外國より輸入せられたる事の明白なるものに就いて云ひ、後者は外來語である事が想像せられても、古く這入つて來た爲め、既に自國語化せられたるものに就いて云ふのである。然しながら今暫くこの様な區別を立てずに、廣く外國より渡來した言語に就いて述べて見ようと思ふ。

西洋交通と外來語

我が國と西洋各國との交通が開けてから、諸種の外來語が我が國語中に這入つて來た事は、人の知つて居る處で、此事に就いては、村上直次郎氏が『史學雜誌』第七編第六號に述べて居られるから、参考せられたい。此の様な現

人種の接觸と外來語

印度日耳曼語中のセミト語

象は獨り近代のみに限るものではなく、古代とても同様、種々なる影響を外國語から受けたものである。

全體外來語は國と國との交通が頻繁になつてから始まるものゝ如く考へられるが、決してさうとのみ限らない。苟も異なる人種が相接し、異なる國が相隣りする場合には、如何なる時、如何なる場所にも必ず起るべき筈のもので、歐羅巴では紀元前三千年の頃、既に印度日耳曼語中にセミト語の痕跡を認めるのである。例へば

印度日耳曼語	セミト語
charata(金)	hardu
staura(牛)	tauru
vaina(葡萄酒)	vainu
laiwa(獅子)	labiatu

斯の如く言語の交渉は、極めて古くから始つて居るのであるから、歐羅巴

外來語に就いて

外來語に
よれる民族史
の研究

の或學者は外來語の方面から民族移動の歴史を研究した。例へばフィン語中に波斯語の混じて居る事から、嘗てフィン人種と波斯人種との間に交通のあつた事を知り、又印度日耳曼人種の祖先が歐羅巴の北部から起つたといふ説をも立てゝゐる。

また外來語の現象は、獨り異なる語族の間に起る許りでなく、同一語族間に於てもこれを見ることがある。即ち同一人種が分岐して、年を経るに従ひ、其の言語も漸く變遷し、長い間には全く異なる言語の如き觀を呈し、遂には互に言葉の貸借をするやうになるのである。かう云ふ場合に當つては、其の語が果して祖先以來相傳承して來たものであるか、或は一方が他の一方から借りて來たものか、即ち固有語(erbwort)か外來語(fremdwort)かの區別がつきにくくなるのである。例へば獨逸語の *kamin* (煖爐)は拉丁語の *caminus* 希臘語の *Kamnos* 梵語の *agman* と同一系統の語で、石といふ意味であつて、石器時代の遺語と思はれるが、其の實拉丁語から獨逸語へ這入つたもので、若し

同一人種間
の言語の貸
借

固有語と外
來語との區
別

日韓兩語間
の貸借

これが獨逸固有の語ならば、必ず音韻推移 (lautverschiebung) の規則によつて、*hammin* となるべき筈で、*hammer* (槌)といふ英語は、即ちこの順序を踏んで出たものである。

日韓兩語の間に於てもこれと同じく、共通の語が果して同一語原より雙方に分流したものであるか、或は後世一方から他の一方に轉入したものであるかの不明なものが、頗る多いと思はれる。例へば國語ハタ(畑)と韓語 *Pat* (田)との如き場合に於ても、國語ハタの意味は火田即ち陸田で、これに對して水田をタといふ。然るに韓語では水田を *non* といひ、陸田の *pat* と水田の *non* との間には、國語のハタとタとの如き對照を見ないのである。それ故、韓語の *pat* は國語のハタから出たものらしく思はれるのである。

固有語と外來語との關係が、右の如き有様であるから、外來語を識別することは容易でない。國語の麥柳ムギヤナギも一方より見れば、これ等の語の末にあるキは皆木の義で麥はムの木、柳は矢の木の意とも解けるが、また他方では麥

外來語の識
別

外來語に就いて

允

はその字音の *mak*、柳は楊の字音 *yang* の訛音とも考へられる。牧といふ語も、一方に於て馬城の意とも解釋が出来ると同時に、他方に於てはその字音 *mak* の轉じたものとも思はれて、容易に判斷を下すことが出来ないのである。

又外來語中には、數ヶ國を経て來るものもある。例へば支那で會社の名に用ふる公司は、英語の *company* の音譯なる公班牙から出來たもので、その *company* の出處を更に穿鑿して見れば、拉丁語の *cum* (共に) と *panis* (麩麪) とから出て居るのである。我が國に於ける外來語中にもその源だと思はれるものから更に溯り得べきものがある。ハダンキャウは支那語の巴旦杏であるが、それはまた波斯語の *badan* の音譯である。カツバは西班牙語の *capa* で、英語の *cape* (外套)、*cap* (帽子) 等の語と同じく、拉丁語の *caput* (頭) から起つたものとせられ、バターは英語の *butter* で、その源はスキート人種 (*Skythian*) が馬の乳を器に入れて運搬する途中、其上ずみの凝つて出來たもの、名に

數ヶ國を経て來る外來語

基き、希臘人がこれを *Botryon* と名づけ、拉丁語の *butyrum* となるに至つたのである。又インキは英語の *ink* で、拉丁語の *encaustum* より起り、以太利語の *inchiostro* を經て、*inkt* となり、更に轉じて *ink* となつたもので、元は羅馬の皇帝が花押に用ひた繪具である。テニスは英語の *tennis* で、その語原は不明であるが、多分佛蘭西語の *tenir* (取る) の命令法 *tenez* から出たものであらうとの説である。ミツの如きは、支那語の蜜に出で、それはまた梵語 *madhu* の音譯で、この語は希臘語の *melis* (密酒)、英語の *mead* (密糖) など、其の範圍頗る廣く、よくよく調べて見れば、フィン語の *mele* に歸するのである。

又外來語を其のまゝ採用せず、これを自國語化して取扱ふことがある。十七世紀頃の獨逸では、國粹保存の精神から、自國語を保護せんとした結果、外來語を排斥し、なるべくこれを自國語化した。それには *andentschung* と *verdeutschung* との二つの方法がある。

andentschung といふのは、英語の *vegetation* (植物) を *wegetation* とし、中世拉丁語

外來語に就いて

外來語の自國語化

音譯

の charavalliam (騎士) を krawall として、拉丁語の arcuballista (弩) を armbrust となす類で、その外形を或る點迄同化してしまふことである。これは所謂音譯といふべきものであつて、我が國にても漢語などを採用するとき屢々此の現象が起る。例へば從者をズサ、下衆をゲス、受領をズラウとし、その他隱^{オモ}を鬼^{オニ}とし、簡^{カマ}を紙^{カミ}とし、文^{フミ}をフミとし、殿^{デマ}をトノとするなどはみなこの類で、又山羊をヤギといふのは羊の韓音 yang、半月をハニワリといふのは字の韓音 Pan-nol を國語化したものである。

意譯

次に verdeutschung といふのは、外來語の意味を採つて、それを獨逸語に譯したもので、所謂意譯に當る。例へば英語の telephone (電話) を fernsprecher (遠き話者の義) として、英語の photography (寫眞) を lichtbild (光線の像の義) として、佛蘭西語の table d'hôte (獻立表) を wirtstafel (旅館主人の目錄) として、英語の library (圖書館) を bücherschatz (書庫の義) とする類である。この現象は國語にも随分あるやうに思はれるので、桃^{モモ}を兆^{モト}に聯想してモ、と名づけ、腰輿の腰をとつて、輿を

カラ・クレ等の接頭語

コシと云ふ類もあれば、柏を栢と誤つて拍手をカシハデと訓ずる類もあり、漢字を解剖してこれを訓讀し、妻をメトル、仙をヤマビトといふ類もある。宮崎博士の説によると、囀^{サヘツル}といふ語は、韓語で鳥を鳥^{ヒナ}といひ、鳴くを鳴^ネといふから、『玉篇』に囀は鳥鳴也とある註を韓譯したものであらうとのことである。その他、家猪をブタといふのは、國語のブ(家)と韓語のブ(猪)と合併したもので、所謂倭字といふものの中には、この外來語意譯の反響ともいふべき嫌^{ウナリ}(兼女の意) 婿^{コナヒ}(女君の意) などの類がある。

又外國から渡來したものゝ名の頭にカラ(韓唐)或はクレ(吳)などを添へることもある。

犁……………カラスキ

連枷……………カラサヲ

鯨……………カレヒ(カラエヒの約)

紅……………クレナキ(クレノアキの約)

外來語に就いて

胡桃……クルミ(吳實の意)

秦機・服綿などはまた海韓語(Pai)より轉じたもので、恰も縞をシマ(島)と稱へ、南方諸島より傳來したことを示して居るのと、同じ種類の外來語であらうと思はれる。

斯の如く、外來語もなかく複雑して居るから、外國傳來の語はどうでも宜いなどと、繼子扱をしてはならぬ。比較研究者は類形の語とさへ見れば、其の系統の如何をも調べずに、直に同系の語なりと速断し、また實際上の問題に就いても、假名遣の如きに國語と漢語とを別ち、兩者の間に井然たる區劃ある如く考へるのは、外來語を無視し、誤解した結果といはねばならぬ。今少し多大の注意を外來語の上に拂ふことは、理論上及び實際上、いづれの側より見るも必要なことである。

外來語研究の必要

郡村の語原に就いて

村の語原に關する諸説

先づ村といふ語の語原に就いて、これ迄の説を見るに、大抵は群居の意に取つて、群より村を轉じてゐる。『東雅』に

ムラとは聚也。群黎の聚落をいふ也。云々 景行天皇紀に、村亦讀でフレといふは、ムラといふ語の轉ぜしなり。

『和訓栞』には

むら。村邑を讀めり。群居の義なり。日本紀に城の事を牟羅と書せしは、三韓の語なり。

と見えてゐる。

ムラを三韓の語とする説は、既に右の『和訓栞』にも見えてゐるが、最もよく彼我の國語に就いて比較を試みられたのは、白鳥文學博士で、氏の説は『史學雜誌』第六編第七號『朝鮮古代諸國名稱考』の中の新羅の條に見えてゐる。

郡村の語原に就いて

白鳥博士の
説

今氏の説の概要を擧げて見ると、

三韓に *Pin* という古語があつて、都城の義に用ひられて居る。『三國史記』に新羅の國號を徐那伐としてゐるのは、新羅と徐那と類音相通じたもので、新羅といふは畢竟、日新其德、網羅四方の義に取つて、文字の美しいのを選んだに過ぎないのである。而して伐の韓音は *Pin* で、特別の意義を有する語である。新羅の和名をシラギといふ、そのキは即ちこれに當るもので、キは城の古言であるから伐にも亦都城の義があるのである。而已ならず、三韓の古地名中には伐の類音で城邑の意義を有つてゐるものが甚だ多い。

古四州 本古沙夫里

半那縣 本半那夫里

省津 本所夫里

無割縣 本毛良夫里

甘蓋縣 本古莫夫里

右の古註は明かに夫里 (*Pin*) に州縣の義あることを示したもので、地名の語尾にある火弗不離卑離等の語はこれと同義である。さて、この *Pin* の *P* は唇音であるから、同じ唇音の *m* に轉じて *min* となるのは怪しむに足らぬ、既に任那の地名に久斯牟羅、久禮牟羅、布羅牟羅、牟羅などがあつて、遂に轉じて今日の韓語 *maeur* (村落) となつた。

今予は氏の研究を繼續して、三韓の古語 *Pin* に等しい語が我國の古語中にも存してゐることを論じようと思ふ。それは即ち村の古訓 *Pin* であつて、正しく韓語の *Pin* と同系の語であると信じる。かの大和の地名磐余はその一例で、『神武天皇紀』に大軍集滿於其地、因改號爲磐余とあるが、是はもとより俗傳で、地名の起原としては論ずるに足らぬ。磐余が磐村の約であることは、一にこれを石村と書くことに徴しても明である。『萬葉集』卷三に角障經石村毛不過泊瀬山何時毛將超夜者深去通都。

郡村の語原に就いて

村の古訓 *Pin*

同書の卷の十三に

角障經石村山丹白拷懸有雲者皇可聞。

フレの類音
名を含める地

その他フレと類音の語尾を含んでゐる古地名は頗る多い。

振(大和) 荏原(武藏) 名張(伊賀)

榎原(大和) 新治(常陸) 香春(豊前)

比良(近江) 考羅(山城) 直入(豊前)

鹿蒜(越前) 由良(紀伊) 奈良(大和)

右の地名中に見えるハラ・ハリ・フル・ヘルなどは、村の轉訛したものであらう。由良・奈良などのラも石村の村が省略せられてレとなつたと同例であらう。また荏原・榎原などの原は原野の意とも考へられるけれども、考羅の如きは、『古事記』に「以鈎探其沈處者繫其衣中甲而訶和羅鳴故號其地謂訶和羅前」とあつて、俗傳ながらも、もとの地名の音を示してゐるが、この地は後に河原と呼ぶ様になつた。されば地名に當てた文字の義に拘泥するのは、甚だ危険

フレとPit
とは同系な
り

なことである。故に荏原・榎原などの原も、多數の例に従つて、村の轉訛であらうと思ふのである。

右の如くフレ又はその類音を語尾に含んでゐる古地名が甚だ多いから、フレが我が國の古言であつて、三韓の古語 Pit と同一の系統に屬することは明白である。猶このフレから今日のムラ(村)が出来、韓語の Pit から今日の macur (村)が轉じたものであらう。

次に郡の語原に就いては、『東雅』に

後に郡をコホリといひしは、韓國の言に出しなり。即今も朝鮮の俗郡をも縣をも并にコホルといふは、即コホリの轉語なり。

といひ、『和訓栞』には

郡縣をよめるは拾遺集物名古本催馬樂にみゆ。小治の義なるべし。一説に今の朝鮮語にこほるといへばもと韓語成べしといへり。韓地に熊備己富里ある事日本紀に見えたり。

郡村の語原に就いて

郡の語原に
關する諸説

といつてゐるが、予は郡コホリのホリはフレでもと大村コホリの義であらうと思ふ。コに大の義があるといふ推測は、韓語の *kheu* (大) から得たもので、白鳥博士も既に説かれたところである。

甘勿主城 本甘勿伊忽

屠夫婁城 本肖利忽

積利城 本赤里忽

犁山城 本加戸達忽

似城 本史忽

辟城 縣本辟忽

韓語の忽と骨

右の三韓古地名に見えてゐる忽 (*hor*) 骨 (*kor*) は城又は縣の意である。韓音 *h* は純粹の喉音であつて、我が國の波行音とは全く性質を異にしてゐる。賀ガ鶴カク憲ケン喜キ等我が國では *k* の頭音をもつてゐるものが、韓國では *ha*, *hak*, *hon*, *hin* の如く *h* の頭音となるから、韓音の *h* と *k* とはもと頗る接近した音で忽

骨と類音の地名

コに大の義あり

と骨とは本來等しく *kor* の音を寫し *kheu-pur* (大村) の轉訛したものであらう。右の外、古い地名中には古離狗廬、駕洛、高麗など、*kor* に類したものが少なくなく。

獨り韓國の地名のみでなく、我が國の古い地名中にも、これと類似したものが多し。

輕カン(大和) 相樂サガ(山城) 伎人キレ(河内)

巨掠オホク(山城) 叔羅シラ(越前) 勾ムカ(大和)

長柄オカ(攝津) 伊久里イクリ(越後) 葉栗ハクリ(尾張)

而してコに大の義ありといふは、韓語の *kheu* のみでなく、國語イカシも同様「嚴」又は「大」の意を表はし、その語根イカは韓語の *kheu* に比すべきものである。

又韓語の *kheu-pur* が *kor* になるのは、*p* 音の脱落したもので、我が國語の波行音が和行音に變じ、又屢々脱落する如く、韓語の *p* 音も亦 *w* 音に變じ、或は

郡村の語原に就いて

脱落することが多い。例へば

töp (熱 S) töw-i (暑氣)

sip (十) si-nör (十月)

chip (寒 S) chw-i (寒氣)

などの類である。

以上述べた通り、村の古言はフレで、郡の語原は大村であらうと思ふ。然らばフレの原義は如何。これは更に困難なる問題であるけれども、予の推測するところでは、フレに類する國語にハラ(原)・ハル(壑)・ハル(晴)・ヒラク(開)などがあつて、いづれも皆「開く」の意を含み、韓語にも *par* に類する語に、*park*(明) *para*(望)・*park*(紅)などがあつて、又同じく「開く」の意がある。されば太古の民族は、森林を開拓し四方を望見し得べき原野を開いて、これにフレと名づけたものであらう。このフレより村といふ語が出来、そのムラから群といふ語が出たものであらうと思ふ。

フレの原義

寧樂考

ナラの名稱

寧樂の名稱は、『日本書紀』崇神天皇十年九月の條に

復遣大彥與和珥命遠祖國賁向山背擊埴安彥爰以忌瓮鎮坐於和珥武錄

坂上則率精兵進登那羅山而軍之時官軍屯聚而躡草木因以號其山曰

那羅山躡那羅須

と見え、又『萬葉集』には檜平名良奈良等の字を充てゝゐるから、書紀や萬葉の時代には、既にナラの稱呼のあつたことは確であるが、それより古は如何であつたか、又書紀萬葉の時代にも、この外の稱呼はなかつたであらうか。『萬葉集』にはこの他に寧樂といふ文字を用ひ、『唐書』などには諾樂、諾磔といふ文字も見えてゐるから、或はなほ外に別の稱へ方がありはすまいかといふ疑が起るのである。

我が國の字音は後世餘程變つて來たが、韓國の字音には古今の變遷が甚

だ少い。随つて韓字音と我が國古代の地名の發音法とを對照するに、殆ど一致するから、今の韓字音を以つて我が古地名を論評するのは、必ずしも不當ではあるまい。

當麻……………當の韓音	tang
愛宕……………宕の韓音	thang
相模……………相の韓音	syang
香山……………香の韓音	hyang
勇禮……………勇の韓音	yong
望陀……………望の韓音	nang
英太……………英の韓音	yong
愛甲……………甲の韓音	kap
雜太……………雜の韓音	cap

『地名字音轉用例』には、英太を字を省ける例の中に數へて、英團太としてあ

るけれども、英の韓音が yong であるから、これをアガと讀ませたのは少しも怪むに足らぬ。

寧はナガ
樂はラキ

寧の韓音は hyong で、諾の韓音は nak である。されば右の例から推せば、ナガ又はナグと讀むのが正當で、諾はまた伊弉諾尊イサノミコトなど神名の場合にも、ナギと讀んでゐる。それ故、寧又は諾をナとのみ讀むのは、甚だ物足らぬ心地がする。又樂は韓音 lak で、信樂シノガキ、邑樂ウラキ、相樂サガキ、晏樂イミラキなどにも、ラキと讀んでゐるから、ラとのみ讀むのは如何であらうか。

奈良の古名
はナガラキ

されば予は寧樂、諾樂の韓音に徴して、奈良の古名をナガラキであらうと考へ、更に萬葉書紀の時代には、轉じてナラキともいつたであらうと思ふのである。

平城をナラと讀まするのは、平の訓ナラスを假りたもので、若したッナラとのみなれば、平山をナラヤマと讀む様に、平の一字のみで十分である。平城の二字を充てたのは、ナラキと呼んだかと思はるゝ一證であるまいか。

ナガラキと
長柄

ナガラキ又はナラキのキは城の義で、大きな都城の名には何れも添へて用ひたものと思はれる。新羅をシラギといひ、又相樂をサガラ、邑樂をオウラとも省いて呼ぶ。その他古い地名中には訓覇と訓覓、伎人と久良などの對照もある『日韓の古地名に就て』を参照すべし。さればナガラキは長柄と對照すべき地名で、結極は同一語原から出たものかと思はれるのである。

日韓の古地名に就いて

キの意義

國語で城を訓じてキといふのは、塹壕を穿ち又は墨壁を廻らし、或は位置を丘陵などの上を選びて、防備とするよりの名で、牧塹柵陵などのキも亦この意味である。又外國の例に徴しても、希臘語 *polis* は高都の義で、梵語 *pur* (rampart, wall, city-M. William) 英語 town (The original sense is "fence"-Skert) 露語 grad などみな其の原義は塹であつて、後世の都市は何れも此の様な避難所の發達したものである。

今古代の地名を調べて見ると、次の様な對照を見出すことが出来る。

- 訓覇(伊勢)……………訓覓(安藝)
- 有馬(攝津)……………阿里莫(和泉)
- 伎人(河内)……………久良(武藏)
- 宇佐(豊前)……………白杵(日向)

日韓の古地名に就いて

キの類音を有せる地名

これは恰も新羅をシラギといふのと同じの例であつて、この對照によれば、キが獨立の語で都邑の義を表すことは明である。其の他、次の如くキの類音を有する地名は頗る多い。

相樂(山城)	磐城(陸奥)	愛宕(山城)	多紀(丹波)	信樂(近江)
高城(薩摩)	綴喜(山城)	能義(出雲)	奄藝(伊勢)	小城(肥前)
結城(下總)	後月(備中)	多藝(美濃)	彼杵(肥前)	築城(豊前)
土岐(美濃)	都築(武藏)	益城(肥前)	邑樂(上野)	美囊(播磨)
等力(甲斐)	讚岐(上總)	肝屬(大隅)	伊筑(遠江)	日置(安房)
高月(常陸)	眞木(下野)	多胡(上野)	馬城(因幡)	玉置(若狹)
佐伯(丹波)	頸城(越後)	弓削(丹波)		

シキの意義

城は又シキとも訓む。そのキは即ち城で、シは蓋し「住む」といふ義であらう。古くは人居を巢といひ、その他里(住所)・島(住居)などといふ語もある。沖繩の方言では中城・金城など、今でも城をグスクというてゐる。このグは御の字音で、スクは即ちこゝにいふシキに相當する城の古言である。又志藝・山津見・神敷・山主・大倭・日子・鉏・友・命・阿・遲・鉏・高・日子・根・神・師・木・津・日子・命などの御名も明にこのシキに基いたものである。

シキに就いても、その類音を含んでゐる地名は尠くない。いま數例を擧げて見ると、

春日(大和)	飛鳥(大和)	散吉(大和)	佐紀(大和)	日下(大和)
城上(大和)	志紀(河内)	安宿(河内)	菱木(和泉)	宿久(攝津)
布敷(攝津)	石加(伊勢)	鈴鹿(伊勢)	須可(伊勢)	足助(三河)
小塞(尾張)	三次(安房)	葛飾(下總)	須加(下總)	徳助(常陸)
安食(近江)	湯次(近江)	佐久(信濃)	佐義(備後)	吉敷(周防)

日韓の古地名に就いて

シキの類音を含める地名

國語の研究

- 諸鋤(長門) 周(枳丹後) 來(次出雲) 周(吉隱岐) 和(食土佐)
- 明敷(筑前) 益(城肥後) 揖(宿薩摩)

さて『日本書紀』に載せてある韓國の地名を見るに、次の如きものがある。

國書に見えたる韓國の古地名

- 意流村(今云州流須祇(神功紀四十九年))
- 筑足流(或本云都久斯岐城(雄略紀八年))
- 布彌支(神功紀四十九年)
- 半古(同上)
- 辟支山(同上)
- 伊(斯)相(牟)羅(城)繼體紀二十四年)
- 牟(雌)枳(城)同上)
- 任(射)岐(山)齋(明)紀六年)

この他、『三國史記』『高麗史』中の古地名にもキシキの類音のものが多

新羅の地名

い。これに就いて注意すべきことは、恰も我が朝で、元明天皇の和銅年中に國郡郷名に好字を選んで必ず二字を用ひしめた如く、韓國でも百濟高句麗の時字數に制限なく用ひた地名を、新羅の世になつてから概ね二字の嘉名に改めたことで、例へば左の如き例がある。

古地名	新羅
高句麗 烏斯含達(O-si-gam-tar)	兔山
同 沙熱伊(sa-nyō-i)	清風
同 於支吞(ō-ki-thān)	翊谿
百濟 豆夫只(tu-pu-ki)	同福
古新羅 高思曷伊(ko-sā-kar-i)	冠文
同 阿火屋(a-pur-ok)	比屋

右の中、osāgam は兔の古訓、thān は谿の古訓、kosā は冠、kari は文、apur は比、sanyōri は清風の訓であつて、その他は何れも類音の好字を選んだのである。

日韓の古地名に就いて

この例を推して、左の地名を對照すると、三韓の古に於ても、城邑をキ若くはシキといつたことが知れる。

百濟	新羅
闕支 ^{クワシ}	闕城 ^{クワシ}
悅只 ^{ヨルシ}	悅城 ^{ヨルシ}
結己 ^{キヨル}	潔城 ^{キヨル}
奴斯只 ^{ヌサシ}	儒城 ^{ヌサシ}
奈己(高勾麗)	玉岐(高勾麗)
伊伐支(高勾麗)	夫首只(百濟)
奴只(百濟)	多只(百濟)
只伐只(百濟)	達己(新羅)
三支(新羅)	多斯只(新羅)
加尸只(新羅)	阿尸兮(新羅)

その他、なほ三韓の古地名中には、キ・シキと類音のものが多し。

その上、今日の韓語^ハにも遮る隔つの義があつて、亦國語キの古義と一致してゐる。されば、キ・シキが日韓兩國の古地名に共通する都城といふ義の古語であることは、殆ど疑ふべき餘地がないのである。

敷島考

敷島はもと大和の地名で、崇神・欽明二帝の都であつたがために、大和の枕詞となり、轉じて遂に我が國の別稱ともなつて居る。この敷島といふ語は、シキとシマとの兩部より成り立つて居るから、この語を研究するには、同じくこの兩部よりせねばならぬ。

シキといふ語は都城の義で、そのシはスム(住む)の意、キは城の意である。この地名の國史の上に見えてゐるものは、志紀(河内)城上(大和)布敷(攝津)など甚だ多く、三韓の古地名にも亦少くない。『日韓の古地名に就て』を参照すべし。

又シマといふ語は、今日では海中に孤立せる陸地の義にのみ用ひられてゐるが、古はこれに限らず、秋津島宮、輕島宮及び今こゝに論じてゐる敷島などの様に、大きな陸地の一部分をも稱へたもので、『古事記傳』の四十四卷

シキ

にも、

島とは、凡て、もと周廻に界限のありて、一區なる域をいふ名にて、海中には限らざるなり。

と説いて居り、又琉球では今日でもシマをこの古義に用ひ、海中の島をばハナレ(離)と呼んでゐる。

さてシマといふ語の原義は、シはシキのシと同じくスム(住む)の義で、マは間であつて、住む場所、即ち住所といふ程のことであるから、シキといふ語と餘りその意味は變はらないのである。『日本書紀』の中に島をアサキと訓じて居り、又防守は島守とも書くから、シマとシキとは、同意であることが知れる。

シマの原義

『萬葉集』の三の卷に、

天離夷之長路從戀來者、自明門倭島所見。

とある倭島は、明に大和の國を指したものである。又『古事記』の仁徳天

皇の條に、

淤志^{オシ}互^テ流^ル夜^ヤ那^ナ爾^ニ波^ハ能^ノ佐^サ岐^キ用^ヨ伊^イ傳^テ多^タ知^チ豆^テ和^ワ賀^カ久^ク邇^ニ美^ミ禮^レ婆^バ阿^ア波^ハ志^シ摩^マ淤^オ能^ノ
基^キ呂^ロ志^シ摩^マ阿^ア遲^チ摩^マ佐^サ能^ノ志^シ摩^マ母^モ美^ミ由^ユ佐^サ氣^キ都^ツ志^シ摩^マ美^ミ由^ユ。

とある終の佐氣都志摩は古から難解の語とせられてゐるが、これもシキのシマの意であらう。又天智紀に見えてゐる島皇御祖母命とある島もさうである。

古代の地名中に、シマ又は其の類音を含んでゐるものが甚だ多い。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| 資母(大和) | 依羅(攝津) | 依網(三河) | 男衾(武藏) | 夷瀼(上總) |
| 依羅(常陸) | 志萬(常陸) | 石間(常陸) | 志麻(近江) | 伊參(上野) |
| 佐味(越後) | 志深(播磨) | 作美(長門) | 吉美(丹波) | 香住(但馬) |

これを要するに、敷島はもと都城又は住所などといふ意義で、日韓共通の普通名詞である。それが崇神欽明二帝の都の名から、轉じて大和の國の枕詞となり、遂に我が日本國の別稱となつたのである。

シマの類音
名を含める地

神奈備考

樹木崇拜

森林と神靈

歐羅巴の古代では樹木を崇拜し (Baumkultus, waldkultus)、殊に大木又は雷の落ちた木を尊んでゐるが、我が國で神籠石のある山を雷山などといつてゐる處があるのも、或はこれと關係があるかも知れぬ。ローマ・ギリシヤ・北歐では、古來樹木に精靈が存在し、森林叢は神の宿つてゐるところと信じてゐたゆゑ、ゴート語の alls は殿堂といふ意で、リタウ語の alkis(繁茂)・ギリシア語の alios(繁茂)と同系の語である。それ故歐羅巴の上代では、神を祭る特別の建設物は無かつた。印度では yupa といつて、犠牲を木に繋いで神を祭り、又 vanaspatis (king of the wood) といふものがある。マクス・ミュラー (Max Müller) の説によれば、印度の各村落では特に神聖なる木があつて、神がこの木の下に來て、その葉の音を聞いて樂むものと思はれてゐたといふことである。原民の思想に、樹木の榮枯を人類の生死と比較して、その類似に感じ、人はそ

神事と山頂

の死後木になつて再生するものゝやうに考へた結果、歐羅巴では祖先の靈が樹木に宿つて子孫を守護してゐると考へ、スエーデンに於ては大木に一家族の名を附し、アクイタニア人種も大樹を祖先として信じてゐる。かく樹木を信じることは、生樹ばかりでなく、採伐した木材をも同様に神聖視してゐる。ギリシア・ペルシャで山の頂にて神を祭ることも、この樹木崇拜と關係がある。支那でも夏は松、殷は柏、周は栗と、それ〴〵尊んだ木の名が傳へられてゐる。

我が國で神を數へるに一柱二柱など、呼び、『古事記』の伊邪那美命崩御の條に、

故爾伊邪那岐命詔云愛我那邇妹命乎謂易子之一木乎

といひ、又諸冊二尊が天の御柱を廻つて誓はれたことも、樹木を尊信する意に出たのではあるまいか。殊に森林は神の住處と考へられたので、『萬葉集』には神社をモリと訓み、『東雅』には杜の字をモリと訓むのは社の字の誤

神社とモリ

りなりとして、されど此杜の字の如きは、社の字をもて誤寫せし所とぞ見えぬ。』といつてゐる。上古神を祭るに、伊勢と出雲との外は社殿を設けず、多く樹を立て籬を周らした。『崇神紀』に

故以天照大神託豐鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬神籬此云比弄呂岐

といふのはこれである。また『古事記』下卷に

美母呂能伊都加斯賀母登賀斯賀母登由々斯伎加母加志波良袁登賣。

『萬葉集』に

神南備神依板爾爲杉乃念母不過戀之茂爾。(卷九)

石上振乃神杉神佐備而吾八更々戀爾相爾家留。(卷十)

天飛也輕乃社之齋槻幾世及將有隱孀其毛。(卷十一)

神名備能三諸之山丹隱藏杉思將過哉羅生左右。(卷十三)

とあるなど、みな樹木を崇敬した證であつて、サカキを神と書くのも専ら神事に此の木を樹て、神を祭つた爲で、樹木を尊んだ風習を知ることが出來

我が國の神事と山岳

る。唐崎の松高砂の松など、その他後世に於てもいろ／＼な大樹に神靈が宿つてゐると信じられた事は少くない。

ペルシア・ギリシアの如く、我が國でも神を祭るには多く山に於てした。

『古事記』に大國主命の奇魂を大和の青垣の東の山の上に祭つたと傳へ、『書紀』に神武天皇が鳥見山の上に靈時を立て、天神を祭られたと記してあるなどもその例で、國語のモリ(森)といふ語は韓語の 모리(山)と同系で、ナレ(川)を 모리といふが如く、r音の脱落したものである。このモリは沖繩方言でもまた山の義に用ひられる。琉球の都城は多く山上にあつて、首里を首里モリグスクといひ、またその山林には必ず司神がある。このモリといふ語の源は住處の意より出たもので、それが一方には山、一方には森林の義となつたのであるまいか。琉球の古い神歌をオモロといふ、そのモロ、三諸山(モロ)など、皆室(ムロ)といふ語と關係があらうと思ふ。

『出雲國造神壽詞』にカミナビといふ語がある。

カミナビ

モリの原義

眞淵の説

己命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛瓊玉命登名乎稱天大御和乃神奈備爾坐己命乃御子阿遲須伎高孫根乃魂乎葛木乃鴨能神奈備爾坐事代主命能御魂乎宇奈提爾坐賀夜奈流美能御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐天眞淵はカミナビは神の森の義で、カミナビの森といふのは語原を忘れた後、その意義の重複したものであるといつてゐる。カミナビに就いては、近頃種々の説が出るけれども、この眞淵の説が一番宜いと思ふ。たゞしその語原に就いては、別に考がある。

韓國の樹木崇拜

韓國でも、我が國と同じく大木を崇拜し、城隍堂と稱へて多く槐樹を祀つてゐる。韓語で木を 나무(ナム)といふが、これと同系の 나무(ナム)といふ語があつて、國王を 나무꾼(ナムクン)といふ如く、人を尊んで呼ぶときに用ひる。即ち貴人を木に比較して考へたものである。

予の考では、カミナビのナビはこの韓語 나무(ナム)と同じく木の意であつて、カミナビは即ち神木であらうと思ふ。

カミナビは神木の義

上古神を祭るには山の上に神木を立て、籬をめぐらしてこれをヒモロギといひ、或は石垣を築いてこれをイハサカ(岩境)と稱へたので、これが即ち今の神籠石であらう。『書紀』の一書に、高見産靈神が「吾起樹天津神籬及天津磐境、吾爲孫奉齋」といはれたことが見え、『萬葉集』に

神名火爾紐呂寸立而雖忌人心者守不取物(卷十一)

と見えてゐる。

要するに、大樹を崇拜し或はこれに祖先の神靈が宿ると考へることは、東西に共通する風習で、殊に韓國との言語上の類似によつて、カミナビの語原も説明することが出来るのは、興味ある問題ではあるまいか。

家族の稱呼に關する二三の考

(一) 兄弟姉妹。歐羅巴の諸國語では、例へば英語の brother, sister の様に、兄と弟姉と妹を合せて、其の間の關係を示す語があつて、兄弟姉妹を別々に離していふ語がない。我が國語ではこれと反對に兄弟姉妹などの區別はあるが、brother, sister などに當る語がない。まかしこれは今日の言語に就ての話で、古語を調べて見ると、又大いに趣の違ふ處がある。

男兄をアニといひ、女兄をアネといふのは、今も昔も變らぬが、この兩語は語尾の母音が違ふだけで、元來は同一の語らしく、兄をイロネと讀み、又御兄を那泥汝命と呼べせたまへる例もある。韓語 onni も等しく男兄及び女兄を指す語で、丁度これと符合するのである。

次に弟はオトヒトの音便で、丁度アキヒト(商人)がアキウド、セヒト(兄人)がセウト、ヲヒト(夫)がヲウトとなるのと同じ聲音の變化である。このオトは

アニとアネ

オトウト

劣で、年齢の劣れるよりいふとの説もあるが、又後の轉であるとも考へられる。要するに劣も後も同じ語である。このオトウトといふ語は、古くは兄弟のみでなく、女兄に對する女弟をも名づけたもので、姉妹とはいはず、其姉石長比賣其弟木花佐久夜毘賣(古事記)などといつた。即ち年齢の少きものは、男女に論なくオトと稱へたのである。語原は別として、韓語にも亦男弟女弟に通じて用ひられる。

長幼の序と
男女の別

それ故、アニアネとオトとの關係はもと長幼の區別で、これが男女の別を表はす様になつたのは後の事である。然らば男女の區別はどういふ風にしたかといふに、『仁賢紀』に「古者不言兄弟長幼女以男稱兄男以女稱妹」とある通り、姉妹は兄弟に向つてセと稱し、兄弟は姉妹に對してイモといつた。イモウト(妹)はイモヒト(女人)の音便であるからもとは女子の汎稱で、女弟の意に限られる様になつたのは後のことである。

之れを要するに、我が國の古代では、アニアネとオトとは長幼の序を別ち、

イモとセとは男女の別を立てたのである。

(二)阿藝。『古事記』仲哀天皇の條に伊奢阿藝とあり、應神天皇の條に佐邪岐阿藝とあるアギを契沖は吾子の意と説き、本居宣長は吾君の略だとし、なほ垂仁天皇の條に阿藝登比とあるをも、小兒の初言にて、對へる人を吾君といふ故だと説かれて居るが、『應神紀』の御製に伊弉阿藝とあるのを、『古事記』には、伊邪古杼母とあるから、この阿藝は子等の古語ではあるまいかと思ふ。韓語 어미 が兒童の義に用ひられて居ることは、益この意見を確めるのである。

アギは小兒
の義

(三)母。母をオモといふのも古語である。『萬葉集』に父母、『神武紀』に母

木邑、『皇極紀』に國主母などとあり、又乳母をチオモ、湯母をユオモと讀ませるが、予は廣く女子の總稱より出たものと思ふ。即ち妹妻妻姪姪などのマ・メ・モと同源の語で、初めは一般の女子を指し、後それ／＼特殊の意義を生じ

オモは女子
の稱

たものである。韓語で母のことを omi といひ、又女性を示す語に am といふのがある。兩々相對して考へると、一層この事が明瞭になると思ふ。

(四) 前妻・後妻。『古事記』神武天皇の條に、

古那美賀那許波佐婆多知曾婆能微能那那久袁許紀志斐惠泥宇波那理賀那許波佐婆伊知佐加紀微能意富那久袁許紀陀斐惠泥。

とある古那美は前妻、宇波那理は後妻の義の古語である。但しこの前妻後妻は今日いふ意味と少し趣を異にしてゐる。大和物語に「うはなりこなみ、一日一夜よろづのことをいひ語らひ」とある様に、同時にこの二妻を持つたもので、即ち本妻と妾とである。『字鏡』にウハナリに嫌の字、コナミに嫌の字を宛てゝあるのも、コナミは家の女君、ウハナリは兼ねて持つ女といふ意を表はした造字で、『和名鈔』に「前妻和名止豆女毛一云美」とある毛止豆女も本妻の義である。

コナミは大妻の義

コナミの原義は大妻なるべしと考へられる。妻妾を分つに大妻・小妻の

前妻と後妻

語を用ひた例は支那に古くより見え、韓國では今もさう稱へて居る。韓語で大を *kheun* とし、女性のことを *am* といふから、韓語 *kheun-am* (嫡妻) は大婦の義である。我が國語でも、イカ(嚴)などといふ語には大の義があるから、コナミは日韓共通の古語で、大婦の意と思はれる。

宣長はウハナリのウハは上の義で、後夫をウハヲといひ、前夫をシタヲといふのと同一の例だと説いてゐるが、尤な意見である。上下と前後との如く、空間と時間とを同一の語で表はす例は、この他にも尠なくない。ウハは宣長の説の如く、上の義でウハナリはウハハナリのハを略したものと考へる。タビ・ビト(旅人)がタビトとなり、カナナ(金鍋)がカナ(鼎)となる様に、重音の一を略することの例は多い。然らばハナリの意義は如何といふに、韓語に嫌のことを *myonari* といふから、ハナリは嫌の意の古言である。ハ・マ兩行の相通ずることは、烟をケムリともケブリともいひ、又多摩川を多婆川、射部を射目といふなど、その例に乏しくない。

ハナリは嫌の義

耳目鼻口

物の名と作
用の名

語の成り立ちは種々様々であるが、其の中に作用を以つて物の名とし、名に依つて作用を名づける一種類がある。例へば「截り断つが故に太刀といひ、ツカリと斬り放つより都牟刈之太刀又は須我利劔などと名づけ、遂に轉じて劔といふ語が出来た。又名から作用を名づける類は、雲より曇る、哇よりうねる、方より力む、名より告るなどいくらかも例がある、目の働さを見るといふのもその一例で、頸にてするより縊る、手にてするより取るといふのと全く同一の例である。

この現象は獨り我が國語のみに止らず、最も關係の深い韓語との比較上に於ても、等しく見られるところのもので、例へば國語のカフ(買)と韓語の(價)國語のキル(切)と韓語の Khar (刀)などである。かういふ方面から耳目鼻口といふ語に就いて觀察して見ようと思ふ。

涙

ナは目の古
語

韓語で目のことを *nim* といふが、國語の目は前にいうた通り、見るといふ語と連絡があつて、この *nim* とはまるで違つて居る。然るに涙の事を韓語では *nu-nur* といふので、直譯すると「目の水」といふことになる。*nu* は即ち國語のミヅ(水)と同語である。國語の涙は舊來の説によると、泣水垂の約まりだといふことであるが、前條の韓語 *nu-nur* と比較して見ると、ミダは水であるからナが *nim* に當る。即ちナは目の古語かと思はれる。丁度ウメ(梅)をムメ、ウマ(馬)をムマといふ様に、國語のミ(身)を韓語で *mom* といふ類もあるから、韓語の *nim* を國語のナと比較するのは、音韻上敢て無理とはいはれぬ。處が現今の國語に、ナ(目)といふ語はないが、目でする作用に泣くといふのである。これは前にいうた物の名から作用の名をつくる類で、丁度肩より擔ぐ、綱より繫ぐ、枕より枕くといふ語のある様に、ナ(目)も加行に活いて、ナク(泣)となつたのであらう。それ故、ナは我が國に無くなつて、韓國にのみ残つてゐる、目といふ義の古語であらうと思ふ。アイヌ語では涙を *nu-pe* と云ひ、見

耳目鼻口

三六

るを *ni-kara* といふ。 *pe* は水の義で *kara* は爲の義であるから、これも亦一方に参考とする價值がある。

その他、物名と作用の名との關係は、韓語の口鼻耳と國語の言^イふ^カ嗅^キぐ^キ聞^キくとの場合にも存してゐる。即ち韓語のぞ(口)は國語のイフ(言)、韓語の *ku*(耳)は國語のキク(聞)、韓語の *kiho*(鼻)は國語のカグ(嗅)に當る。國語のコエ(聲)、カ(香)なども韓語の *ku*(耳)、*kiho*(鼻)と關係のある語であらう。

之を要するに、目鼻口耳などといふ語の古語は韓語に多く傳はり、其の作用の泣く、嗅ぐ、言ふ、聞くなどといふ語が國語に残つてゐる。

韓語の口鼻
耳と國語の
言ふ嗅ぐ聞

東西南北

方位に關する名稱の起原に就いては、從來諸家の説が區々である。今、西洋の語に就いて考へて見るに、方位の命名法には二三の種類がある。先づ第一に太陽の出沒によるもの、次に風位、四季及び星座等に基くもの、又民族移動の方向に起因するものなどである。

右の中、最も重きを爲すものは、太陽の出沒に基くものである。それ故、四方の名稱中にも東西が主要なもので、南北は比較的重要なでないらしい。その爲であらうか、東西に關する語の語原は稍明瞭でありながら、南北に關する語原はいづれも甚だ不明瞭である。英語の *east* (東) は *veg* (輝く) 即ち梵語 *ush* (燃ゆ) といふ語より出たもので、日輪を意味し、英語の *west* (西) は *vwass* (住ふ) といふ語から出て、太陽の宿る所を示したものである。漢字の東も人の知る如く、日が木の上に出たのに象つたものである。又我國でも、『成務天皇紀』に東

太陽の出沒
に基く方位
の命名

西を日縦、南北を日横、山の南を影面、山の北を背面と定めてあつて、『萬葉集』にも香具山を日經の大御門、畝火山を日緯の大御門、耳爲山を脊友の大御門、吉野山を影友の大御門と歌つてある。これ等は皆太陽の出没に基いた名稱で、『齊明天皇紀』七年に檉岸山明と明の字をミナミと訓じてあるのも、亦太陽に基いたのであらう。琉球の方言では東を *aga*、西を *ai* といふが、これは最も明白な例である。

次に風位によつて名づけたと思はれるのは、本居宣長翁が東及び西を是れであるとしてゐる。『古事記傳』仁徳天皇の夜麻登幣邇爾斯布岐阿宜氏玖毛婆那禮の御製の條に、東西のシは風の古言であつて、古くは方位を示すに東西とのみはいはず、東の方西の方といつたものであると説かれてゐるが、これは従ふべき説である。風の古名がシであることの證は嵐旋風西北風のシ、暴風東風のチテ等に徴しても知られる。

琉球の方言に南を *ai* 又は *ai* など、いふは本土の南風と同語であらう。

風位に基く
方位の命名

言シは風の古

民族移動の
方向に基く
方位の命名

同じく琉球の方言に東を *aga* とのみいふのも、また東のシが獨立の一語であることの證據とはなるまいか。

最後に民族移動の方向より出でたるもの。これに就いては特に讀者の注意を促したいと思ふ。

インドゲルマン民族の中で、東に向つて進んだものは、東を「前」と名づけ、其の反對なる西を「後」と稱し、従つて南を右といひ、北を左と稱へてゐる。即ち梵語は其の適例である。

- pūrva* (東)…………… 前の義
 - apara* (西)…………… 後の義
 - dakshina* (南)…………… 右の義
 - śavya* (北)…………… 左の義
- 回紇語も亦殆どこれに類似してゐる。
- ōng* (東)…………… 前の義

東西南北

kat (西)……………後の義
 tōs (南)……………上の義
 kot (北)……………下の義

漢字の北といふ字は敗北といふ成語が出来てゐる如く、相背ける形であつて、『説文』には𠂔也。二人相背とある。されば支那人は北を背にし南に向つて移動したものであらう。アイヌ語で東を moshirpa 又は moshiretok(地頭)といひ、西を moshirigesh 又は moshirenko(地尻)といふのも、其の移動の方向より起つたものであらうと思ふ。また『神功皇后紀』に南加羅南蠻と南をアリヒシと訓じてあるが、アリヒは今の韓語의의の古形 aru で前の義である。即ち韓民族が半島の北部より南方に向つて進んだ事が分るのである。この様に方位の名稱が支那朝鮮アイヌ諸民族の移動の方向を示して居るか、予は國語東西の語原に就いても同様の解釋を試みたいと思ふ。

ヒムカとニとの意義

東西のシは、本居翁の説に従つて、風の古言としても、残りのヒムカとニと

沖繩方言の北といふ語

大和民族と琉球民族との移動の方向

の解釋を如何にするか。ヒムカを、日に向ひ進む義にとり、ニを往ぬ即ち過ぎ去りし過去の意に解せば、また大和民族發展の方向を示したものと見ることが出来る。かくいふは琉球方言調査の結果から推定したのであつて、既に前にも述べた通り、琉球では東西を日の出沒によつて上り入りと稱へて居るに關らず、北の方を nishi 又は kishi というてゐる。これは沖繩本島を始めとして宮古八重山與那國諸列島盡くさうであるので、頗る奇異といはねばならぬ。若し予の説の如く、西のニが過去を示したものであれば、大和民族は西より東に向ひ、琉球の種族は九州地方より別れて南に向ひたるが爲の結果といはねばならぬ。

これを要するに、南と北との語原に就いては未だ確としたる考を述べることは出来ないが、琉球方言比較の結果、東西の二つは民族移住の方向を示したものであるまいかといふ疑が深くなつたので、まだ不完全ながらこれを發表して廣く識者の教を乞ふのである。

古事記の一節に關する私疑

言語上の遊戯

我が國語は同音異義の語に富み、これを利用して言語上の遊戯となし、或は事物起原の説明に用ひたことは、古くからその例に乏しくない。『萬葉集』に見えてゐる小豆無アチキナク（味氣無）借五百カライホ（假鷹）將見圓山ミムロ（三室山）義之テシ（助辭テシ）の如き借訓・戲書の類、その他『竹取物語』にある語原の説明などはみなこれである。例へば

かの鉢を捨て、又いひけるにぞ、おもなき事をばはちすつとはいひける。

燕のまりおけるふるくそをにぎり給へるなりけり。それを見給ひて、あなかひな（負無）のわざやとの給ひけるよりぞ、思ふにたがふ事をば、かひなしといひける。

特に『古事記』はもと語部が語り傳へたものであるから、聴衆の興味を呼

古事記に於ける言語上の遊戯

ふためところ、この同音異義の語を使つて、事物の起原などを説明してゐる。

取其矢自其矢穴衝返下者中シタヘバ天若日子寢胡床之高胸坂以死此還矢可也亦

其雉不還故於今諺曰雉之頓使本是也上卷

亦所纏御手之玉緒便絶故不獲御祖取得御子爾天皇悔恨而惡作玉人等

皆奪其地故諺曰不得地玉作也中卷

以御杖打大阪道中之大石者其石走避故諺曰堅石避醉人也中卷

如此相讓非一二時故海人既疲往還而泣也故諺曰海人乎因已物而泣也

中卷

これ等は當時俗間に行はれてゐた俚諺を、巧に説話中の事實と結び付けたものである。

於是兄宇迦斯以鳴鏑待射返其使故其鳴鏑所落之地謂訶夫羅前也中卷
從絲尋行者至美和山而留神社故知其神子故因其麻之三勾遺而名其地

古事記の一節に關する私疑

謂美和也。中卷

各中挾河而對立相挑。故號其地謂伊杼美。今謂伊豆美也。中卷

爾追迫其逃軍。到久須婆之度時。皆被迫窘而屎出懸於禪。故號其地謂屎禪。

今者謂久須婆。又遮其逃軍以斬者。如鶉浮於河。故號其河謂鶉河也。亦斬波

布理其軍士。故號其地謂波布理會能。中卷

到山代國之相樂時。取懸樹枝而欲死。故號其地謂懸木。今云相樂。又到弟國

之時。遂墮峻淵而死。故號其地謂墮國。今云弟國。中卷

故登立其坂。三歎詔云。阿豆麻波夜。故號其國謂阿豆麻也。中卷

これらは何れも類音を以て地名の起原を解釋したもので、かの『竹取物語』に見えてゐるものと、同一の筆法に出でたる、言語上の遊戲に過ぎないのである。

我が國語と同じ系統に屬する韓語にも、亦同音異義の語が多く、これを以て我が國と同様に言語上の遊戲に用ひ、又これより種々の迷信が起つてゐる。

韓語に於ける言語上の遊戲

る。言語上の遊戲中には、我が國の謎に類する *susuchyökki* 又は *sakinjil* などがある。迷信の中には、例へば韓語望日 (*poram*) と腫物 (*puram*) と兩語その音の近いため、大望日 (上元の日) に望果と稱へ胡桃栗など殼の堅い果物を噛み碎いて食へば腫毒を免るといひ、また韓語橋と脚とは同音で *pari* といふから、上元の夜に橋を踏めば脚氣を病むことなしというて、京城ではこの夜觀月を兼ねて、滿都の子女が廣通橋の上に群集する、又無と蕪とはその音いづれも *mu*、瓶と病とも同音 *pyong* であるから、蕪を瓶形に刻んで食へば無病なるべしなどいふ類がある。又韓國の古史を見るに、彼の國の古代に於ても、亦我が國と同じく、同音異義の語に附會して事物の起源を説き、又地名の起りなどを説明した例が少くない。例へば、新羅の始祖赫居世が瓠形の卵から生れたから、朴姓を名乗つたなどといふのはそれで、『三國遺事』一の卷に「男以卵生。卵如瓠。鄉人以瓠爲朴。故因姓朴。」と見えてゐる。これは朴の韓音が *pak* で、瓠の韓訓も亦 *pak* であるから附會した説である。慶尙道慶州府の南門外にある大古墳は、この卵

を埋められたものだ」と傳へられてゐる。

又高麗の古都九都城(九都の韓音 *hoan-to*)を今の劔山(劔の韓訓 *hoan-to*)だといひ、檀君降誕の阿斯達山(阿斯達の韓音 *asat-tal*)を今の文化縣九月山(九月の韓訓 *ahop-tal*)なりといふなどの類もある。

右の通り言語上の遊戯が日韓兩國に共通であることから考へれば、この現象は甚だ古く、兩國語分岐以前から存在してゐたものと思はれる。今この事を基礎として、左の『古事記』の一節を讀めば、更に新しい解釋が下せようかと思ふ。

古事記の一節と言語上の遊戯

故所殺神於身生物者於頭生蠶於二目生稻種於二耳生粟於鼻生小豆於陰生麥於尻生大豆上卷

『書紀』の傳説は、これと聊か違つたところがある。

是時保食神實已死矣。唯有其神之頂化爲牛馬。願上生粟。眉上生鹽。眼中生稗。腹中生稻。陰生麥。及大豆。小豆。天熊人悉取持去而奉進之。卷一、一書

『古事記傳』に

是等を書紀の註どもに、かく身體に生と云は假の言にして、實は其物々に宜き土地に殖えなすこと、説きなせるは、みな例のなまざかしき推量の私事にて、いたく古傳の意にそむけり。又生る物と其處とを合せて、然る由を云へるも、眉に鹽の生れる外は、みなわたらず強言なり。凡て何事も強ていへば如何さまにもいはるゝものぞ。

と論じてあるが、今暫くその身體各部の名と、そこから出來た物の名とを、韓語に直して對照すると、左の如き類似がある。

- 目(mun)……………蠶(mue)
- 頭(mōri)……………馬(mār)
- 耳(kui)……………耳麥(kui-ri)
- 陰(poehi)……………麥(pori)
- 鼻(kho)……………大豆(khong)

古事記の一節に關する私疑

腹(pai)..... 稻(pyo)

この表は全然我古傳説と一致はしないが、頭と馬、陰と麥、腹と稻とは全く同じく、目と蠶とは『書紀』の傳と符合し、又『古事記』に耳から粟が出来たとあるを、粟は穀類の通稱であるから、しばらく耳と耳麥とを對照し、鼻から小豆が出来たとあるを、大豆と小豆との混同したものと見る。且つすでに記紀の間に右の通り傳説が違つてゐるのであるから、上記の如き對照を試みるのも、あながち無理でもあるまい。若しこの比較を假に正しと認むるときは、『古事記』のこの一節は、日韓兩國に共通する、言語上の遊戯から出たものではあるまいかと思はれる。

又『古事記』の解釋に韓語を使ふといふ事が、甚だ突飛の様に見えるけれども、これは日韓兩國語が同系に屬することを知れば別に怪むに足らぬ、殊に韓語 mori(頭)と國語 ツムリ、mar(馬)とウマ、poohi(陰)とホト、pai(腹)とハラ、pio(稻)とホ(穗)とは同系の語であつて、韓語 mun(目)、kui(耳)、kho(鼻)に對しても、國語

ナ(目)、キ(耳)、カ(鼻)といふ語根があつたらしく思はれるのである。〔耳目鼻口〕を參照すべし。

韓國に於ける言語上の遊戯

韓國の遊戯法中、言語に關係あるものには *susuchyökki* (謎) *sakinjil* (考へ物) *cha-matchim* (字合) *koenl-modemum* (郡名合) などがある。

susuchyökki は我が國の謎と同じもので、これにはいろいろの種類がある。その最も普通なものは

- 頭から食つて、腋から出すものは何。……………礮臼
- 尻から食つて、頭から出すものは何。……………鉋
- 井戸を掘りながら歩くものは何。……………杖
- 天に向つて、拳を振り上げるものは何。……………餅搗
- 親爺は立つて眺め、息子は行つて地を掘るものは何。……………弓術
- 一歳でも疱瘡、二歳でも疱瘡、元服して

も疱瘡、八十歳でも疱瘡するのは何。……………胡瓜

若い時は青い着物、年をとつて赤い着物は何。……………唐辛子

とげくの中にするべく、すべくの中にしぶく、しぶくの中にほりぼりは何。……………栗

黒々の下にはちく、ぱちくの下にふんく、ふんくの下にはつくは何。……………顔

赤い牆の内に白く、白く、赤い牆の内にはぬらくは何。……………口

赤い財布に金貨一杯は何。……………唐辛子
一つ枕に大勢寐るのは何。……………垂木

小さい絲蛇が大海の水を飲み盡すの

は何。……………燈心

口が一つで目が千は何。……………箎

頭に目一つで先に立つて教へるのは

何。……………提灯

謎の中には、これ等の外、同音の語を揃へて戯れ、また同音異義の語でもじるものもある。

枯木に花が二輪咲いて、實(yŏl-mŭi)が十

個(yŏl-kŭi)結ぶ(yŏl)は何……………串柿

韓國の串柿は木の枝に柿を十個づゝ貫いて、その兩端をさゝらの様に押し潰ふして留めてある。それを花に譬へていうたので、この謎には yŏl としふ音を三度續けて興味を添へてある。

アルがアルを銜へてアルに行くのは何。

音に關する
戯

これもアルといふ音に謎があるので、籬子(pyŏng-a)が粟粒(chyo-a)を銜へて縁の下(maru-a)へ行く」と解く。

柿(kam)は柿でも食へない柿は何……………令監(yŏng-kam)

令監はもと官名であるが、老吏紳士といふ意味にも用ひられる。この謎も矢張 kam としふ音に掛けたもので、この類にはなほ次の様なものもある。

靴(sin)は靴でも穿けない靴は何……………鬼神(kui-sin)

山(san)は山でも草木禽獸のない山は何……………雨傘(usan)

sakinjil としふのも亦謎の類で、これは姓名住所年齢等を様々にもじつて、

問答するのである。例へば

お住居は何處……………門の内、門の外。

韓國の大家には、大門と中門と二つあつて、大門の内側に行廊といつて奴婢の住ひがある。こゝではこれをいふので、日本で長屋住といふ程のことである。

考へ物

御苗字は……………山が四方より圍む姓。

これは田姓のことで、この外木が相撲をとる姓といへば林と解く。又

御姓名は……………いやです。

韓語で「いやです」といふことを chochian といふから、これを曾致安 (cho-chian) といふ姓名と解くのである。又お生れは何の年かといふ問には、左の如く答へる。

頭に瘡の出来九年病載 (pyöng-in)……………丙寅 (pyöng-in)

犢を賣つて歸る年價負 (kap-chin)……………甲辰 (kap-chin)

新米 (sin-mi) の出る年……………辛未 (sin-mi)

cha-matchin といふのは字合せて、何でも手當り次第に書物を開いて、そこにある同じ文字を成るだけ早く成るだけ澤山探し出すことを競争するのである、例へば

耕者皆欲耕於王之野。

字合

商賈皆欲藏於王之市。

といふ文章ならば、皆欲於王之の五字を早く見付けた者が勝になる。この一種に出鱈目に韻字を揃へて戯れることもある。例へば

花開春節、葉開夏節、黃菊丹楓秋節、水落石出冬節、嘗百濟衆神農

氏德、始劃八卦伏羲氏德、三國聖主劉玄德、亂世奸雄曹孟德、魏國

名將龐德、蜀國名將張翼德、唐太宗之蔚遲敬德、

koent-modema といふのは又「聚郡」ともいつて、字合せと同じく何か書物を一

枚あけて、その中にある文字で韓國の郡名を組み立て、數の多く早い方が勝利となる。例へば

昔者齊景公問於晏子曰、吾欲觀於轉附朝儻、遵海而南、放于琅邪、吾何脩而可以比於先王觀也。

詩云、王赫斯怒、爰整其旅、以遏徂莒、以篤周祜、以對于天下、此文王之勇也、文王一怒而安天下之民。

聚郡

この中から海南天安の二郡名を抜き出す類である。韓國の遊戯は種々あるが、言語に關係あるものは先づこれくらゐであらう。

國語學に對する予の希望

國語學の現
狀

醫學とか、法律とか、その他の學術が文明の進歩に連れて益盛になつて行くのと較べて見れば、我が國語學の進歩の遅いことは、實に驚くばかりである。我が國語學は主に維新以前の學者の手に成つた儘で、宣長・春庭・義門などの諸大家の時代と今日とを較べて見るに、著しい進歩の跡を認めることが出来ない。勿論その間には色々の學者が出て、多少學說の改善はあつたらうが、他の學術に比して發達の遅々たることは争はれぬ。

近來に至つて、言語學が稍普及して來たのは、甚だ悦ぶべきことである。されど、これとても僅に言語學の概論が紹介せられた位のもので、その學理を我が國語學上に應用したものは甚だ尠いのである。勿論、他の科學と言語とは多少趣を異にして居つて、西洋の言語學の原則を直ちに我が國語にあてはめることは困難である。従つて言語學の進歩も比較的遅いわけで

言語學

言文一致論

あるが、しかし言語學の概論そのものも、まだ十分に理解せられてゐないやうである。かの言文一致論も、言語學普及の結果、國語學界に現れた現象の一であるが、論者の主張する所は、中古の言語は如何に優美でもそれは死語で、現今用ひられてゐる言語が眞に我等の國語である、現社會に用ひられてゐない言語を學ぶことが甚だ徒勞であるのみならず、同時に記載語と談話語と二様の國語の存在するのも、頗る面倒なことであるといふのである。その説は如何にも明瞭であるが、實際に當つて見るとさう簡單なものではない。言語は時々刻々に變遷して行く。昔の言語と今の言語の違ふ通り、將來とても同じく變つて行く。その變遷して止らない者に人爲的牽制を加へて、幾分か安定を保つて行くのである。僅數ヶ月の間に全然變つて行く野蠻語があるのは、この牽制力が缺けて居るからで、文明の進むに連れて、人爲の方法によつてこの變遷をある程度まで制限するのである。言語の變遷は地理的に多くの方言を分出せしめるから、もし人々が思ひくゝに話

國語學の進歩せざる理由

し言葉を筆にしたならば、國語は愈分裂するばかりであらう。それ故、記載語と談話語とを接近せしめる前に、先づ順序として標準となるべき國語を定め、時間的にその變遷を制限し、空間的にその分裂を豫防した上でなければ、本當の言文一致は成り立たぬのである。言語學が十分に量會せられてゐないため、此の點に於ても誤解があるやうである。

他の學術が急足の進歩をしたのに、國語學のみは何故進歩しないのであらうか。人物の足りない爲であらうか、方法の拙い故であらうか。人材は何れの世とても無からう筈はなし、研究の方法も時と共に必ず進んで居らなければならぬ。理由はその他にある。

日本語を日本語だけで研究するといふことは、古人がもう大方やり盡してゐる。同じ材料を持つて働けば、如何なる學者が出やうが、天才が出やうが、得るところの結果は分り切つてゐる。それ故、我々は古人が着手し得なかつた材料を求めて、活動しなければならぬ。それは即ち、日本語を日本語

比較研究

のみでなく同じ系統に屬する言語と比較して研究することである。歐羅巴に於ては、この比較言語學が十九世紀の初から起つて、暫くの間に非常な進歩をして、一世紀後の今日では立派な學問となつた。東洋に於ては、比較研究は全く空前の事である。先づその範圍は少なくとも、我が國語を中心として、第一に琉球語、次に韓語、滿洲語、蒙古語に互らなければならぬ。勿論これは我が國語の系統を大陸の言語に求めた上のもので、若し南方の系統を引いてゐると假定すれば、更に臺灣、馬來半島、南洋諸島の土語をも研究して比較しなければならぬ。南方説と北方説との是非は姑く措き、我が國語に最も近いと思はれる言語の研究は、何を措いても先づ國語學者のせねばならぬ事業である。然るに、不幸にもこの方面の研究は從來殆ど絶無と言つて可い。外國の言葉はさて措き、我が版圖内にある琉球語ですら研究した人はない。琉球語の研究は英人チェンバレーン(B. H. Chamberlain)の手によつて漸く成り、亞細亞協會(Asiatic Society of Japan)會報の別冊として其

外人の研究

報告が出てゐる。韓語の研究も亦英人アストン(W. G. Aston)が着手した。

古人の研究

この様に、正に我が國語學者のなすべき範圍の仕事が、常に關係の薄い外國人のために先鞭をつけられてゐるのは誠に嘆ずべき事である。昔の國語學者の中には、中々規模の大きな人があつて、今日に比べると非常に不便な世でありながら、韓語なども多少研究してゐる。藤井貞幹の『衝口發』、新井白石の『東雅』、谷川士清の『和訓栞』などには國語と韓語との比較が載つてゐる。伴信友の『假字本末』、太田全齋の『漢吳音圖』などには、諺文が詳しく調べてある。今日はそれと比べて遙に便利な世であるにかゝらず、國語學者で韓語の研究をしてゐる人は、未だ殆ど無いといつてもよい。滿洲語や蒙古語などに就ては猶更のことである。他の諸學科の博士達の中には、韓語の研究に興味を以つて居られる方が多いが、肝腎の國語學者の中には、反つて一人もない。非常な富が埋れて居る學術上の未開墾地があるに拘はらず、徒に古人の糟粕を舐めてばかり居るのは實に遺憾と思ふ。せめて英語、

國語學者以
外の研究

獨逸語などに拂つてゐる注意の半分でも、この同系語の上に注がせることが出来れば、我國語學は確にその面目を一新するであらうと思ふ。

日韓滿蒙語の研究に就いて

日本語と韓語との關係に就いて、其の根源の全く同一であるといふ學術上の證明は十分に與へることが出来るのである。滿洲語蒙古語も段々研究が進めば、定めて我が國語との間に關係を見出だすことが出来ようと思ふが、今日の處ではまだ未決の問題である。たゞ韓語ばかりは、我が國語と同一系統のものであるといふ確信を予自身も持ち、又説明すれば人にも持たせることが出来ると考へて居る。

國語を單獨にその國語のみで研究するのと、其れに關係ある他の國語と比較して研究するのは、非常な違ひがあるもので、我が國語のみを材料として考へて居つては決して分らない問題も、一たび韓語の方面を顧みれば、直に解釋の出来ることが幾らもある。今二三の例を擧げて説明して見ようと思ふ。

國語の解釋
と比較研究

カバネは大骨の義

骨は齒根の義

ワセは早の義

(一) 屍骨。カバネといふ語の語原は皮骨カハネの略だとする説もあるが、韓語と較べると又別の解釋を下すことが出来る。カバネのカは國語のイカ嚴韓語の *ka* (大) などと同語で、カバネは即ち大骨の義であらう。又骨といふ韓語は *pyo* で、これを國語のホネと比較するに、ホといふ部分と通じるやうである。國語ハ齒もこれに近い。依つて考へるに、人體中で堅い骨質の外部に現はれてゐるのは先づ齒で、古人は骨を以つて齒の根と考へ、ハネ即ちホネといふ語をつくり、更らに屍を大きな骨と心得たものと思はれる。韓語 *pyo* (骨) は國語の齒に相當する語根が其儘残つたのであらう。骨を齒の根と見たのは、丁得胸を四肢の根と考へ身根ムネと名づけたのとよく似て居る。

(二) 早稻。早稻をワセといふが、これは單に稻のみには限らぬ。『萬葉集』に和佐芽ワサハ子和佐瓜ワサウラ和勢粟ワセアハなど廣く用ひてあつても、ワセといふ語は早いといふ義であるらしい。韓語 *osio* (早し) と比較して見れば一層明瞭に分る。

(三) 髭口。口の上に生えてゐる毛をヒゲといふ。そのゲは一目して毛髮

ヒゲは口毛の義

キは鳥の古語

の義と推定せられるが、ヒは何であらうか。韓語で口のことを *ka* とし、これが我が國語ではイフ言といふ動詞となつてゐる。それ故、ヒゲのヒは或は *gi* と同一語根で、口の義ではあるまいか。毛をその生えてゐる場所によつて名づける例は他にもあつて、眉毛ヒゲは目上毛メウマウ、苔コケは木毛キウマウの義である。

(四) 鳩鳥。韓語で鳩を *pi-tark* とし、その *tark* は鶏の事である。國語のハトはハトリの略で、ハは韓語の *pa* と通じてゐる。さて、トリは韓語の *tark* と同語であるが、たゞ韓語の方には *k* の一音が餘計ある。この *k* 音も或は鳥の義の古語ではあるまいか。韓語で雁のことを *kiro-ki* といひ、その *kiro* は國語のカリに當るからう、残りの *ki* が鳥といふ意らしく思はれる。國語の鳥名中にもキといふ音の語尾に添うてゐるものが多い。例へばサギ鷺、シギ鴨、ツキ桃花鳥、サギ鷓鴣の類である。

(五) 蛇鱧。蛇のことを韓語では *paam* といふ。b 音と m 音とは相通じるから、國語のヘビと韓語の *paam* とは畢竟同語である。ハブ飯匙、ハミ蝮蛇、ウハ

蛇と鱧とは
同語

バミ(蟒蛇)などと較べて見ると、此の事は一層明瞭に知れる。國語のハモもこれと同語であらう。これはその形が似て居るから鱧を海蛇と考へたもので、西洋でも鱧といふ語の源は蛇といふ語から出てゐる。即ち獨逸語の[英語の eel はもと拉丁語の anguilla から出たもので、それはまた eel といふ語根に、小さき意を示す]といふ接尾語が添うて出来たものである。その eel は「窒息せしむ」といふ義で、他の動物を締め殺す大蛇を指したものである。また蟲の名には語尾に m 音の付いたものが多い。右のハミや piam などの外國語ではシミ(衣魚)シラミ(虱)ノミ(蚤)韓語では chom(衣魚)kaiam(蟻)namiam(蟬)などがある。

霞は日染の
義

(六)日・霞。日のことを韓語では ^ニニといふが、韓語の h 音は國語では必ず k 音になる例であるから、^フフカ^ニニ三日のカ、又コヨミ(曆)日讀の義の コ は即ちこれに當る。カスミ(霞)のカも日の義で、スミは染の義であらう。『和名鈔』に霞を「日邊赤雲」と解してあるが、要するに日光の染んだことを指したもので

あらう。

カラは所ニ
テの義

(七)から。最後に天爾袁波の一例を示さう。國語のカラといふ天爾袁波は、『書紀』に「浮海往を」フネカラニユク」と訓ませてある通り、昔は「にて」といふ意にも用ひたのである。このカラのカは「所」といふ義で、ラは國語のみでは不明であるが、韓語と比較すると解釋が出来る。即ち韓語の ^ニニといふ造格 (instrumental case) を表はす天爾袁波に當るもので、これが「にて」の意を示すのである。

以上の解釋はどこまでも正しいとはいはぬ。或は穩當でない處があるかも知れぬ。けれども、従來國語のみで研究した時には分らぬことも、韓語を参照しただけで、兎も角も一の假定説なりとも立てることが出来る。新しい材料を用ひただけに見解の廣くなつたことは確である。この上更に滿洲語及び蒙古語を研究して比較したならば、一層材料が多くなり、判斷が確定に近づくことであらうと思ふ。滿洲語・蒙古語に對する予の知識は甚

滿洲語蒙古
語の研究

だ僅少であるが、遼史金史元史の語解中に見ゆるものだけでも、なかく我
が國語ならびに韓語に類似してゐるものが多い。今その中の二三に就い
て言はうと思ふ。

ハの原義

(一)者。國語のハといふ天爾袁波には者といふ字が充てゝあるから、その
原義は「者」であらうと思はれる。又バ(場)といふ語もある。韓語の^ㅁはこの
兩方の意義があつて、滿洲語の^ㅁ、蒙古語の^ㅁも共に「處」といふ義であるから、
國語のハ又はバと關係があるらしく思はれる。

(二)大。屍の條にいつた通り、國語イカは大の義であつて、韓語の^큰、滿洲
語の^{ᠮᠤ}、蒙古語の^{ᠮᠤ}も皆同じ意義の語である。

オモは女子
の總稱

(三)母。國語のオモ(母)はもと女子の總稱であるが、韓語^{ᄇᆞᆫ}(母)、滿洲語^{ᠮᠤ}
(母)、蒙古語^{ᠮᠤ}(妻)と同語らしく思はれる。

(四)美。細女^{クハシメカッハシ}香美のクハシは「美し」といふ意の古語であるが、これも韓語の^{ᄇᆞᆫ}
(美)、滿洲語の^{ᠮᠤ}(美好)と頗る似て居る。

(五)時^{トキ}のこと。韓語で^{ᄇᆞᆫ}、蒙古語で^{ᠳᠠᠬ}といふのも同じ語であらう。
此の如き例はまだ幾らもあるから、少し許り表にして擧げて置く。

韓語	滿洲語	蒙古語	國語
adar(息子)	idar(壯子)		aki(子)
aka(子)	age(子)		toki(時)
chyök(時)		chak(時)	ko(粉)
karo(粉)	hala(粉)	hurugu(指)	
karak(指)		ika(大)	ika(大)
kin(大)	ika(大)	hara(黒)	kuro(黒)
köm(黒)			kaha(美)
kop(美)	suwa(美好)		kura(谷)
kor(谷)	holo(山谷)		

man(多) nar(馬) mir(麥) miso(醬) mur(水) nar(日) omi(母) or(正) pa(者)所 pärk(明) phur(青) pöl(蜂)	morin(馬) mere(麥) misan(醬) eme(母) uru(正) pa(地) fulgyan(紅)	meni(各) mori(馬) nuren(江) nara(日) eme(妻) uruha(端正) pa(地) poru(青) pal(蜂)	mane(普) nna(馬) miso(味噌) midan(水) omo(母) ha(者)ba(場) hirak-u(開) hachi(蜂)
--	--	--	---

單語の類似
を以て國語
間の關係を
速断する危
險

sir(絲) susul(絲) teur(野) tor(石) tungur(圓)	sirga(絲) sisi(高粱) tala(野) teri(磐石) tugurik(圓)	shushu(高粱) deli(石) dugrun(圓)	sudsi(筋) susa(莖)
--	---	------------------------------------	---------------------

この様な單語の類似は、集むればまだいくらもあるであらう。けれども學術上より見れば、たゞ單語の類似して居るのみでは甚だ薄弱な證據にしかならぬ、これで以つて直ちにその國語間に關係ありと速断するのは甚だ危険である。何となれば人間の聲音は千差萬別であるけれども、類を以つて分ては、結極少數の基音に歸するから、全く關係のない國語の間にも、音の偶然類似した單語を見出すことが往々ある。又民族・文化の觸接したる場合には必ず言語の貸借が行はれるもので、全く異なる語族から言語を借用

することも屢ある。且、語音は時々刻々變化して行く。殊に文字の無い場合には、古い言語の保存せられることが極めて稀である。印度日耳曼語の如く、同系語も多く古記録も澤山あるものですら、今日より原始の形に遡り得る語の数は極めて少い。それ故、言語の外形即ち音の上に於ける單語の類似ばかりに依頼することは危険であるのみならず、これによつて斷案を下すのは寧ろ不可能である。そこで、今日の學者は外形を研究すると同時に、内部の構造即ち文法的組織に重きを置く傾きがある。それ故、單語の比較はこれだけに止めて置いて、他日更らに文法的組織を論じて見ようと思ふ。なほ國語と韓語との文法上の比較は、拙著『日韓兩國語同系論』の中に述べて置いたから、参考せられむことを希望する。

近來我が國でも比較言語學上の趣味が稍行きわたつて、これを研究する學者も多いやうであるが、まだ言語の外形に重きを置きすぎる傾は免れない。先頃白鳥博士が地學協會で演説せられた、アイヌ人種とフィン人種と

誤れる比較
研究

同種族であらうといふ説の中にも、アイヌ語の *sa* (乳) とフィン語の *sa* (乳) と韓語の *sa* (甘) とを比較せられて居るが、アイヌ語の *sa* はもと略語で、正しくいへば *to-pe* である。その *sa* が胸であるは水、即ち「胸の水」といふ義である。なる程外形だけは似てゐるけれども、その成立の上からいへばこの通り大變違ふ言葉である。又アイヌ語 *he* (火) と韓語 *hi* (火) とを比較せられたが、これは外形も餘り似て居ないのみならず、韓語には見えない *a* といふ音が「燃ゆ」といふ義で、重要な意義を持つてゐる。 *he* は「物」といふ義で、 *abe* は「燃ゆるもの」といふことである。アイヌ語 *opere* (處女) とフィン語 *ju* (少女) とをも比較せられたが、これも外形が似て居ないのみならず、*o* といふのは陰部、 *pere* は「裂ける」といふ義である。又松村博士が長く『東洋學藝雜誌』に載せてゐられる『言葉のかず〜』の中にも、國語のユキ(雪)は韓語のサライキヌン(霰)のイキの轉訛だといふことが見えて居るが、韓語の霰といふ語は *sarak-nun* で、その *nun* は雪、 *sarak* は小米といふことで「小米雪」といふ義である。又嘗てパチエラ

ト氏がアイヌ語とバスク語とを比較して、アイヌ語の *chis*(家)とバスク語の *et-che*とを同語であるといはれたが、アイヌ語の *chis*は「我等」、*che*は「貝」といふ義で、アイヌの古代穴居の様を貝殻に比した語である。バスク語の *et-che*には恐らく貝といふ義はあるまい。この様に大家の研究にも、往々如何はしく思はれることがあるから、單語の比較は極めて慎重なる態度を以つてしなければならぬといふことを明言して置く。

韓語研究の急務

わが日本國民は何故に東洋各國語の研究に冷淡であるか。最も近い隣の支那や朝鮮の語學を研究する者さへ、至つて少いのは實に不思議な位である。尤も漢字といふ共通のものがあつて、語學を修めなくとも、彼等と交際し、彼の國々の事情を窺ふに、多少の便利はあるに相違ないけれども、日本人が他國語の研究に冷淡なのは確に一の缺點である。西洋人の足跡の印する所には、必ず語學の研究が残つて居て、後代の手引をしてゐる。學者の旅行には勿論、宗教家、商人、漂流者の如き者までも、初めて渡つた土地で、多少言語の研究をしない者はない。我が日本人も今後之を學ぶ必要がある。

ホルトガル人が我が日本に初めて來たのは西曆千五百四十二年であるが、當時は相互の言語が分らないから、繪を書いて意志を示し合つたとか。然るにホルトガルのアルバレス(Alvarez)といふ宣教師の日本文典が出版せ

西洋人と語
學研究

西洋人の日
本語研究

られたのは千五百七十二年であるから、この三十年間に既に文典を編述するまでに研究が進んでゐる。その他、ロドリゲス (Rodriguez)、ドンケル・クルチウス (Donker Curtius)、シーボルト (Siebold)、ホフマン (Hoffmann)、アストン (W. G. Aston)、チェンバーン (B. H. Chamberlain) など輩出して、我國人の國語研究を凌駕してゐる。彼等西洋人は日本語ばかりでなく、韓語をも亦同様に深い興味を以つて研究し、シーボルト (F. Siebold)、ダレー (Dallé)、アストン (W. G. Aston)、アンダーウッド (H. G. Underwood)、ゲール (J. S. Gale) などの學者が相尋いで出で、この趨勢は歐洲に於ける東洋研究熱を喚起した。歐洲人よりいへば、これらは遠い極東の國語で、決して我々が隣國に對するが如き密接の關係があつたのではない。けれども、彼等の着眼する所は甚だ大い。東洋に於いて事業を企てるに缺くべからざる素養はその言語にあることを看破して、かくまで熱心に極東の各國語を研究したのである。

他國のことは姑く措き、韓國と我が日本とは太古より交通の頻繁であつ

たことは今更言ふまでもなく、當時の兩國語の状態は今より測り知ることには出来ないけれども、天武天皇の頃新羅の留學生三名が日本語研究のために渡來し、淳仁天皇の時にも二人來學のことが記録に残つて居る。我國でも淳仁の御代には、美濃と武藏との青年二十人を選抜して新羅語を學修せしめ、嵯峨天皇の時にも、對馬に新羅語の研究生を置いたことが見えて居る。その後不幸にも外交が杜絶してからは、無論言語研究の必要がなかつたと見えて、何等の記事も見えぬが、太閤の征韓の役後は、朝鮮の側でも日本語研究の必要を感じたものと見えて、『提解新語』や『倭語類解』の如き語學書が出来て居る。しかし、我が國では彼の國語を研究したものが至つて少く、著述としては僅に雨森芳洲の『交隣須知』の一書があるのみである。

明治になつて漸く學者間の注意に上り、研究者が次第に殖えて來た。明治廿四年より三年間、岡倉由三郎君が韓國の日本語學校教授として在職せられ、その間に韓語を研究せられた。同二十六年の頃から白鳥博士の韓語

研究の結果が諸種の雑誌に表はれ、今日に至るまでこの方面のオーソリチーである。予は三十一年より三十四年まで、文部省留學生として専ら韓語の研究に従事し、三十三年より三十九年までは幣原博士が朝鮮政府の顧問として滞在せられ、傍歴史の研究をもせられた。三十六年の夏より冬にかけて、法學博士宮崎道三郎先生が韓語研究の爲に帝國大學より派遣せられた。又一方に於いては、明治三十年に東京外國語學校に韓語學科が設けられ、又予が三十四年に歸朝してから、帝國大學に日韓比較文法の講義を始め、その外、國學院大學でも同様の講義をした。又國學院大學では三十七年から韓語科を設け、東洋協會學校にも四十年より新に韓語學科を設けた、又此東洋協會で別に學術調査部を設けて、廣く清・韓滿の學術的調査を始めることになつた。此の如く韓語の研究が盛になり、世人の注意を引くやうになつたのは、喜ぶべきことである。けれども、歐洲人が極東の言語に對してさへあれほどの仕事をして居るのに比べれば、當に遜色があるのみならず、古

代より今日に至るまで離るべからざる關係のある國語としては、今までの研究の如きはまだ、不十分といはねばならぬ。徳川氏は朝鮮との外交を對馬藩に一任し、宗家が通譯官を養成して外交の衝に當つて居た。その時代と今とを比べて見るに、政治や通商の形勢こそ一變してゐるが、語學の有様はなほその時代と相去ること甚だ遠くないやうに思ふ。

今日まで日本國民が語學の練習に注意を拂はなかつた爲、外交上又は通商上に幾何の損失をしたであらうか。韓國の如き國柄では、非常に秘密を尙び、黨派がいくつも分かれて居るから、通辯を経ては到底先方の眞意を知ることが出来ない。佛蘭西の宣教師ベルヌー(Berneux)が大院君に謁して種種の建言をしたとき、大院君は此の人を新知識として歓迎したのであつたが、ベルヌーの語の中に敬語の誤用があつた爲、大院君の赫怒を買ひ、遂にキリスト教徒數萬人の虐殺となり、延いては佛韓の戰を啓くまでに至つたのである。これ等は語學の重んずべき極端な例であらう。

言語が通じなければ、その國情を研究するに非常な不便がある。それ故に韓國に滞在して居る外國の官人で、多少語學の研究をしないものはなかつた。佛蘭西の公使は韓國の書物を多く集めて本國へ送つた。佛蘭西公使館の書記官クーラン(Courant)は大部な韓書目録を編纂した。英國の領事アストン(Aston)は韓語と日本語との比較研究をし、領事スコット(Scott)も語學の研究をして著述に富んでゐる。それに反して、我が國はこの方面に於いて遺憾のことが多い。從來我が國から韓國へ行つた人は随分多かつたけれども、我々は是等の人々より殆んど何等の知識も何等の材料をも得なかつた。秀吉征韓の時にこそ、多少の書物も齎らして歸つたが、近頃では外國人の方が、韓書の蒐集に於ても遙に優れてゐる。

過去のこととは扱措き、今や韓國はわが領土となり、萬端の設備盡く邦人の手によつてならうとして居る。これら多數の邦人が何時までも通辯の手を経て韓人と接して居るようでは、到底事務の擧がることは望まれない。

予は通譯制度を全然廢すべきものと考へる。それには高等の教育あるものに、韓語を學修せしめる必要がある。韓語の出來ると同時に他の高等なる教育の素養がなくてはならぬ、曾て外務省の留學生中に、韓語は十分に分るが普通學の素養がない爲、それを彼地で修めたといふ奇談もあつた。

この事については、英國などの制度は餘程参考になると思ふ。英國の外交官で東洋に來る人は、普通の外交官試験以外に、其の國々の言語に關する第一次の試験を受け、その及第者が語學留學生として渡來し、三年間以上の研究をして更に最後の試験を受け、こゝに始めて其の國の外交官になるのだといふ事である。それ故、是等の外交官はその滞在する國の言語事情に精通して居る筈で、ジャイルス(Jiles)やヒルト(Hilt)などの東洋學者も、多くは外交官出身である。故に將來は、通譯のため韓語を教授する外に、韓國の行政、司法、教育などの局に當る者を養成するため、大學を始めとして各種の高等學校で、専門の學術を修めるものに韓語を修めしめるのが最も必要であ

ると考へる、これがため總督府から貸費生を各種の學校に設けるなども、一の案であらう。その他、少くとも帝國圖書館や帝國大學の圖書館内には、韓國に關する圖書を集めて、特別に研究者の便利を計り、これを獎勵する設備をして貰ひたい。

以上は専ら實用上よりの觀察を述べたのであるが、眼を學術的研究の方面に轉ずれば、更に一層憐むべきものがある。學術上より韓語を研究するのは予の専門であつて、終生斯の道のために努力する考であるけれども、今日ではまだ日韓兩國語の間に密接な關係があつて、同じ系統に屬する證據の歴然たることを知つて居る人は極めて少い。従つて、韓語が日本の國語研究上に必要であるといふことも、また比較研究の結果が韓國内に國語を普及せしめる上に最も有力なる基礎であることも、まだ多く世人の注意に上らない。予は自分の微力なることを嘆じつゝ、も飽くまで斯學のために奮闘して止まない覺悟である。

韓語の學術的研究

沖繩方言研究の必要

曾て或る人から、沖繩縣に行はれてゐる言語は支那語だらうかといふ質問を受けたことがある。又韓語と支那語とは同じかと問ふた人もあつた。韓國と支那とは、地理上及び歴史上の關係から、この様に考へるのも無理はないが、沖繩縣の言語を支那語と混同するとは、實にその無識に驚かざるを得ない。而もこれは一二の人のみではないので、我が國人は殆ど沖繩方言に就て知識を持つて居ないといつても差支がない。

沖繩の言語は其實我が國の方言であるが、差異の點が稍多いので、一見別の言語の様に思はれる。けれども、本來は同じ根本から出たもので、韓語と國語との關係もこれと大同小異である。今日の沖繩教育は勿論國語のみで行はれてゐるけれども、實際は二種の言語が對立してゐるのみならず、國語と沖繩方言とは絶えず衝突して折角の教育も多少の礙害を受けて居る。

沖繩語に關する邦人の無識

國語と沖繩方言との衝突

これは畢竟、彼我の言語の根柢に於て同一であることを忘れたると、且は我が國人一般が言語に關する常識に乏しいのことに起因するので、明治五年、琉球國を廢して我が國の一藩と改めた時にも、言語の同一であるといふことが、重要な一條件であつたことを記憶せねばならぬ。沖繩方言の現状と邦人の言語研究に對して冷淡なことゝを合せて考へれば、將來に於ける朝鮮の國語問題も、同様の傾向に陥りはすまいかと案ぜられる。

琉球語の文法及び辭彙
聖書の翻譯

沖繩方言に對する我が國人の研究も絶無ではないが、價值のある著述としては甚少ない。却つて、外國人の中にはチェンバレン(B. H. Chamberlain)の如く夙にその研究に着目した人があつて、その名著『琉球語の文法及び辭彙』(Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan language)は沖繩方言研究者の指針となつてゐる。その他、米國の宣教師は現に沖繩方言を研究して聖書の翻譯中であるが、明治の初年にも、和蘭の宣教師が十年餘かの地に留つて、聖書の翻譯を完成した。しかるに外教排斥のため、當時の譯書は散佚して

僅にその一部が倫敦の大英博物館に保存せられてゐるのみである。沖繩にも『混效驗集』といふ古語を集めたもの、『オモロ』といふ古歌を集めたものなど、學術上調査の材料として見るべきものはある。

沖繩方言は頗る古體を存して居て、我が國語にない語又は文法上の形式で、彼に残つてゐるものが少くない。

母音組織

波行音

音韻の組織上からいへば、母音は a i u の三あるのみで、單母音としては e も o もない、韓語には o があつて e がない、これらを國語と比較すれば、母音發達の順序が略分るのである。國語の波行音は多く h で、地方によつて f 又はこれに近い音のところもある。沖繩では p 又は f が多く、その他 h 及び p と f との中途のものらしく思はれる ps といふ音があつて、宮古八重山方言では、ヒト(人)を *psiti* といふ。これらも波行音の變遷を知るによい材料であつて、波行古音の問題が盛に討議せられたときにも、アイヌ語などが比較せられて、この方面が参考せられなかつたのは甚遺憾なことである。

動詞活用の
古き形式

形容詞の終
止形

國語の動詞活用は九種に別れてゐるが、沖繩方言ではたゞ一種のみである。此點に於ても國語よりは形式が稍古い。形容詞は動詞と活用は別であるけれども、國語の形容詞活用とも違ふ。國語の形容詞の研究上最も困難なる終止形のシも、沖繩方言と比較すればいさゝか量會せらるゝ様に思ふ。沖繩方言の形容詞終止形は、語尾サに動詞アリを結びつけたものである。例へば遠しを *tosan* といふ、これは *tusan* の約で、直譯すれば「遠さあり」といふことになる。これは國語の形容詞終止形を研究するによい材料で、要するに動詞から別れて、別の品詞となる途中のものと思はれる。

係結法

係結法に就ても、沖繩の方言にはゾの係とヤの係とがあり、韓語にはヤの係のみで、ゾもコソもない。故に係結法は先づ最初にヤ次にゾが生じ、最後にコソが発達したものであらうと思はれる。

ニシ

又單語の比較にも、非常に趣味ある事實が尠くない。國語ニシは「西方」を表はす語であるが、沖繩方言では「北方」を示してゐる。これによつてニシと

シマ

いふ語は民族移動の方向を示したものであることが知れる『東西南北』を

参照すべし。國語シマを古く住所又は里の意義に用ひたが、沖繩では今も

これを郷の義に用ひ、島は別にハナリと稱へてゐる『敷島考』を参照すべし。

グスク

沖繩方言で城をグスクといふ。これは國語のシキと同語である『日韓上古の地名に就いて』を参照すべし。又城邑をモイともいふ、これは國語モリ(森)

モイ

韓語 *moi* (山)と同語で、首里を始め多くの城邑は皆山の上にある、上代都邑の有様もこれによつて察することが出来る。又、沖繩では如何なるモイ(森林・山岳)にも必ず神を祭つてゐる、國語ヒモロギ(神籬)・ミムロ(御室)など森林山岳に神を齋いだことゝ比較すると面白い。

イラスとイ
ラフ

國語イラス(貸)に對してイラフといふ語があるが、其意義が明白でない。

然るに沖繩方言には *irashung* (貸) *irayung* (借) の兩語が現存してゐる。また國語

ではカル(借)に對してカス(貸)といふ語を用ふるが、沖繩方言ではカスとはい

はず、これをカラスといつてゐる。即ち、借は *kariyung* 貸は *karashung* である。

カルとカス

沖繩方言はかくの如く我國語の研究に必要な資料であるが、その古語は次第に消え失せつゝある。今に於てその蒐集に着手し、悔を後世に遺さないやうにすることは明治の國語學者の責任であらうと思ふ。

アイヌ語研究の必要

アイヌは曾て我本土に住つて居つたことのある強大なる種族であつたが、次第に衰微して、今や漸く北海の一隅に餘喘を保ち、早晚絶滅せんばかりの有様となつてゐる。従つて、アイヌ語通用の範圍も極めて狭く、北海道千島樺太の一部に限られて居るから、この語の研究は實用上大した價值のあるものではないが、學術上から見れば、又少なからず興味の問題となるのである。

アイヌ語も我が國では學術的研究者が極少いが、西洋人の中にはチエンバレン (B. H. Chamberlain) バチエラー (J. Batchelor) などが早くからこれに着手してゐる。勿論、徳川時代に通事が多少の語を集めたものはあるけれども、これらは皆な材料の蒐集者で研究者ではない。従つて、その學術的調査は極めて不完全で、未だどの語族に屬してゐるかといふことも明でない。

アイヌ語と
國語との關
係

予の考では、アイヌ語も亦韓語と同様我が國語の系統に屬するものであらうと思ふが、もとより十分の根據がある譯ではない。今アイヌ語と國語との類似してゐる二三の點を擧げて較べて見よう。

語頭の濁音

t n r 三音
相通

音韻に就ては、日韓兩國語と同様に、アイヌ語も語頭に濁音の來る事が無い。又 t n r の三音は、國語でツナ(綱)ツタ(鳶)ツル(蔓)の通じる如く、又國語ミヅ(水)が韓語mir(水)となる様に、アイヌ語でもこの三音は相通する。

ashiri-no (新に)..... ashin-no

retara-chiri(白鳥)..... retat-chiri

複數の語尾

複數を表はす語に *uara* といふのがある。その *u* は複數を示す接頭語で、*tara* は國語のツレ(連)・タチ(達)韓語の *teur* (複數語尾)と甚だ似てゐる。

有りといふ
動詞

アリ(有)といふ動詞はアイヌ語で *ari* といひ、ナリの意のときは變じて *ari* となる。沖繩の方言ではアリを *ari* といひ、否定の助動詞と結び就いたときは *ar-an* といふ。韓語でもこれを *ir* といふ。今この四者を比較して見る

動詞語根と
有りとの結
合

使役相の構
造

に、その類似の點は確に注目價値がある。殊に日韓兩國語に於て、アリが他の動詞語根に結びついて、その自他を別ち受身を作る現象は、等しくアイヌ語にも見出すことが出来る。

oka(有り)..... oke-re(成す)

kara(造る)..... kara-an(造らる)

殊にアイヌ語にはアリの結合によつて使役相をも造ることがある。

kore(與ふ)..... kore-re(與へしむ)

arapa(行く)..... arapa-re(行かしむ)

ne(なり)..... ne-re(ならしむ)

この構造は韓語にもある。

mök(食ふ)..... mök-ir(食はしむ)

若しもアイヌ語が國語と同系であるならば、右の比較によつて、動詞の相に關する研究に一の新しい問題が提供せらるゝことになるであらう。

アイヌ語研究の必要

右に挙げたアイヌ語 *nece* はナラシム即ち「成す」の意で、國語ナル(成)ナス(爲)と外形が甚だ類似して居る。アストンの説によれば、國語には奈行四段に活いた「有り」の意の古語があつて、體言に添へて副詞をつくる助辭ニはその連用形であるといつてゐるが、このアイヌ語と對照して見れば面白からうと思ふ。

加行に活用
を轉ずる例

國語の動詞中にはセム(攻)がセメグ(鬪)となり、ハル(晴)がヒラク(開)となる様に、加行に再活することがある。勿論この場合には、幾分か意義の變はるゝのが普通である。體言を動詞に活かせる場合にも、これに類推して加行のことが多し。

- ツナ(綱)……………ツナグ(繫)
- アサ(淺)……………アザク(嘲)
- イン(急)……………イング(急)

アイヌ語にもこれと同じ形がある。

イ列の名詞
法

- rai(死ぬ)……………rai-ge(殺す)
- san(下る)……………san-ge(下す)
- isan(無し)……………isan-ka(亡ぼす)
- tat(閉づ)……………tat-i(障子)
- kor(歩む)……………kor-i(道)

アイヌ語にもこれと同じ現象があつて、如何なる動詞も語尾に *i* をつける
と名詞になる。

- se-i(住む)……………se-i(住家)
- itak(話す)……………itak-i(言語)

また體言に添へて副詞をつくるニといふ助辭に相當するアイヌ語に *no*
といふのがある。

- ashiri(新し)……………ashin-no(新しく)

アイヌ語研究の必要

體言に添ひ
て副詞を造
る助辭

疑問の助辭
命令の助辭

疑問の意を示すヤといふ助辭は、韓語にもアイヌ語にもある。又我方言中にある、命令の助辭ロに該當するものもアイヌ語にある。

an(有り)…………… an-ro(有れ)

代名詞と受身
接頭語

勿論、以上述べた數個條の類似のみで、國語とアイヌ語との關係を斷定するのは早計であらう。殊にアイヌ語には、全く國語と反對の現象もある。たとへば代名詞と受身とを非常に多く用ひること、また特種の接頭語のあることなどである。

sapa(頭)…………… e-sapa(頭立つ)

ran(魂)…………… e-ran(考ふ)

これ等は今日の國語には無い事であるが、もとゞ雙方に存した現象で、後我にのみ亡び、獨り彼に存してゐるものであるかも知れぬ。要するに、アイヌ語の系統は今日に於てはまだ不明であるが、予の考では、何れかといへば我が國語に近いものであらうと思ふ。

眼の古語ナ

アイヌ語の地位は右の如く不明であるが、その性質を明にし、その系統を發見することは、言語學上大切な事業であるのみならず、國語の研究上に及ぼす影響も甚大なるものがある。

韓語と比較するに、國語には眼の義を表はすナといふ古語があつたらしく考へられるが、アイヌ語を調べるとこの事が更に確實になると思ふ。アイヌ語で眼を *shik* といふ、これは「圓い」といふ語から轉じたもので、その他に *nu-pe* (涙) *nu-kara* (見る) といふ語がある。 *nu-pe* の *pe* は水と *nu-kara* の *kara* はスルといふ義であるから、その *ni* はいづれも「眼」の義であるらしい。國語ナ、韓語 *nu*、アイヌ語 *ni* の對照は決して偶然ではあるまい。

アイヌは常に我民族と接觸してゐた爲め、我が國語でアイヌ語のうちに混つてゐるものが多い。それ等を見るに國語の波行音は悉く P 音となり、又濁音の前には必ず鼻音が添うてゐる。

kon-ganc(黄金) *pancho*(番匠)

アイヌ語研究の必要

アイヌ語中の國語

kosou-de(小袖)

pera(匙)

このことは、十八世紀末に渡來した外國宣教師が、當時の國語を寫したものと符合してゐる。その他

irusai(貸)

pashui(箸)

marai(客)

soshi(草紙)

pirakka(下駄)

menoko(女子)

shitoki(餅)

ratchako(蠟燭)

takasara(盃)

tuki(坏)

など甚だ多く、これ等によつて國語の研究に資することも尠くない。

アイヌ語は、外部の刺戟を受けたことが尠ないから、頗る原始的の狀態に保存せられてゐる。故に言語の發達を研究する學者には、貴重な材料であつて、研究の結果、アイヌ古代の文化より更に一般原民の思想をもうかゞふことが出来る。支那の説文の研究も、古文を明にし、三代の文化・思想を闡明

アイヌ語と
古代文化

アイヌの名
稱

日本人

することが出来るが、これは畢生の大事業で、アイヌ語の甚だ容易なると同日の論でない。外國の學者が半開民族の言語を調査する爲、百難を冒して蠻地に往來することを思へば、我が國の學者は領土内にこの貴重な材料のあることを悦ばなければならぬ。

今アイヌ語の研究によつて、古代の文化或は思想の一端を知り得べき二三の例を示さうと思ふ。

彼等は自らを呼んで ainu といつてゐる。その ainu は「聞分ある」といふ義で、ainu といふ名稱は結句「知覺あるもの」として自らを尊んで付けた名と思はれる。恰度 shava といふ語は「光榮」といふ義で、スラブ人の美稱であるのと似てゐる。

彼等は又日本人を呼んで shamo といつてゐる。これは shamai-un-guru といふ語の省略で、その shamai は「傍」といふこと、即ち「傍に居る人間」といふことであるから、我が民族とアイヌ種族とが、終止接近して居つたことが分かる。

露西亞人
義經と辨慶

露西亞人を *rep-un-guru* といふのは「海を越えて来る人間」といふことである。彼等の傳説中にある *oki-guru-mi* 及び *shamai-guru* を義經及び辨慶のことだと言ひ傳へてゐるが、もとより採るに足らぬ説である。 *shamai-guru* は前にもいつた通り、傍の人即ち侍臣又は副將のこと、*oki-guru-mi* の *oki* は「根本 *guru-mi* は「日本男子即ち日本の大將」といふ義で、嘗て彼等を征服した日本の大將が傳説中に残つてゐるのであらうと思はれる。

上下
アイヌ語で上下をあらはすに、*pen pan* の二語を用ひ、川上を *penata* 川下を *panata* といふ。又方角を示すに、東を *pen-nok* 西を *pan-nok* といひ、上下でその區別を立てるのは、彼等が本州より漸時東方に移動した方向を示したものであらう。彼等は肺臓を *pen-ran* といふ、*ran* は「魂」といふことで、肺臓は即ち「上の魂」といふことになる。その *ran* の語原は「低所」といふことで、彼等は魂を腹の中にと信じ、これに對して肺臓を上を魂と考へたものであらう。

地獄

右の *ra* の外に、今一つの *ra* (下) といふ語がある。死屍はこれを土中に埋めるから、*ra* に「處」の意をあらはす接尾語 *i* を加へて *rai* とすれば、來世又は死といふ義になる。地獄には別に *teine-noshiri* (濕地) といふ語がある。熱帯地方の印度人に焦熱地獄のある如く、彼等は寒地に住んでゐるから、濕氣を恐れたものであらう。

左右

左右を示す語は各國語とも多くは両手に因んだ名前であるが、アイヌ語では右手を *shi-mon-tek* 左手を *haraki-tek* といふ。 *shi* は「真に」、*mon* は「働く」、*tek* は「手」、*haraki* は「繩」といふ義で、繩を縛ふとき左の手に藁をもち右手でこれを縛ふからの名である。

指

數詞の意義

アイヌ語で指を *ashik-pet* といふ。 *ashik* は「五つ」、*pet* は「枝」といふことで、即ち指は「五つに別れたるもの」の義である。 *ashik* (五) の *shik* は「完了」又は「圓滿」の義で、指を一つづつ折り數へて片手に満ちたことをいひ、*van* (十) は *ru* (二) *an* (有) の約で、兩手を數へ盡したことを表はしてゐる。

雨 酒 處女

火を *abe* としひ又轉じて *ap* ともしふ。a は「燃ゆる」、be は「物」といふ義である。彼等は雨を *apto* としふ、to は乳の義で、雨は即ち「天の乳」である。また酒を *tono-to* としふ。tono は國語トノ(殿)で、松前の殿様の乳といふことである。アイヌの生活は飾り氣が少い、従つて言語にも露骨なことが多い。處女を *opere* としふ、その。は「陰部」で、*pere* は「裂けたるもの」といふことである。又大便を *osoma* としふは後方(器)に入る(*oma*)といふことである。又便所を *ashin-ru* といふのは「新しき道」といふことで、彼等が隨所に穴を穿ちて用を便じ、滿ちれば更に新道を開いて、新に穴を掘るよりの名である。

以上は僅にその數例であるが、アイヌ語の研究を必要とする主張の大要はこれを盡した積である。

我國語學界には先人の未だ着手して居らぬ方面が甚だ多く、到るところ學術上の富源に滿ちてゐる。然るにこれ等の開拓を試みたものは多く外人で、未だ我が國の人々はこれを捨て、顧みないのである。我領土内の言

語の研究を外人の手にのみ委ねて置くのは如何にも不本意なことで、切に我が國の學者の覺醒をうながさざるを得ないのである。

漢字を整理する必要

國字の問題も随分久しいものであるが、今に解決を見ることが出来ない。これは論者が餘り理想に走り過ぎて、一足飛に改良の目的を達しようとするからであらう。理想をいへば漢字全廢は結構である、ローマ字採用が出来れば猶満足である。けれども漢字全廢といふ事は目下の事情では急に斷行が出来相にもなく、殊にローマ字採用の能否はまだ十分にわかつて居らぬ。眞面目に國字を改良しようとするには、今少し階段を踏んで進まねばなるまいと思ふ。

假名でも漢字でも、現時の状態は決して完全なものでないといふことは、世人の夙に認めて居る處であるが、假名はしばらく措いて、我が國に用ひられてゐる漢字には幾多の弱點がある。漢字を全廢するならば兎も角も、これを使用してゐる間は、先づ順序としてこれを整理する必要があらうと思

漢字の整理

ふ。漢字節減といふ事も計畫せられてゐるが、これは單に漢字の困難に出くはす度數を少なくせうといふので、進んでその弱點を刈除せうといふのではない。

字音假名遣の許容

央押應王翁みな發音はオーといひ交光工劫みな口ではコーといふけれども、それを假名で書くときには一々遣ひ分けねばならぬ。これは漢字の大きな弱點である。この弱點に就いては字音假名遣の許容といふ事が計畫せられたが、これと恰度併行して論じることの出来る漢字の弱點は多數にある。今その中一つ二つに就いて述べて見たいと思ふ。それは(一)漢字の字形について、(二)字形と字音との關係について、(三)字音に種類のあることの三箇條である。

(一)漢字の字形に就いて。漢字は一點一畫もみなそれ／＼理由があつて、決して無意味のものはない。それ故、土と士との如く、入と人との如く、一點一畫の相違によつて、意味が全く變るのである。例へば

漢字を整理する必要

市いち

北ホク
きた

束とシ

効ケフ
力を合はす

幸カウ
さいはひ

刊セン
ゑる

市フツ
ふいご

址タウ
高田

束ツク
つかね

効サク

幸ダツ
こひつじ

刊カン
書を板行す

字畫の誤

この様に字形を研究する事は、説文學者でない一般の人々には容易に出
來ない事で、従つて屢々誤つた字を用ひ、遂には平氣で此誤りを通してゐる。
右に挙げた類形の混同はもとよりのこと、其他畫の誤謬も極めて多い。

丑(丑)

今(今)

仰(仰)

僉(僉)
(僉)

片(片)

分(分)

佞(佞)

凡(凡)

漢字を整理する必要

全(全)

兩(兩)
(兩)

免(免)
(兔)

朝(朝)

冒(冒)
(冒)

別(別)

陽(陽)

化(化)

切(切)

言(言)

兼(兼)
(兼)

即(即)
(即)

博(博)

内(内)

僉(僉)

陷(陷)

前(前)

函(函)

易(易)
(場)

場(場)

初(初)

勇(勇)

音(音)

卷(卷)
(卷)

卿(卿)
(卿)

參(參)
(參)

厚……………(厚)

原……………(原)

支那朝鮮の誤畫の字

この様な誤謬は、單に日本人の間に行はれてゐるのみでなく、支那でも既に唐の『千祿字書』には多くの誤畫の字が集められ、又朝鮮でも『學書要覽』といふ同様の書があつて、かの地に行はれてゐる誤畫の字を集めてゐる。日本では説文學者などの外、字體を正確に書くことの出来る人は如何程もあるまいと思ふ。殊に文字の標準と見られてゐる活字に誤謬の字の多いことは實に驚くばかりで、比較的正確だといはれてゐる築地活版所のものですら、誤りは決して少くない。この様に漢字には畫の誤られ易い弱點がある。

(二) 字形と字音との關係について。構成の上から見れば、漢字の大部分は形聲の文字である。形聲といふのは、文字の一部が意義を表はし、他の部分が發音を示す風に出來てゐるものである。例へば松、詔はその偏の木言が意義を表はし、旁の公がシヨウといふ發音を示してゐる。然るに公は其單

獨の時にはコウといふ音であるのに、かく木言と合してその音を示すときにはシヨウといふ音となる。このコウといふ音とシヨウといふ音との間には、學問上からいへば關係があるかも知らぬが、一般の人にはそれが分らぬから、公といふ部分の含まれてゐる文字はみなコウと讀んでいゝことの様には思はれる。まさか松や詔などをコウと讀む人はあるまいけれども、これと同様の理由で、嵩スウをカウといひ、嶼シヨをヨと讀む人は多く、又屎尿シネウをベイスキと讀む者さへある。かういふ誤讀の例は澤山で

- 剖ホウ……………(バイ) 啣キ……………(イ)
- 喙カイ……………(タク) 嗅キウ……………(シウ)
- 塑ソ……………(サク) 庠シヤウ……………(ヤウ)
- 恚イ……………(ケイ) 恬テン……………(クワツ)
- 懶ラン……………(ライ) 捐エン……………(ケン)
- 揖イフ……………(シフ) 斂レン……………(ケン)

漢字を整理する必要

暢	チャウ	……………	(ヤウ)	暈	ウン	……………	(グン)
榘	エイ	……………	(セイ)	核	カク	……………	(ガイ)
椽	テン	……………	(エン)	獺	ダツ	……………	(ライ)
擗	ダウ	……………	(ネイ)	癡	チ	……………	(ギ)
礙	ガイ	……………	(ギ)	祇	キ	……………	(シ)

これらの誤謬は實に無理のないことで、漢字の第二の弱點である。

漢吳音の遺
ひ分け

(三) 字音に種類のあること。我が國の字音には漢音・吳音・唐音など種々の別があつて、各の場合にそれ／＼遣ひ分けねばならぬ。

強	キヤウ	勉	名	イ	響	木	ゴ	石
カウ	情	カウ	名	イ	響	モ	曜	曜
幕	バク	天	物	ブツ	穀	會	クワイ	社
マク	天	マク	物	ブツ	穀	エ	釋	釋

唐音は餘り多く用ひられぬが、吳音と漢音とはどちらを用ひてよいか分らぬ場合が甚だ多くある。東京をトウケイ、文部省をモンブセイと讀む人がある。景色の色などはどちらにでも讀める。これもたしかに漢字の弱

畫の變化は
自然の大勢

點である。

言語でいへば聲音の變化する様に、文字でいへば畫の變化することは自然の勢である。殊に文字はその發明せられた國では神聖視せられて、古い形も比較的よく保存せられるが、これが他國に移ると一種の道具と見做れて、なるべく便利な様に變形せられる。それ故、支那で漢字の畫のことを嚴重に言ふのは或は尤かもしれぬが、それですら既に唐の頃から誤畫の文字が行はれてゐた例もある位だから、日本ではそれ程まで嚴重にいふ必要はあるまいと思ふ。

字音もまた同様で、假令少々違つた處で、一般がさう讀んで居れば、それに従つて少しも不便がないのみならず、世間で誤つて讀んで居るものを一々訂正したとて、却て實際に通用しないこともある。醫者の社會では齶齒をウシと讀み、頤顚骨をジヨクジユコツといひ、セフジユコツといつても通じなす。

漢字を整理する必要

又吳音漢音などの並び行はれてゐるのも、實際大いに不便を感じることで、これは歴史的の根據を持つてゐるから、どちらも全廢してしまふことは出來ないが、或る特別なものを除く外は、悉く漢音で讀むとか、吳音で讀むとか、どちらかに一定が出來れば大いに便利であらうと思ふ。

教育上の損失

教育上漢字を採用してゐる上は、その畫の誤、音の誤を等閑に附して置く事は出來ないが、此の様に誤られ易く、又誤謬が普通であるのを、嚴重に訂正する教授上の努力は實に莫大なもので、兒童の受ける損失は決して少なくはゐるまい。又誤畫といふも、一方より見れば、寧ろ一種の字形の進歩である。これは、一時字音假名遣が許容せられたのと同様に、それらの誤謬を許容すべきものと思ふ。

字畫の誤を許容する結果、文字の系統が不明になるといふ人もあらうけれども、これは一派の人たちが假名遣許容の際に語原が不明になるといつたのと同じの論で、畢竟學術と一般とを混同した議論である。

誤字・誤讀の許容

假名遣の許容が容易に行はれなかつた様に、誤畫誤音の許容も一般には行はれまいといふ心配もあらうが、歴史的假名遣は長い間習慣となつて居たから、急に捨てられなかつたので、誤畫誤音は寧ろ普通に行はれて居るのである。

勿論、誤畫誤字を悉く許容せよとはいはぬ。國語調査會なり、漢文調査會なり、適當な機關で十分調査した上、許容すべきものとすべからざるものとを定めればよい。

漢字全廢説の起つた時にも、假名遣の許容案が出た時にも、ローマ字採用説の起つた時にも、毎度國學者や漢學者は現状の維持に努めたけれども、これらの人達は國字の現状を以つて少しも缺點のないものと認めて居るのであらうか。缺點がないといへばそれまでだが、若し不便を感じつゝ、猶現状の維持をはかる考でありとすれば、問題に對して眞面目でないといはなければならぬ。いつも問題が起る度ごとに、反對の會を組織したり、印刷物

を配布したりなどして熱狂しても、それが少し下火になると、すぐ忘れてしまふ。これらは眞に國字に忠實なる行動とはいはれまい。今少し國字の實際を考へた上、何等かの方法を以つて是非整理せねばならぬと思ふのである。

朝鮮の漢語に就て

朝鮮の日用
文

漢字假字混ぜりが我國の普通文である如く、漢字と諺文とを混用したものが朝鮮の日用文である。それ故、一通り諺文で助辭を習つて置けば、此種の朝鮮文を読むのは餘り困難でない。便利なことである。

然し「工夫」の二字が國語ではクフウとコウフと兩様に用ひられ、支那では時間の義、朝鮮では勉強の意となる様に、同じ成語も彼我に於て解釋の相違することもある。定^{サダ}の音に沙汰の二字を宛てた類の國語は、もとより彼に通じよう譯もない。沙汰は朝鮮で山崩のことである。此他才覺^{サイカク}ざえのおぼえ、同斷^{ドウダン}（同じことわり）、出張^{シユツチャウ}（でばる）、談合^{タンカフ}（語りあふ）の類及び岩乘^{ガンジヨウ}（堅固なること）、失墜^{シツツヱ}（費用）、公道^{コウダウ}（質素）など皆さうである。合羽^{カフ}（スペイン語 cape）、莫大小^{モクダイシ}（スペイン語 medias）などの外來語は猶更のこと。

同じ成語でも、種々の理由で國語と朝鮮語と全く不通のこともあり、又同

朝鮮の漢語に就て

朝鮮特有の成語

一の意義でも使用の範囲の違ふことが多い。國語で「安置」といふは大抵神佛のことにいふが、朝鮮では流罪に處して禁錮することである。内相は普通内務大臣の略稱であるが、朝鮮では妻君のこと。それ故、内患は妻君の病氣である。其他「動物」を男子の義とするは、女子が内房に蟄居するに對した名稱で、金巾を「唐木」といふは唐木綿の下略、小銀貨を「刻錢」といふは支那の角と同様英語 quarter の音譯である。

かやうな例はまだいくらかあるが、参考のため少し舉げて見よう。

- 假家 (店舗)
- 發表 (痘瘡の發疹すること)
- 舉動 (朝鮮王の行啓)
- 病身 (不具者)
- 文章 (學者)
- 埋沒 (無情)

- 見様 (雛形)
- 三寸 (叔父)
- 人事 (挨拶)
- 行列 (親等)
- 握手 (屍體の手を絹にて蔽ふこと)
- 招魂 (高聲に死者の名を呼びて四隣に告ぐること)
- 狼狽 (失敗)
- 生涯 (生營、職業)
- 未練 (愚鈍)
- 不祥 (不憫)
- 是非 (爭論)
- 内外 (夫婦)
- 議論 (商議)

朝鮮の漢語に就て

徒食

(飯のみにて菜のなきこと)

圖書

(印判)

發明

(言譯)

先輩

(碩儒)

水道

(下水)

八湖

(癡愚)

山所

(墓地)

東山

(庭園)

白丁

(穢多)

念慮

(心配)

滋味

(興味)

氣運

(機嫌)

片紙

(手紙)

作亂	(惡戲)
募軍	(人足)
下陸	(上陸)
客主	(問屋)

此類の漢語の調査は、學術上興味のあることは勿論、實際上の問題としても亦一顧の價があらうと思ふ。

朝鮮に於ける國語問題

朝鮮に關する諸問題中で、その將來の用語を如何にすべきかといふ程重大なものはあるまい。所謂鮮民の同化もこの一事によつて決するといつても、敢て過言でなからうと思ふ。

世間には朝鮮に日本語を普及することの必要を論ずる人は随分多いが、まだ朝鮮語の處置について論じた人を見ない。しかし、日本語の普及が刻下の急務であるといふ位のこととは、常識のあるものは誰でも考へて居る。

事新しく騒ぎ立てるにも及ばない。我等が此際最慎重に考慮すべき問題は、一千萬の民衆が遂古以來用ひ來つた朝鮮語を、如何にして帝國語と融和せしむるかといふことである。國土の併合は最も自然なる方法に於て行はれた。言語も亦これと同様の順調の下に整理せられたい。若し不幸にして、少したりとも言語間に反目を惹す様のことがあつては、由々敷大事で

國語問題と
鮮民の同化

朝鮮語の將
來

あるのみならず、實に天下の物笑である。

或人々はいふ。尋常教育は盡く日本語を以てすべしと。左様なことが出来るか出来ないか、少しは考へても貰ひたい。今日の沖繩縣ですら、尋常一年は實際沖繩語でなければ教へられないのである。全體我國の人は言語を餘り軽く考へ過ぎる弊がある。ずつと前のことではあるが、日本の國語を英語に改めやうなど、いふ途轍もない考を起して、外國の學者に忠告せられたといふ、餘り面白くもない事實がある位だから、他の言語などに就ては存外平氣であるかも知れぬが、餘事は知らず、言語だけはさう無造作には參らぬ。或人々は學校の用語を日本語のみと限りさへすれば、二三十年の後には追々朝鮮語に代つて、半島全土國語の通用を見るべきかの様に考へて居るらしいが、これは甚しい誤解で、どんなにしたとて、自然の天則に支配せらるゝ言語の發達を左右することは出来ぬ。朝鮮語自身の内に絶滅すべき原因を作らざる限り、何處までも存續するのみか、下手をすると、反て

日本語の方が壓倒せられるかも知れぬ。

家庭語として
朝鮮語とし
ての朝鮮語
社交語とし
ての日本語

教育上の用
語

既に日韓兩語が併立する以上は、日本語の奨励に全力を盡すべきは勿論であるが、同時に朝鮮語に對して十分の注意を拂はねばならぬ。家庭語としての朝鮮語、社交語としての日本語、この兩者は何處までも睦しく相携へて進み、苟くも嫉妬反目、偏見等忌はしきことが其間に行はれてはならぬ。今日の沖繩縣では、其土語と帝國語との間に稍面白からざる誤解があつて、和歌黨と琉歌黨と相對抗するなど、機微の間に鋒鏘を露はして居る。朝鮮の將來には、少しでも此類の争を起させたくない。日本人は、朝鮮人を眞に了解しこれを撫育せんがためには、勉めて朝鮮語を學び、朝鮮人はまた自己の福利のために進んで日本語を修めるやうになり、國土民衆と共に國語の併合も圓滿に行はれねばならぬ。要するに、朝鮮語は我帝國の一方言として、帝國語の中に包含せられるべきものである。故に朝鮮に於ける教育語も、初等教育は朝鮮語本位とし、傍日本語の楷梯を課し、中等教育では日鮮語

を并用し、専門教育に至つて初めて日本語本位となるのが、自然の順序であらうと思ふのである。

朝鮮語の現
狀

日本語の現
狀

朝鮮には諺文といふアルファベット式の立派な標音文字がある。彼等はワキウエオを區別し、拗音を區別し、語尾の三内音をも區別するから、漢字音を初めとし、假名遣は凡て發音通りで、少しの面倒もない。其上口語、文語の區別も殆どないといつてよい位であるが、今後此新領土に於て大に發展せんとする帝國語の現狀はどうであるか。假名遣は忽ちに改正せられ、忽ちに復舊せられ、また許容せられ、漢字の數は忽ちに減ぜられ、また忽ちに増加せられ、漢學者が漢字萬能を叫べば、一方には羅馬字論者がその全廢を唱へて居る。こんな四分五裂の間に立つて、まだ一つの標準文法なく、標準字書のない我現代の國語は、果して何事をなし得るであらうか。我國民は最早國語に關して長夜の眠より覺めねばならぬ。黨派心を去り、偏見を捨て、一意將に膨脹せんとする帝國語の運命を助長することに勉めなければ、悔

いても及ばぬことが起るであらう。
要するに、朝鮮に於ける國語問題に就ての卑見は、互に他の言語を重んぜしめよ、帝國語を整理して、適者の地位に立たしめよといふ、二ヶ條に歸するのである。

探湯考

クカダチ

探湯とは我國の上世に行はれたる裁決の一法で、諍訟の決し難き場合に、神に盟ひ手を熱湯の中に投じて探らしめ、爛れると否とにより、是非曲直を定めたものである。書紀に盟神探湯此云區訶陀智とあり、古事記に玖訶瓮の名も見えて居るから、探湯をクカダチと訓讀したことは疑ない。

應神紀九年の條に、天皇勅之令請神祇探湯是以武内宿禰與甘美内宿禰共出子磯城川濱爲探湯と見え、古事記允恭天皇の卷に、於味白檮之言八十禍津日前居玖訶瓮而定賜天下之八十友緒氏姓とあるから、多く河濱で行はれたものと見える。また允恭紀に引諸人令赴曰得實則全僞者必害於是諸人各著木綿手繼而赴釜探湯とあれば、大抵當時の模様が分る。

探湯の語原

探湯の語原については、今日までまだ定説がない。古事記傳には、陀智は役などの陀智にて凡て其事に趣くを某に立つとも某立とも云ふこと昔も

今も多し」とばかりで、區訶には説き及ぼして居らぬ。然るに、探湯の二字の朝鮮訓は、湯が *kuik* で、探が *chat* であるから、甚だよく似て居る。朝鮮語 *kuik* は羹アツモノの意義もあるが、羹と湯とは又通じて用ひられる。國語クキ 豉は、倭名鈔の註に五味調和者也とあるばかりで、原義不明であるが、豉の朝鮮訓は矢張 *kuik* で、羹の清んだものを稱へて居る。又探の朝鮮訓 *chat* の古音は *mat* で、これも國語探ぬタツの語根らしく思はれる。それ故、クカダチは日韓兩語に通ずる古語で、湯を探るの義であらうと考へる。

古事記傳に「湯を探て誓ふこと」から書にも見えたりとあり、書記通證にも搜神記を引きて扶南王范尋嘗煮水令沸以金指環投湯中然後以手探湯其直者手不爛有罪者入湯即焦と見えて居るが、此類のこと西洋の昔にもあつて、所謂神斷 (*Gottesurteil*) の中の *Fenerprobe* がそれで、英語 *ordeal* (拷問) と獨逸語 *Urtel* (裁決) とが同じ語根から出て居るのを見ても、その一斑は推察せられる。神斷の方法に就ては、歐羅巴では熱湯又は熱油若しくは鎔鉛中に手を投じ

外國に於ける探湯の類

て、石・指環等を探り出さするもあり、印度では熱鐵を掌に載せて七歩を行かしめ、スカンデナビアにては同じく九歩せしむるなどもある。書紀の註に或ハヒヒ 塗納ウヒヒ 釜ヒヒ 煮沸ヒヒ 攘手探湯ヒヒ 或ハヒヒ 燒ヒヒ 斧ヒヒ 火色ヒヒ 置于掌ヒヒ といひ、後世の鐵火と稱へるものもこれと似て居る。

呪咀

神斷の根本は起誓で、これはまたやがて呪咀から起つて居る。拉丁語 *iurare* (法律) は *iurare* (起誓をなす) アウエスタ語 *yaos* (潔齋) と關係があり、英語 *answer* (答辯) も本來は鞠問に對する答辭で、これ亦 *swear* (誓) より起つた語である。印度のマヌの法典にも、次の條項が見えて居る。

“He whom the flame does not burn, whom the water does not cast up, or whom no harm soon befalls, is to be taken as truthful in his oath.”

起誓の方法は、自己の親しく愛する物具等に手を觸れて、若し虚偽あらばその器物亡はれ、自己滅びんと呪ふのである。印度の *Ishtariya* 族は騎馬・弓矢等に觸れて誓ひ、羅馬人・ゲルマン人も馬・船・武器に就き神を呼んで起誓して居

る。

西洋に於ける此等の研究から考へて見るに、我國の古代にも略同様の事實が推定せられるかと思ふ。伊邪那美命が黄泉比良坂で千引石を中に置き事戸コトを度たしたまふとき、我那勢命かく爲たまは、みましの國の人草一日に千頭を絞り殺さんとのりたまひ、又須佐之男命が天安河を中に置きて宇氣比ウケヒたまひ、我心明き故、我が生ゆりし子手弱女を得つ。此によりて言さば、自から我勝ちぬと白したまひしは起誓である。所謂事戸といひ宇氣比といひ、いづれも自己の直さを證明せんための手段であるから、探湯と同一性質の者といはねばならぬ。かの祓ハラヒもこれと同様に考へられはすまいか。祓には伊邪那岐命の橘小門之阿波岐原の禊祓ミソギハラヒのやうに、穢を除き去るものと、素盞鳴尊に科したる千座置戸チクラオキドノ之解除ハラヘのやうに、一種の贖罪の如きものと、兩様あるが、此中の後者は穢深くて棄物キラヒモノ足らねば、手足の爪までをも徴したものである。これは此等の祓具ハラヒツモノに罪過を負せるのであるから、一種の呪咀

事戸

宇氣比

祓

祓具

と見ることが出来る。書紀雄略十三年に、齒田根命が采女山邊小島子を奸せるときに、馬八匹、大刀八口を以て罪過を祓除きたる如く、祓具に馬、大刀、弓矢の類を多く用ひたことも注意すべきことである。本居翁は、馬は耳振立聞物故、神に祓を速に聞召せといふ意、大刀は罪穢を斷つ意ならんといはれて居るが、印度、希臘、羅馬、日耳曼等のいづれも、宣誓に馬、刀、劍、弓矢を用ひて、これを呪呪したのに較べて見ると、よく似たところがある。兎に角、事戸、宇氣比は曲直を分たんだめの起誓で、身に罪過のある場合には、其結果として呪呪が馬刀などの上に及ぶべきであるが、これが形式を一變して所謂祓具となつたものであらう。

書紀に、日本人と任那人と生める兒のことについて、諍訟の類なるとき、毛野臣が探湯を置いたことが見えて居るばかりで、其他にはまだこれに類似のことも見當らぬ。しかし、探湯の語原が朝鮮語で解ける位であるから、彼の古代に於ても必ず同一形式の裁判法があつたに相違ないと思ふ。段

段朝鮮の古代研究が進んで、此等の事蹟が明るくなれば、我古典に關する知識の開發にも少からぬ影響を及ぼすことであらう。

形容詞考補遺

形容詞活用のシ

形容詞志々幾活用のシが語根に屬するものでないことは確實である。それは次の如く同一語根より分れた動詞と形容詞とを比較しても分る。

動詞

形容詞

- koh-u(戀)……………koi-si(戀)
- wab-u(佗)……………wabi-si(佗)
- meds-u(愛)……………medsura-si(珍)
- negah-u(願)……………negaha-si(願)
- yau-u(病)……………yama-si(疚)
- aza-n-u(嘲)……………asa-na-si(興醒)
- neta-n-u(嫉)……………neta-na-si(嫉)

また、同語原の朝鮮語形容詞と對照しても知れる。

形容詞考補遺

國語

朝鮮語

kuha-si(美).....kop(美)

suko-si(少).....chok(少)

沖繩方言の形容詞も亦同断である。

國語

沖繩方言

woka-si(可笑).....vuka-san(可笑)

ozoma-si(凄).....uzuma-san(凄)

suzu-si(冷).....sida-san(冷)

atara-si(惜).....atara-san(惜)

斯の如く、朝鮮語にも沖繩方言にも、志々幾活用に相當する活用のないことを見れば、形容詞はもと志幾活用一種であつたらしい。それ故、まづ志幾活用を論じ、然る後志々幾活用に及ぶのが順序であらう。

形容詞の活用に於ても、國語、沖繩方言及び朝鮮語は順次に其發達の經路

朝鮮の形容詞

を示して居る。朝鮮語では、動詞と形容詞とは全く同一の活用で、其間に何等の區別もない。即ち次の表の通り、國語では形容詞活用のみにあるk形副詞法及びm形名詞法は、共に動詞の活用にも存在する。

語根	國語	朝鮮語	國語	朝鮮語
副詞形	mane(普)	man(多)	nor(宜)	nira(謂)
名詞形	mane-ku mane-mi	nan-khoi nan-heu-m	— —	nira-koi nira-m

然るに、沖繩方言ではk形副詞法は既に形容詞の專有となつて居るが、まだ國語形容詞の連體形キ、及び終止形シに相當するものは發達して居らぬ。

沖繩方言の形容詞

語根	終止形	連體形	副詞形
tā(遠)	tā-san	tā-saru	tā-ku
ābu(重)	ābu-san	ābu-saru	ābu-ku

右の表にある通り、副詞形は國語と同じクであるが、終止形と連體形とは

形容詞考補遺

形容詞の名詞形

全く異なる形である。即ち終止形は名詞形 *shu-n* に *si*(有)の結び付いたもので、この *si* が活用して連體形を造つて居る。國語の形容詞にも、遠サ・近サなどサ形の名詞法がある。これは右の沖繩の例に照して考へるに、必ず終止形シと關係があるに相違ない。沖繩方言には、形容詞のみでなく動詞にもこれと同じ名詞形がある。

終止形

名詞形

- tuyu-n*(取).....*tuyu-si*
- chu-n*(來).....*chu-si*
- nu-n*(見).....*nu-si*
- a-n*(有).....*a-si*

而して、*shu-n*(爲)といふ動詞だけにはこの名詞形がない。此等の點から考へると、この *si* 及び國語のサは動詞ス(爲)と連絡があるらしい。予が形容詞の終止形シを佐行變格ス(爲)の轉じたものとする考は、この沖繩方言の研究

助動詞マシとマジ

によつて、少しは確められる譯である。

形容詞考に於て述べた通り、助動詞マシとマジとは共に未來助動詞ムにス(爲)の加はつたものと思はれるが、マジの方は立派に形容詞活用をしながら、マシの方はマシ・マシカとより外に活かぬ。義門がムの延言マクをこのマシと結び付けて、マク・マシと活用すべきものと論じたことは、頗る達見といはねばならぬ。さうすれば、マシは志幾活用マジは志志幾活用となる譯であるが、語原の同じス(爲)より出たシとジとが、かく別様の活をして居ることとは、形容詞二種の活用を論ずるに有用なる材料となるものであらうと思ふ。

形容詞活用に就ては目下なほ研究中である。しかし、これは我國語學上最大切で且困難なる問題の一つであるから、其後考へ付いたことゝも書き連ねて、形容詞考の補遺として置くのである。

東洋語比較研究資料

我國の言語を中心として、これと同系に屬する東洋語を比較研究するところが、甚興味のある而も現今に於て最緊要の事業であるといふことは、恐らく本書を通讀せられたる人々の等しく認められるところであらうと思ふ。それで、此等の諸國語に關する藏書中、比較的珍しいもの數種を擧げて、一つには先輩苦心の蹟を明かにし、一つには未來の研究者の榮とせうと思ふ。

(一) 蝦夷方言藻汐草 二卷 文化元年版

版本には著者の名が見えぬ。しかし、東京帝國大學所藏の寫本によれば、通事植原熊次郎の蒐集したもので、語數約三千、天地人物支體世事等の目を分かち、最後に熟語として會話を集め、また次の様な和歌の譯をも添へてある。

つらしともいはで過行く身のほどは
おもひしらぬはなみだなりけり

熟語	こゝろの在野をりてごさる
	イコロタニシリモシロシテ
	先達て使出と眼胸腹る
	ヲアキテイカクバウチウイ
	紅て送れとの價は二俵をりてのさ
	ナツアニルヤシイメシヤ
	フニマツタラアウチナシコナ
	かといふ野と熟く怒る
	ホレケラヌマニタニコタニタ
	ヘロキアツワ
	其例の川ハスリの川程とのさ
	子コダクニツ子ワニクシヤ
	ウニウウハツクンアナ
	方積てごさるのさるを通りトヤ

巫医	ヘニルウケレ
蝦夷地上古の人	クシセニセマカニ
泳義性	チキクルミ
舟慶	ニヤマイケル
出雲	アエシユルイヒ子レフ
取本神	ニマム
医師	イワ子
賢者	アロシケル
死人	ライケル
使者	ウデワケル
貧乏者	ヘロンケルウカニ
主人	コロケル
幼	タイバカリトヤ
童子	テニ子
子供	ホニ子ヨホーホホ

コム／＼セツシテクヲマン、ネトバケヘ

ラムハイタ、アノヌベタバングニ

本書はアイヌ語に関する邦人著述中唯一の語彙である上、獨逸のフィッマ
イアー (Pfinzier) はこれを基礎としてアイヌ語の文典を編成し、露西亞のダ
ブロットウオルスキ (Dobrotvorskij) のアイヌ語辭書も亦これに據るところ
が多い。予は往年アイヌ語研究のため土人の部落に行つた時、彼等に就い
てこの藻汐草を校正したことがある。それは、明治二十九年の東京地學協
會報告第十八年第二號に載せてあるから、参照せられたい。

(二) 混効驗集 二卷 康熙五十年 寫本

これは琉球語の語彙で、卷首に内裏言葉と記してある。本書の編纂は尙貞
王の方言保存の趣意に出たもので、尙賢王のとき三代に仕へて古語に明か
な老女官があつた、その記憶に基き、神歌の詞、古老の言を集めて選んだもの
である。乾坤人倫時候等の項目の下に、凡五百ばかりの語を集めてある。

捕虜となり我國に留ること前後十年、その間に邦語に熟達して本書を編成したが、久しく稿本のまゝであつて、出版せられたのは肅宗の二年(西暦千六百七十六年)である。その凡例に「彼語則古今迥異使彼人讀之或有不知其爲何語者故就其中古今無別者略存之餘悉改正所改者十之八九」とあるから、餘程原本を訂正したものと見える。その後、英宗の二十三年(西暦千七百四十七年)に通信之行使李湛謹等が命を受けて我國に來り、更にこれを訂正し、また崔知樞も通詞に従うて大阪江戸の間を往來し、語格に合はぬものは盡く改めて、正祖の五年(西暦千七百八十一年)に改刊したのが即ちこの重刊捷解新語である。第十卷だけは書簡文で、其他は悉く主客の問答體に出來て居る。左に「入江戸見關白」中の一節を擧げて置く。

關白さまより。御執政。かたお。もつて。信使事故。なく。これまで。御つきなされ。まして。めてとうおほし。めされまする。近日間。御あいなされ。ませうにより。そのうち。路中の。つかれおも。ゆるり

と。くつろげられ。まするやうに。との。御ことで。御ざりまする。

(四) 倭語類解 朝鮮版 二卷

これは朝鮮人の著した日本語の字彙である。天文時候干支地理方位人倫等の項目を追うて、約三千五百の語が集めてある。漢字の下にその朝鮮の音訓と我國の字音とを二行に記し、下段に日本譯を諺文で書いてある。著者の名も刊行の年代も共に不詳であるが、本書の終に信行使所經の地名を擧げてある中に、日光山權現堂の名が見えてゐる。朝鮮の使者が日光の廟を拜したのは、寛永十三年と同二十年と明曆元年との三度しか無かつた様に思ふから、其一行中のものゝ作らしく思はれる。

本書は西曆千八百三十五年英人メダースト(Medhurst)が翻譯して(Comparative Vocabulary of Chinese, Korean and Japanese)出版した。最初禁を犯して朝鮮に入り込んだ佛蘭西宣教師のために朝鮮語の手引となつたのも、我國に於て朝鮮語學書の鼻祖といふべき雨森芳洲の交隣須知の臺本となつたのも、こ

倭語類解上

天文

天 하늘 천

○ 소라
又운아메

日 날 일

○ 히

月 달 월

○ 즈기

日 일 일
蝕 이뜨 蝕 이뜨

○ 님쇼구

月 달 월
蝕 이뜨 蝕 이뜨

○ 팔쇼구

日 일 일
暈 이뜨 暈 이뜨

○ 히노가사

月 달 월
暈 이뜨 暈 이뜨

○ 즈기노가사

星 별 성

○ 호시

老人星 로인성

○ 로우인셰이

三星 삼성

○ 산다이셰이

參星 삼성

○ 신셰이

七星 칠성

○ 시찌셰이

天文

倭語類解上



世より事かたき交ては富んぶ富んぶとせは仁
をより仁の徳とせは富んぶと申はより慈悲の如し
物中を去るゝの如しと申はより如しは富んぶ

세상일이아니어렵스온가為富不仁이요為仁不

富어仁慈함이음을먹으려하면艱難함을받음의

人申すの如し富貴を求めば必ず其の如し

此の如しは富んぶ者も同しと申はより富んぶ者も同し

の書物である。

(五) 隣語大方 朝鮮版八卷、四冊

この書は、雨森芳洲の交隣須知と共に、久しく本邦に於て朝鮮語學習の教本となつてゐるもので、明治六年對馬の浦瀬裕氏の翻刻したのがある。著者年代ともに不明であるが朝鮮文の方を日本語に譯した形跡があるのを見ると、本邦人の著作らしい。別に何等の順序も立てず、折にふれての考どもを並べたもので、先づ日本語を擧げ、次に一段下げて朝鮮譯を添へてある。その日本文の例だけを二三擧げて見れば

花より團子と申て、いかに絶景でも、ひだるしては面白かりませぬにより、食物なりとも、たんと用意いたして、行てこそ遊と申す。

一飽の食も在數と申するにより、今日存よらず此結構な御酒もりの場に參り合ひまするは、一方ならぬ仕合で御座ります。

假令他國でも、事の體は大事は同、小事は同じかりませぬけれども、言葉に

<p>八歲兒</p>	<p>한 이 시 한나라</p>	<p>한 이 시 한나라</p>	<p>자 이 치 자연하 八方이</p>	<p>평안하 러 품 그 한 빈</p>
------------	------------------------------	------------------------------	--------------------------------------	--



비시러 터 고이실제 분 바 카다라라 막
비시러 터 고이실제 분 바 카다라라 막

두편의빅빅이버려서시니 환터 치라 알자피
두편의빅빅이버려서시니 환터 치라 알자피

조흔계집이환도와창을치고 앓하피 주워 달바터 꼭 슴패다피 이리하비
조흔계집이환도와창을치고 앓하피 주워 달바터 꼭 슴패다피 이리하비

투와치 八의집안을보니 다하라 허허시 로호 기다
투와치 八의집안을보니 다하라 허허시 로호 기다

터러치 환터 순 푸진 이 분 이 도로
터러치 환터 순 푸진 이 분 이 도로

三譯總解第十

錦囊計趙雲救主



これも滿洲語の教科書で、全部會話體に出來てゐる。古くより行はれて居たものであるが、もとの書は、清の太宗が朝鮮を伐ちて南漢山城を陥れたときの役(仁祖の十四年西曆千六百三十六年)に捕虜となつて滿洲に行つたものゝ作で、時代と共に言語も變つた爲め、英祖の三十六年(西曆千七百六十年)咸興の譯學金振夏を會寧に遣し、滿人に就いて質疑せしめ、同王の四十年に版にしたのがこの新釋である。

(八) 重刊三譯總解 十卷 乾隆三十九年版

この書物の初版は康熙四十二年、即ち朝鮮肅宗の三十年である。滿洲軍入寇以來文書の往復等に語學の必要を感じ、小兒論、八歲兒等の譯書が行はれて居たけれども、まだ不十分なので、肅宗の七年に相國閔老峯が崔厚澤、李澈、李宜白に命じ、三國志を拔萃してこの三譯總解を作らしめた。その後歲月を経て漸次書冊も散逸し、言語にも異同が出來たので、かの金振夏がこれを校正し、乾隆三十九年(西曆千七百七十四年)、即ち英祖の五十年に改刊した

のがこの重刊三譯總解である。

(九) 翻譯滿語纂編 三輯六卷 寫本

本邦で編述した滿洲語の教本で、凡例に「夫此編を纂するは、滿洲通語修學の試業課目を設け、清文字母句首に置て語を成の要八十七字を撃げ、學人十四名に分派し、字母の次第に順ひ、每字二三句或は五六句綜計四百零二句の詞を譯編して冊を成し、翻譯滿語纂編と標題し、每歲抄本二三冊を公廳に進呈す、各自所得某字頭幾十句の下に其姓名を書載するは、此際修學開創の功を見ず爲なり」とあり、第一輯の卷首には嘉永四年辛亥仲秋、第二輯には嘉永壬子仲秋日、第三輯には嘉永六年癸丑季秋として清學參贊馮璞、鄭昌陳助の序文がある。なほ凡例の終に「現今清文翻譯創業の節、學者專心研究すると雖も、尙未だ其深界を指す事能はず、必ず後明の添削を俟而已、左に衆學者の姓名を列すとて、穎川君平、石崎次郎太、彭城助次郎、穎川藤吉郎、游龍彦三郎、彭城常三郎、穎川保三郎、鉅鹿太作、神代時次、彭城大次郎、鄭右十郎、彭城定三、高尾

翻譯滿語纂編卷之一

ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ク、ケ、コ、

鄭永寧譯編

ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ク、ケ、コ、
太陽、動キ、生シム者、夫、陽ト云フ、

ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ク、ケ、コ、
天安門ノ、内外ニ立、龍ノニキ

ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ク、ケ、コ、
龍ノ、高ク大石ノ柱ナ、擊天柱ト云フ、

宗三、蘆塚五郎助の名が署してあるのみならず、二十言鄭永寧譯編、三十言高尾延之譯編の如く、一々蒐集した人の名前を擧げてある。一語毎に、滿洲語の右側に片假字で發音を注し、その下に滿洲語で説明を添へ、これには漢字片假字混りの譯文が加へてある。第三輯の初に載せてある人名を見ると、更に官梅源八郎、吳碩三郎、早野新次郎、彭城助次郎、蔡恆次郎の五名が増へて、穎川君平、彭城助次郎、穎川藤吉郎、彭城常三郎の四名が減つてゐる。前後四年の間に多少の異動はあつたものと見えるが、要するに當年苦學の俤は歴然として残つて居るのである。

(十) 翻譯清文鑑 三卷 寫本

これも前項の諸氏の手になつたもので、序文は鄭永寧、増補の序は彭城昌宣、彭城廣林の譯述である。惜いことには、たゞ一二の兩卷だけより無い。朝鮮には、この清文鑑の譯が全部十五卷の刊本であるが、残念ながら、自分はまだ見たことがない。

18581

國語の研究

國語の研究 終

三

製複許不

所 捌 賣 大

町卷鶴區込牛市京東

店 支 館 文 同

町本城京鮮朝

房 書 韓 日

町後備區東市阪大

館 文 寶

町保神表區田神市京東

堂 京 東

町田梅東區北市阪大

館 文 盛

刷印日 一月二十年三十四治明

行發日 五月二十年三十四治明

印 發 著

刷 者

行 者

者 者

東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
中野 鑛太郎

東京市神田區表神保町二番地
森山 章之丞

金澤 庄三郎

國語の研究

定價金壹圓貳拾錢



所 發 行

館 文 同

地番二町保神表田神市京東
五三一替振、七三四、九三五一局本話電

所 刷 印

社 會 式 株 刷 印 洋 東

町 宕 愛 區 芝 市 京 東

(100-1)

文學士 保科孝一 著

國語學講義

定價貳圓四拾錢
郵稅金拾六錢

國語科は小學校に於ける最も重大なる基本學科にして之が進歩と改良とは國民教育の一大發展を示すものなり而して之が進歩と改良とは國語學上より計畫せざる可らず保科先生夙に茲に見る處ありて本書を著はして國語學上先づ國語問題を解決するの必要と方法とを詳論し國語教授上の改善と進歩とを促さんとすは必ず一讀せざる可らざる近來無比の好著なり

國學院 高橋龍雄 著

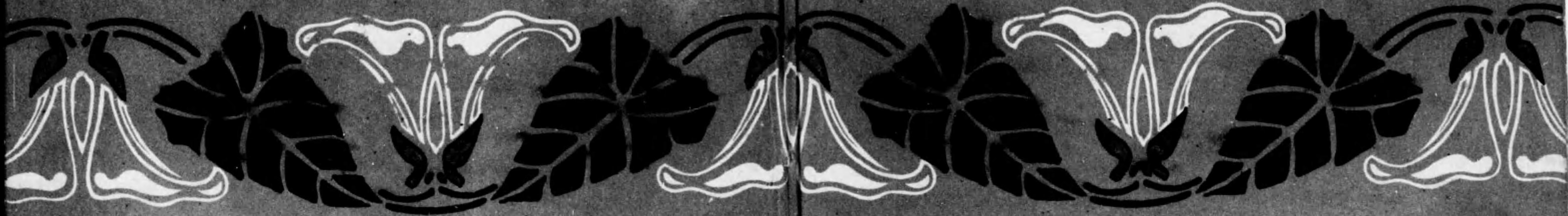
世界文字學

定價壹圓五拾錢
郵稅金八錢

漢字廢すべきか、羅馬字用ふべきか、假名遣改正を評すべからず抑も亦教育の任に當るべからず、本書は世界各國の由來漢字の利害を速記、信號及新國字數種を說明し、述別の特殊文字、即ち盲人用、電信、速記、信號及新國字數種を說明し、文の迷論、假名文字の由來漢字の利害を速記、信號及新國字數種を說明し、比較評論したり、將來の日本國字及中學教師の著作中の珍書、出で、紛々擾々たる因りて論断したり、又小學校及中學教師の著作中の珍書、出で、紛々擾々たるし、教育家に向ひて文字論に就て、本書は世界の著作中の珍書、出で、紛々擾々たる國字論は全く解決せられたり、就て、本書は世界の著作中の珍書、出で、紛々擾々たる語國字界の改革者たり

東京神田 同文館發行

各埠學校圖書館納本調達
石山堂書局
石古松坂屋前



10-1

終